

諸宗教対話

イメージソング

長崎の祈り

作詞・作曲 野下千年

Andante devoto

mp *mf*

きよ う か い と て ら と じ

5 *mp*

ん じゃ の お と わ ー し ー て き よ ら ー に ー

9 *mf* *mp* *mf*

あ け る な が さ き の あ さ へ い わ を

13 1. *mf* 2. *mf*

い の る な が さ き の ま ち きよ ち へ

17 *f* *mf* *f*

い わ を つ げ る な が さ き の そ ー

21 *riten.*

ら



「長崎の祈り」
 作詞・作曲 野下千年

教会と寺と神社の 音和して
 清らに明ける 長崎の朝
 平和を祈る 長崎の街
 平和を告げる 長崎の空

※本曲の混声四部合唱譜(ピアノ伴奏譜付き)、およびフルートを含む弦楽五重奏曲譜(いずれも編曲:新垣壬敏氏)の楽譜とCDがあります。ご希望の方は以下までお問い合わせください。
 カトリック合唱団(代表:川脇095-824-3535)ノルンペニー合唱団 神崎 正弘095-844-1675(法生寺内)

「広報ながさき」 田上長崎市長のコラム

※「広報ながさき」2014年4月号 NO.759」に掲載させて頂きました。

田上市長の ホッとトーク

自らの思いを皆さんに語るコラム

●今月のテーマ

宗教者懇話会

ゴーン、カーン・・・窓を開けると、お寺と教会の鐘の音が重なるようにして部屋の中に飛び込んできます。

南山手では、さるくガイドさんが参加者を「祈りの三角ゾーン」に案内します。そこは神社とお寺と教会が同時に見える場所。「ここで願い事をする」と、三つのうちのどれかが叶えてくれる・・・かもしれないと参加者を笑わせます。

どちらもお寺や神社や教会が、暮らしの中に溶け込んでいる長崎らしい光景です。

* * * * *

長崎は江戸時代とその後、宗教

同士がせめぎあい、排除しあった場所でした。お寺が破壊されたり、逆に教会が焼かれたりした歴史を持っているまちなのです。世界遺産を指している教会群も、そんな歴史の中から生まれてきました。

その長崎に今、いろいろな宗教の皆さんが一緒になって活動している団体があります。長崎県宗教者懇話会といいます。

懇話会の野下千年会長が自ら作曲した宗教者懇話会のテーマソングがあります。「長崎の祈り」といいます。

教会と

寺と神社の	音和して
清らかに明ける	長崎の朝
平和を祈る	長崎の街
平和を告げる	長崎の空

懇話会のメンバーは、日ごろからさまざまな活動を一緒にしています。

3月には東日本大震災の犠牲者と被災者のために祈る式典も開きました。

その代表的な活動の一つが原爆殉難者慰霊祭。もう40年以上続いています。毎年8月8日の夜、原爆落下

中心地が集まり、原爆犠牲者の慰霊と平和のためにともに祈りを捧げるのです。

数年前、懇話会の皆さんがトルコに出かけました。そして、イスラム教の礼拝堂であるモスクに、それぞれの装束で入っていききました。違う宗教の人たちが一緒に活動していることに驚いたイスラム教の人たちは、翌年、長崎を訪ねてきました。そして、一緒に8月8日の夜に平和のためにお祈りをしました。

* * * * *

人間は宗教の違いのために戦争をすることがあります。だからこそ違う宗教の皆さんがともに活動する姿

は、そのまま強い平和のメッセージになります。

同時に、宗教者懇話会の活動は、とても長崎らしいと思います。互いの違いを受け入れ、同じところを大切にしようというのは、長崎の根底に流れる文化だと思うからです。それは「平和の文化」といってもいいのではないのでしょうか。

そういえば、宗教者懇話会のメンバーの中には「高校はミッション系でした」という住職さんが何人かおられました。同級生に神父さんがいるそうです。これも長崎らしいな、と思いました。やっぱり長崎は平和をつくるまちだと思います。



▲広報ながさき 2014年4月号 NO.759

和華蘭(わからん)で
平和を願う長崎の宗教者たち

※「光源寺新報」97号 平成27年1月1日発行より転載させて頂きました。



前任職 長崎県宗教者懇話会理事
楠達也



原爆落下中心碑を囲む
宗教者・市民たち

カトリックの神父・野下千年様が
作詞・作曲され、制作されたCD
「長崎の祈り」の歌詞には、

♪教会と寺と神社の
音和して
清らに明ける 長崎の朝
平和を祈る 長崎の街
平和を告げる 長崎の空
とあります。

「長崎県宗教者懇話会」が誕生し

て四十年。この懇話会は、寺町・大音寺先代ご住職で長崎市仏教連合会会長を務めた本原邦堂師(故人)のリードによって発足しました。その後、諏訪神社・上杉千郷宮司(故人)、カトリック司祭の野下神父へと受け継がれ、会の活動は年々輪を広げていきます。



▲第42回 原爆殉難者慰霊祭 「長崎の祈り」合唱

「長崎原爆の日」の前夜に勤められる「原爆殉難者慰霊祭」、思い出に残るのは三年前の平成二十四年八月八日の「夜のつどい」のことです。原爆落下中心地の周りに、仏教、神道、キリスト教、この他にイスラム教、ユダヤ教、立正佼成会、天理教、PL教団をも含む諸宗教が一堂に会しました。そして爆心地公園いっばいに讃美歌、讃仏歌、雅楽が流れ、また諏訪神社の巫女さんによる「浦安の舞」が奉納され、最後は「長崎の鐘」の大合唱で締めくくられると



▲第42回 原爆殉難者慰霊祭 天理教長崎教区雅楽部



▲第40回 原爆殉難者慰霊祭ポスターより 平成24(2012)年

いう、何とも言えない心の安んずる一夜でありました。

このように毎年、八月八日、原爆の日の前夜は、不思議な時が流れています。しかし、新聞、テレビ等で、このひと時が報道され、放送されることは地元紙を除きほとんどありません。なぜ?と首をかしげます。「いのちを大切に・平和・反戦・反核・世界平和」を念ずるこの集いは、もっと市民全体に知られてもいいと思います。長崎でなければ発信できないこの響きを、もっと大切にしたいものです。

長崎県宗教者懇話会40周年記念誌

平和への祈り もくじ

被爆69周年第42回原爆殉難者慰霊祭・1 / 長崎県宗教者懇話会 活動の記録・6 / 諸宗教対話イメージソング「長崎の祈り」・16

祝辞

22

発刊の挨拶

26

第一章

会員寄稿

長崎県宗教者懇話会 四十周年に寄せて

29

第二章

平和巡拝・慰霊の旅

87

田中 恆清 (世界連邦日本宗教委員会会長)・22
 月下 美孝 (広島県宗教連盟理事長)・23
 田上 富久 (長崎市長)・24
 高見 三明 (カトリック長崎大司教区大司教)・25

野下 千年 (長崎県宗教者懇話会会長)・26
 神崎 正弘 (長崎県宗教者懇話会専務理事)・28

一月 正人・30 / 岡 保夫・31 / 田平 樹男・32 / 神崎 正弘・33 / 小田 義海・35
 吉谷 大憲・36 / 橋本 勲・38 / 楠 達也・39 / 田邊 治郎・40 / 池田 剛康・41
 三浦 達美・42 / 正木 慶晴・44 / 森 良昭・48 / 茨木 兆輝・49 / 有馬 英昭・52
 松尾 法道・53 / 本原 大義・54 / 雲山 暁春・55 / 加藤 正行・57 / 三角 紘容・58
 梶山 祐弘・59 / 山下 秀憲・60 / 田谷 昌弘・61 / 長谷 功・62 / 小瀬良 明・63
 デ・ルカ・レンゾ・64 / アンтониオ・ガルシア・65 / 下窄 英知・66 / 久志利津男・67
 藤井 清邦・68 / 今村 豊親・69 / 今村早紀子・70 / 田中 基世・71 / 伊勢 千里・72
 小原 敬正・73 / 大岩 光紀・74 / 大淵光一郎・75 / 久保田芳晃・77 / 堤 祐敬・78
 前田 敏博・79 / 岩本 孝義・81 / 宮田 文嗣・82 / 糸谷 典也・83 / 横山 元一・84
 野下 千年・85

終戦五十周年 広島・長崎宗教者平和巡礼・88
 広島・長崎宗教者カンチャナブリ戦没者慰霊法要の旅・90
 終戦六十周年 広島・長崎宗教者パチカン・イタリア平和巡礼・93

第三章

原爆殉難者慰霊祭

113

第四章

宗教・国境を越え
平和交流と貢献

141

第五章

メッセージ・書簡等

153

第六章

報道各社の掲載記録

159

第七章

長崎県宗教者懇話会資料

179

インド仏跡とキリスト教関連施設等巡拝の旅・97
トルコ・イスラームへの巡礼・平和交流の旅・106
妙行寺・諏訪神社一行のトルコ・イスラームへの表敬訪問・108
かくれ念仏遺跡巡拝・111
終戦70周年事業バチカン・スペイン平和巡礼の旅(予告)・112

原爆殉難者慰霊祭ポスター(昭和60年〜平成26年)・114
被爆69周年第42回原爆殉難者慰霊祭次第・121
原爆殉難者慰霊祭慰霊のことは(平成17年〜平成26年)・122

長崎県宗教者懇話会の趣旨・142 / WCRP世界宗教者平和会議・143
世界連邦日本宗教委員会・144 / ハワイ・真珠湾開戦慰霊式典への参加・146
平和の祈りアッシジから比叡山へ・148 / 広島・長崎宗教者平和会議・149
アジエンダNOVAながさき・150 / トルコ共和国・イスラームとの交流・152

灌仏会(花祭り)へのバチカン教皇庁からの祝賀メッセージ・154
神道と日本の皆さまへ、バチカン教皇庁からの新年祝賀メッセージ・155
ケネディー米大使からの感謝状・156
トルコ・イスタンブールのイスラム教指導者たちへの招待状・157
被爆70年の声明―第30回広島・長崎宗教者平和会議・158

報道各社の掲載記録(昭和49年〜平成26年)・160

歴代会長並びに初代顧問・理事事務局長の事績・180
活動のあゆみ(昭和47年〜平成26年の年表)・186
長崎県宗教者懇話会規約・196 / 長崎県宗教者懇話会役員・会員名簿・198
長崎県宗教者懇話会創立当時の会員名簿・201
長崎県宗教者懇話会協力会員名簿・202 / 原爆殉難者慰霊祭実行準備委員会名簿・203

補足：本誌では以下の様に名称を略してある箇所があります。

宗懇(長崎県宗教者懇話会) / 8・8慰霊祭(原爆殉難者慰霊祭) / 明社協(長崎県明るい社会づくり運動推進協議会)
日宗委(世界連邦日本宗教委員会) / WCRP(世界宗教者平和会議)

祝辞



世界連邦日本宗教委員会会長
石清水八幡宮宮司

田中 恆清

長崎県宗教者懇話会の発足四十周年を心よりお祝い申し上げます。
これもひとえに神仏のご加護はもとより、長崎県宗教者懇話会の皆様のたゆまぬ努力とゆるぎない信頼関係の上に成り立つ宗教協力の輪によることと衷心より敬意を表する次第です。

長崎の地は、歴史上、我が国にとって特別な地であります。鎖国時代は唯一の異文化交流の地でありました。昭和二十(一九四五)年八月九日、長崎の方々は決して忘れることのできない被爆という辛い体験をし、今なおその傷が癒えることはありません。

私は毎年八月八日に長崎県宗教者懇話会主催にて斎行されている殉難者慰霊祭に長年参列させていただいておりますが、時代の流れは大きく移り変わってきました。目まぐるしく、大量に溢れ出す情報に翻弄される今の社会において、ゆるぎない信念と本物を見極める力を持ち続けることは決して容易なことではありません。

当然のことながら、時のながれとともに、人も変わってゆきます。

しかし、長崎県宗教者の皆様の熱意と宗旨・宗派を超えた互いの信頼関係は常にゆるぎないものであり、明るく前向きに、そして誰しも分け隔てなく平和への活動に取り組むお姿を見ました。

平和への道のりは決して平坦なものではなく、険しい道のであることは言うまでもありません。そしてその志を維持し活動を続けていくこともまた決して容易にできることではありません。その中において四十年もの長い間、多くの苦難を乗り越えて心ひとつに様々な活動に取り組んでおられるお姿に重ねて深く深く敬意を表する次第であります。

今後益々私たち宗教者の使命と役割が問われるなか、宗教者が宗旨・宗派そして国境を越えて心ひとつに協力の輪を広げ、すべての人々に心豊かな世界が訪れるよう更なるご尽力を賜りますようお願い申し上げます、お祝いの言葉といたします。

お祝いの言葉



広島県宗教連盟 理事長

月下 美孝

長崎県宗教者懇話会の設立四十周年、心よりお祝い申し上げます。皆さまが、それぞれの宗教の壁を越えて、平和を求める意思を共にして、歩まれてこられたことに、心より敬意を表します。

広島と長崎は、原子爆弾の悲劇を経験しました。一発の原子爆弾によって、愛する人が、愛する家族が、人間の尊厳を奪われた姿に変えられ、殺されていきました。今も後遺症に苦しむ被爆者の呻きが聞こえます。広島と長崎に住む宗教者は、この悲しみ、呻きを忘れることはありません。原爆にとどまらず、人間同士が殺し合う戦争は本当に恐ろしいと感じています。

広島と長崎では、「命に寄り添う」宗教者が、被爆地であることにおいて平和への祈りを共有し、活動してきました。特に、広島県宗教連盟と長崎県宗教者懇話会は、広島と長崎を交互に訪れ、平和会議を重ねてきました。被爆七十年にあたる二〇一五（平成二十七年）二月に広島で開催される平和会議は三十回目にあたります。この平和会議において、「被爆七十年の声明」を採択し、核兵器が二度と使われないこと、核兵器の廃絶への声をあげることが世界の人々に呼びかけることにしました。これからも、長崎県宗教者懇話会の皆さまと共に、この使命に向かって歩んで参りましょう。

祝辞



長崎市長
田上 富久

この度、長崎県宗教者懇話会が昭和四十七年の発足以来、四十周年の記念の年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げますとともに、記念誌の出版にあたり、長崎市民を代表してごあいさつを申し上げます。

長崎県宗教者懇話会におかれましては、設立以来、各宗教間の交流や平和運動への連帯を図っていただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

会員の皆さまの永年にわたるご労苦に対しまして、会員相互の結束をさらに深められ、地域社会並びに長崎市政発展のため、なお一層のお力添えを賜りますよう、よろしくお願いいたします。

さて、被爆地長崎は、核兵器の廃絶はもちろん、世界平和を願ってまいりました。

長崎は、長い歴史の中で多様性を認め合い、交流をし、融合し、互いに共存する道を選択する風土を築いてきました。毎年八月八日の夕べに、落下中心地において信仰が異なる多様な宗教者の皆さまが一同に会して、原爆殉難者を追悼し、平和を願う慰霊祭を執り行っている光景は、世界の人々に多くの勇気を与え、平和の実現の方法を指し示しています。

今後とも、ここ被爆地から核兵器廃絶の世論を喚起するため、平和のメッセージを発信し続けていただくようお願いいたします。

終わりに、長崎県宗教者懇話会の今後ますますの御発展と、野下千年会長をはじめ会員の皆様方の御健勝と御多幸を祈念いたしまして、私のお祝いの挨拶といたします。

ごあいさつ



長崎県宗教者懇話会顧問
カトリック長崎大司教区大司教

高見 三明

長崎県宗教者懇話会が今年創設四十周年を迎えることができ、まことに喜ばしい限りでございます。そもそもこのような諸宗教者の懇話会を思いつき、かつ実践された先達の諸先生方に敬意を表し、感謝を申し上げます。

またこの「懇話会」なるものが、四十年にわたって継続し発展してきたことを大変意義深く思います。これは、限られた地域での、極めてささやかな集団の動きではありますが、さまざまに異なる宗教を信奉する指導的立場の人々が互いの宗旨を尊重しつつ、平和という同一の目的のために共に祈り、共に歩むという事実を世に示して来たからです。平和は、それをつくる人がいなければ実現しません。その意味で宗教者懇話会の存在と活動には価値があると思います。

人類の歴史を通して、諸宗教の間、同じ宗教の間、そして同じ人間の間で分かれ争うことがしばしばでしたし、今もその状況は変わりません。本来人間は互いに認め合い、受け入れ合い、理解し合い、信頼し合うことで喜びと平安を味わうことを求めています。

しかし、利己主義のため、憎しみ、分かれ争い、その結果苦しみや悲しみを生み出しているのが現状です。だからこそ、いずれの宗教も、神仏の教えに基づいて人間の尊厳を尊重し、そこから派生する諸権利を擁護するはずですし、もしそうするならば互いに兄弟のような関係を築くことは可能なのです。その実例の一つが長崎県宗教者懇話会だと思います。

今後は、広島県宗教連盟、世界連邦日本宗教委員会、世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会などとの連携を深めると同時に、真の諸宗教対話が信徒の間にも広がっていくことを願い、そのために努力をしていきたいものであります。

四十年の歩みを感謝して

平和・対話・祈りの輪



長崎県宗教者懇話会会長
野下 千年

このたび私どもの「長崎県宗教者懇話会」が発足四十周年を迎えることとなりました。これひとえに神仏の慈しみと、これまでに頂いた多くの方々のご支援によるものと心より感謝を申し上げます。

約半世紀前より宗教界に一大変革のときがおとずれました。一九六二年から六五年までローマで開催されたカトリック教会の最高会議であるバチカン公会議において審議決定され、世界に宣布された「信仰の自由宣言」や「諸宗教に対する宣言」などで現代世界における宗教のあり方に関して画期的な方針が打ち出され、バチカンは人類の幸福と世界平和のために、諸宗教は対立の壁を取り除き、宗教間対話による友好と協力関係の、積極的な推進を呼びかけました。この提唱は世界の宗教界に好感をもって受け入れられ、いち早く我が国の宗教者間に対話の機運が高まり、協力体制が芽生えはじめました。

日本では一九六九年、WCRP（世界宗教者平和会議）や世界連邦日本宗教委員会などが発足し、異宗教間の相互理解や連帯を旨とした組織的な平和研修や、平和祈願祭典、救援活動、災害犠牲者のための合同慰霊祭などが開催され、宗教協力の時代が到来し、海外の宗教者との交流も始まりました。

世界史においてもめずらしい時代の訪れ、ここ半世紀は近現代史における「宗教間対話の世紀」と称されるに値するものと思われれます。

こんな動きの中で、わが国では立成佼成会の提唱による「明るい社会づくり推進協議会」いわゆる「明社協運動」が各県単位に活動を開始しました。長崎の宗教者たちも、この運動の宗教者部会をつくり、明るい社会づくりの一翼を担うことになりました。また一九七四年十月末、世界連邦日本宗教委員会主催の第六回「平和促進全国宗教者大会」が長崎を会場に開催されることになり、明社協運動で顔なじみとなった宗教者たちが、この長崎大会の準備委員会をたちあげ、大会の成功に貢献しました。



▲駐日米国大使キャロライン・ケネディ女史を迎えて
浦上天主堂・平成 25 (2013) 年 12 月 10 日



▲パールハーバー記念式典出席のため、ハワイを訪れた

この大会から長崎の宗教者は大きな刺激を受けて、友好の絆を一層強めました。大会が成功裏に終わった直後、この友好体制を持続させようと、明社協宗教部門から独立し、同年十一月一日をもって「長崎県宗教者懇話会」を正式に発足させました。

本会の最初の活動として、毎年八月八日爆心地公園において「長崎原爆殉難者合同慰霊祭典」を催し、市民とともに慰霊と平和祈願を捧げました。この祭典は今日まで本会年間行事の核をなしています。

この行事には、これまで国内外からの来賓の参加がありました。米国ハワイからのアリゾナ艦国立記念公園の歴代管理長官、バチカンからの諸宗教対話評議会の歴代正副議長、歴代駐日バチカン大使、トルコのイスラム教宗教代表団、在日ユダヤ教共同体代表などです。また、

近くは昨年十二月、駐日米国大使キャロライン・ケネディ女史が、来日早々、公式任務の開始前にご自身の意向で、本会員との面会を求め、プライベートに来崎され、私ども宗教者懇話会の代表と親しくひと時の交流もってくださいました。これは、広島、長崎両被爆都市宗教者平和会議の連名で

オバマ大統領の第一期就任にあたり、祝賀の意をこめ「核廃絶プラハ宣言」の実現のため宗派を超えた祈りで支援するとの約束をしたためた手紙を送り、なおその中に大統領の早期来日と広島、長崎両都市を訪問の上、私達、諸宗教者とともに被爆地での平和の祈りを捧げてほしいとの要望も含めたものでした。新大使の長崎訪問は大統領の意向を含んだものと思われま。国内からは毎年欠かすことなく世界連邦日本宗教委員会、WCRP、新宗教者連盟の代表者も参列し、慰霊と平和の言葉をのべて下さいます。

この四十年の節目にあたり、世界平和への祈りを共にしていただいた国内外の友交諸団体や支援者の方々、地元行政や市民の皆様の御恩を深く心に刻みつけたいと思います。また本会初代会長、故浄土宗大音寺住職本原邦堂師、故第二代鎮西大社長崎諏訪神社宮司上杉千郷師をはじめ物故会員の方々の貢献に感謝し、御霊の安らぎをお祈りいたします。

「平和」のための「対話」と「祈りの輪」をモットーに「平和宣言都市長崎」「祈りの長崎」のシンボリック的存在として成長したく存じます。今後とも一層のご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。

発刊の挨拶



長崎県宗教者懇話会専務理事・40周年記念誌実行委員長
真宗大谷派真正山法生寺住職

神崎 正弘

平成二十四年の今年、五月は五月晴れの日にこの文を書き始めました。思い返しますと、この会が昭和四十七（一九七二）年に発足してから四十年の星霜を得ている。長く継続されて来たのに感服の限りで御座います。私は昭和五十八年の行事から参加させて頂いています。そして、先達のご苦勞を忍ばせて戴きました。

チャーター時の先輩も少なくなり、それぞれのお国に還帰されています。此の土よりも彼の土の方が賑やかな事でしょうねと思います。暫くして当方もお邪魔しますが。その前に私の記録、記憶の耳底に留まる時に、亦、関係者が生存の時に記念誌を制作しようとの話が纏まりました。

今回、ご縁が有って事業に参加する事と成りました。前後左右浅才非学も省みずに諸先輩方を飛び越し、会員諸師の皆様方の御協力と御支援とを条件にお願いをして、実行委員長を受けさせて頂きました。十数回の実行委員会を重ねて白紙状態からの船出で御座いました。文殊の知恵さながら御意見を賜り篤くこの場を借りて御礼を申し上げます。

この本を発刊するにあつては、大音寺先代の本原邦堂師の制作されたタイトル「長崎からのメッセージ、平和共生そして祈り 明日では遅すぎる。まず宗教者が隗より始めよう。」の本を参考にさせて頂き、その後編になるような書物になればとは思いつと考えを走らせています。

最後に、外護、内護は基より多数のご縁を頂き感謝します。投稿文、資料等提出下さいました皆様方にも同様に感謝申し上げます。この本が後世の資料となり、長崎の宗教者懇話会の歴史の一步になれば幸甚の事であります。

長崎県宗教者懇話会に神仏の御加護と神の祝福を祈念し巻頭の言葉として筆を置きます。

合掌

平成二十四年五月書

第一章

会員寄稿——長崎県宗教者懇話会四十周年に寄せて

入会以来の事を 振り返って



真言宗清水寺住職
一月正人

長崎県宗教者懇話会が発足したのは昭和四十七年（一九七二年）であり、長崎県内の各宗教、教団の代表者及び有志をメンバーとして発足し、世界平和への祈願を捧げ、平和問題等を宗教者として共通の意識で語り合い、研鑽を重ねていくことを目的としている。但し、小生はその頃まだ長崎に住せず、不知の組織になるわけだが、爾来四十年を経過している。

いつ頃からか分からぬものの、懇話会の存在、活動活躍については人づてによく聞いていた。小生がこの組織への入会勧誘を受けたのは、平成十四年頃ではないかと思う。その年に長崎市仏教連合会の会長を前会長の大光寺ご住職三浦達美師の後任として任命されたが、同時に仏教会の代表者として、何度となく入会をすすめられた。その記憶が未だ強く残っている。

入会后、まず心にとまったのが、仏教会

は勿論だが、神社、キリスト教、立正佼正会、PL教団等々の代表者、メンバーが一致協力して行事に当たっている姿勢であった。

印象に強く残っているのは次のことである。

(一) 長崎に原爆が投下された八月九日前日の投下地点における原爆殉難慰霊祭執行に向かつて一致協力する姿。

(二) 浦上天主堂において、各宗教、各宗派でそれぞれの方式で「平和の祈り」が行われたこと。

(三) 長崎市大橋野球場でのキリスト教の列福式に参列した時のこと。

小生は東京都内の寺院の住職も兼ねているが、その寺院内にキリスト教信者の墓石がある。その信者の葬式の時、葬儀を執行した神父に長崎における「平和の祈り」、



▲清水寺 本堂へ続く階段

「列福式」の話をし、我々も執行、参列したとの話に、神父は大変驚愕の言を発せられた。長崎での他宗教の行事に他宗派の人達が参列協力することは、他の地域社会においてはあまり見られないことである。

長崎県宗教者懇話会は主旨、宗派をこえて、毎年純然たる宗教行事の一つとして、原爆殉難者者慰霊祭を行ってきた。今年、平成二十五年でその四十一回目を行った。そして懇話会結成四十年を過ぎた今、将来に向かっても、会の趣旨を維持活動していくべきと思っている。心一つにして行ってきた故に。

平和な日々を 祈ります



長崎県護国神社宮司
岡 保夫

神社神道の世界人類が和でありますよう、
日毎の祈りの一部を紹介しましょう。

まず、神社本庁は、伊勢の神宮を本宗と
仰ぎ、全国八万の神社を包括する宗教団体
である。その目的は包括の神社の管理と指
導を中心に伝統を重んじ、祭祀の振興や道
義の高揚をはかり、祖国日本の繁栄を祈念
して世界の平安に寄与することにある。

神社本庁には敬神生活の綱領がある。敬

神生活の綱領とは、神道は天地悠久の大道

であって、崇高なる精神を培い大平を開く
基である。神慮を畏み祖訓をつぎ、いよいよ
道の精華を発揮し人類の福祉を増進する
は、使命を達成する所以である。ここにこ
の綱領をかかげて向かうところを明らかに
し、実践につとめて以て大道を宣揚するこ
とを期する。

- 一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き
清きまことを持って祭祀にいそしむこと
- 一、世の為人の為に奉仕し、神のみこと
もちとして世をつくり固め成すること

一、大御心をいただきてむつび和らぎ国
の隆昌と世界の共存共栄を祈ること

これが神社に仕える神職に求められる真の
精神教養であります。

長崎県宗教者懇話会も早や四十周年の歳

月を迎え、記念誌の出版は、後世に懇話会
の活動などの記録を残すことで、後に続く
宗教者の道導となることと確信する次第で
す。平和の祈りが年を経るごとに、小さな
輪から大きな輪となり、世界人類が平和な
生活を出来る事は何ものにも代え難きもの
であります。

八月九日の原爆殉難者の慰霊の祈りでは
聖職者達が、年毎慰霊の言葉を申し上げる
中で大雨となり、ずぶ濡れになりながらも
御霊の安らかならん事を祈ったこともあり
ました。

昭和天皇は、昭和八年に御製「朝海」と
題して

朝海

あめつちの 神にぞいのる朝なぎの

海のごとくに 波たたぬ世を

と、歌われています。戦争や紛争のなき世
を望まれていた事がわかります。

八月九日の原子爆弾投下による犠牲者の
御霊を慰めながら、二度とこのような惨事
が世界からなくなり、平和な日々を送れま
すように祈ります。



▲長崎県護国神社

長崎県宗教者懇話会 発足四十周年に よせて



立正佼正会長崎教会会長
田平 樹男

長崎県宗教者懇話会発足四十周年を迎え、会員として末席に身を置かせて頂いていることに深く感謝いたしております。

世の中の歴史や、個人の過去について「もしあの時」という仮説を立てても、過ぎ去りし事象は変化することはないのです。私は新潟県の長岡教会に四年間布教伝道の



▲立正佼正会長崎教会 正門

お役を頂いていましたが、遠い長崎にその役を頂くとはい夢にも思っておりませんでした。もし同じ九州でも他県の教会であったら宗教者懇話会の諸先生にお会いする機会に恵まれることはなかったと思います。この長崎で導き深きご縁を頂くことが出来た不思議さに感謝いたしております。

四十年の歴史を築く陰には、故人となられた大先輩の皆様はじめ、今日なお、宗懇をさまざまな角度から支えておられる各宗教の大先輩の皆様のご尽力の賜物以外ありません。宗懇の活動が今日まで長続きしてきたのは何故なのでしょう。その元となっているのは、会議や懇親会の席上でも忌憚のない意見を述べ合う大先輩の平和に対する真摯な取り組みこそ、長続きの秘訣と私は確信しています。

さて、立正佼正会長崎教会も、四十年の間に七人の教会長が宗懇の皆様とご縁を頂

きました。宗懇発足に力を注いだ初代教会長故長浜州男氏、その後その精神を引き継いだ八木幹典氏、西基之氏、野田頭正浩氏、村上泰将氏、岡原良之氏であります。すでに本会の役職を退任し、地元で活躍されている方、また、現役として役を続けている方々、長崎から離れてもなお、宗懇に深い関心を持ち、宗懇で培った平和の理念に基づいて活動しています。私も先輩諸氏の志を引き継ぎ、微力まで及ばない人間であります。宗懇の活動に精一杯精進させていただきます。と願っております。

今後百周年、二百周年、さらに永久に千年杉の年輪の如くその輪が広がることを心から念じる次第であります。

ひびけ長崎の鐘 日本の大空に
そして 世界の隅々まで

合掌

宗懇回想録



真宗大谷派法生寺住職
神崎 正弘

長崎県宗教者懇話会は昭和四十七（一九七二）年、県下の各宗教者及び有志をメンバーとして発足しました。「世界平和への祈願を捧げ、平和問題、教育問題、道徳、社会問題を宗教者として共通の問題として語り合い、研鑽をする」テーマをもって始まったとあります。

行事としては、

・長崎少年武道大会

この大会参加者から、バルセロナオリンピック柔道銅メダリスト坂上洋子氏を輩出しています。

・原爆殉難者慰霊祭

・長崎・広島宗教者平和会議

この会議は毎年二月に交互に開催され現在も継続されています。原爆五十周年、六十周年にはイタリア、パチカン市国を巡礼致した。来年七十周年には三回目の訪問を計画しています。広島の連盟の方々も行か

れる予定です。（この当時は「長崎県明るい社会づくり運動」も盛んで御座いました。）

当方は昭和五十八（一九八三）年八月八日のハワイ真珠湾のアリゾナ記念館より、カミズ館長が来館された「原爆殉難者慰霊祭」から参加しています。翌五十九年三月にはソ連宗教者使節団を迎えての会議がありました。

当日は長崎東急ホテルで開催され、参加者は一般の方、在家の方数名でした。野下神父様も参加され、私の隣に座しておられました。その時ハプニングが起こりました。強烈でありました。しかしながらここでは省きます。野下先輩も忘れない事と思えます。海外、国内等の宗教施設も沢山巡拝を致しました。沢山の思い出がございます。

平和への祈りのポスターは、第一回目は昭和六十（一九八五）年で平和記念像前にてカラーで作成されて十三名参加されてい

ます。次年度は会員が欠けていないのでそのまま使用されたと思います。昭和六十二年、浦上天主堂前にて十八名参加されています。当方も初めて参加させて頂きました。その後はオール出席です。ポスターは資料として提出し、ポスター年号も資料として提出いたします。平成二～三年（十八名）、平成五～六年（十七名）、平成七～八年（二十二名）同様のポスターが使用されました。

長崎の宗教の歴史は大変な時代が在りました。血と汗と涙の結晶の歴史を過ごした時も御座いました。約四百年間の苦渋でありました。再度繰り返すことが無いようにDNAが組み込まれているように思います。ご当地には隠れキリシタン、鹿児島には隠れ念仏が御座いました。諸宗教の開祖の皆様もご苦労があったと聞いています。だから大事に大事にしていかなければならないという思いが心の深層にあるから、懇話会が出来たのだと私は思っています。

先頃亡くなられた大神元宮さんが「サロン」と一言で表現されていました。私は数学にある最大公約数と言っていました。話し合える場所を見出してやれば良いと。



▲ネパールの寺院にて 平成20(2008)年2月

懇ろに話し合う場所、それこそ懇話会でしょう。

共に生きていくこと、共に話していくこと、共に和していくこと、共に神仏を崇敬し合う世界を見出すこと、展開して行くことを祈念して、神や仏の喜びを私の喜びとし、又、神仏の悲しみも私の悲しみと受け止めて行ける私になりたいと思います。

平和への祈念が私の一部で終わりではな



来年の6月
長崎の宗教者がバチカンに行くと話したら
自分達(イスラムの人々)も一緒に連れて行ってほ
2014.09.27

▲NCC長崎文化放送に出演
タイトル「平和の祈り(宗教者たちの夏)」
平成26(2014)年9月27日



▲原爆殉難者慰霊祭で歌手の秋川雅史さんと
平成19(2007)年8月8日
※秋川雅史氏は2度参列していただき、「千の風にのって」
を奉納していただいた。

く、私の周辺の長崎、日本、そして世界に増幅されますように！ 拡散されますように！ 念じたいと思います。

先達、先輩諸氏の御指導と教訓を得て種々の経験、体験をし、視野を拡げさせて頂き感謝に堪えません。近年十年間に韓国、

中国、タイ、バチカン、インド、ハワイ、ネパール、トルコ、スリランカの宗教施設を中心に巡拝をいたしました。命のご縁があれば、イスラエル、エルサレム、シナイ山、中国の奥地五台山、敦煌、天山北道、南道シルクロードなど。

長崎県宗教者懇話会は「話」を「和」にして長崎宗教者懇和会はどうでしょうかね。私は和が良いと思います。

最後に一言。

私達の開祖聖人が和讃に恩徳讃があります。

如来大飛の恩徳は

身を粉にしても 報ずべし

師主知識の恩徳も

骨を砕きても 謝すべし

仏法広まれ 世の中 安穏なれ

合掌

共生の祈りと 相互理解で四十年



浄土宗九品院住職
小田 義海

品格ある国づくりと宗教者の世界貢献を理念とした明るい社会づくり運動推進協議会（明社協）の宗教部会から独立結成して、早や四十年が経過致しました。

以来、会員の相互理解の下、世界平和の祈りを実践のモットーに今日に至っています。毎年八月八日の「原爆殉難者慰霊祭」では、神道、仏教、キリスト教、諸宗教が交代で祈りの言葉を捧げ、巫女の舞（諏訪神社）、雅楽（天理教）、平和の灯（諸宗教、男女高校生）、コラボレーション・コーラス（カトリックとルンビニーと女子高校生）が式典に花を添えます。

又、広島、長崎両被爆都市宗教者との交流、世界連邦日本宗教委員会（長崎は世界平和宣言都市）や毎年、八月四日の比叡山世界平和祈りの集いへの参加、近年ではローマ法王庁枢機卿や、ロシアのチェルノブイリより代表神父の献花、一昨年からの遠

くトルコ、イスラム教の公式代表団も参加され、それぞれに敬虔な鎮魂と平和の祈りを捧げられました。

トルコ参拝団の実現には、法友の正木慶晴師（光永寺）と三角紘容師（妙行寺）の物心両面のご苦勞に負うところ大で、甚深感謝です。

更に本年の慰霊式典には原爆投下を命じた故トルーマン大統領の孫、クリフトン・トルーマン・ダニエルさん（五十歳）が家族と共に来日し、広島、長崎の式典に献花、黙祷を捧げました。

この来日はNPO法人SADAKO LEGASY（禎子レガシー、東京）の招きに依るもので、トルーマン氏は帰国後、広島、長崎への慰霊の旅を一冊子として上梓するとのことです。

慰霊式典への参加者は、年と共に若者を含めて増加し、平和意識の昂りを感じます。

終わりに、長崎県宗教者懇話会結成の原動力となり率先垂範のご指導を賜った物故諸師のご尊顔を偲びつつ、感謝の念を捧げます。

葉上照澄阿闍梨（東南寺前任住職・大津市

坂本）

庭野日敬師（立正佼正会開祖・明社協提

唱者）

長浜州男師（立正佼正会 長崎教会長）

大淵道開師（金光教 長崎教会長）

木原邦堂師（大音寺二十七世）

上杉千郷師（諏訪神社名誉宮司）

岩切正幸師（天理教 長崎教区長）

大神照彦師（諏訪神社前宮司・名誉宮司）

今後私は、萬教帰一、萬物同根を行動の理念として、次の五十周年へ向け、懇話会の皆様と共に、歩みたいと希っています。

合掌

共生の 平和の旅ぞ 夢みてし

四方の国へと 夢ひろげん

平成二十四年九月吉祥日

深山幽谷

— 禅は海を越えて



曹洞宗妙本寺住職
吉谷 大憲

先般、米国アイオワ州の禅寺・龍門寺から一枚の寺報『Dragon Gate』が届きました。その中に住職ワインコフ彰頭師の「深山幽谷」という短文が掲載されていました。

とです。」

米国からのたった一枚の寺報は、禅や宗教の真髄を言い表し、私はある種の感動を覚えました。

「龍門寺は、北米アイオワ州の深山幽谷に禅道場を建立するという誓願から生まれました。此の地は、夜は星が瞬き、コヨーテやふくろうの鳴き声が聞こえるだけです。人々は、その静けさに驚きます。しかし、

それは宗教者懇話会が発足四十周年もの長きにわたり、キリスト教、神道、諸宗教、仏教等のあらゆる宗教、宗派とも調和し受容してきた歴史的な事実と、一枚の寺報の一文とが符合するからです。

真の静けさは、どこにあるのでしょうか。仏陀が修行なされた道場とは、静寂な山林であったり、また騒々しい街中であったり、時と場所を選びませんでした。時と場所を選ぶ理由はどこにあるのでしょうか。

自己の立場にとらわれず、他の立場や状況とも調和し得た時、そこに真の静けさや真の宗教が現成するということでしょう。それがとりもなおさず宗教者懇話会の不変の理念のような気がします。

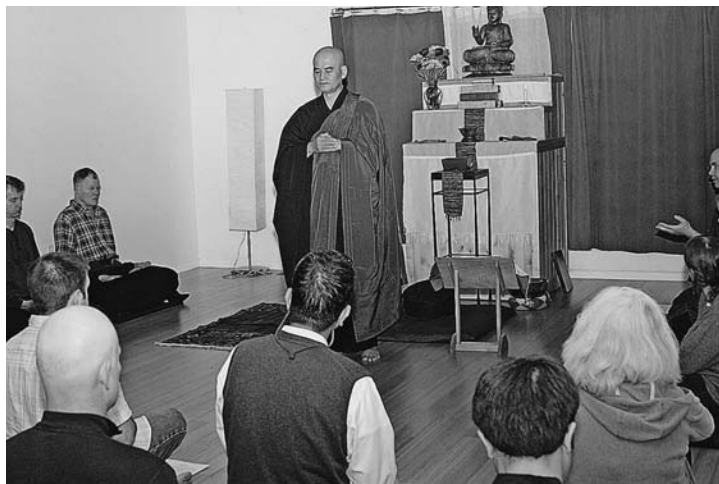
どこにいても、そこが深山幽谷です。真の静けさとは、自身の心と体を目の前にある、いかなる状況にも調和させるといふこ

さて、ワインコフ彰頭師の深山幽谷の念いの心底はいずこにあるのでしょうか。

彼は米国ミネソタ州において牧師から禅僧



▲アメリカ アイオワ州 龍門寺



▲アラスカ禅センター・禅の実践

に転身され、二十数年前に来日、熊本県菊池の国際禅道場「聖護寺」等で本格的な禅修行を積まれました。聖護寺は電気も届かない幽境の地で、まさに世間を離れて世間を知るべき底の厳しい修行道場で、主に欧米からの参禅者を受け入れています。そこで講師を二十年間つとめていた折に彼と出会いました。彼は常々「禅を通してアメリカと日本とのかけ橋になりたい」との念いを持っておられました。

アメリカに帰国後、篤信者より寄進された五千坪の牧場に本堂、庫院、坐禅堂をつぎつぎに建てられ、本年六月、最後の衆寮（宿泊施設）が竣工しました。まさにかけ橋の拠点としての禅道場「龍門寺」の伽藍がアイオワの深山幽谷の地に十二年の歳月をかけて完成し、今後益々かけ橋としての役割が盛んになることでしょう。

彼の深山幽谷の念いの原点は、前出の聖護寺でのランプとローソクの生活等の厳しい修行体験でした。彼の禅的及び宗教的感性は、まさにそこで育まれたのでしよう。

その聖護寺での様々なご縁で、私は海外の禅道場より要請を受け、アメリカ、アラスカ、アルゼンチン、ペルー等に赴き現地の参禅の士と共に禅を実践する貴重な機会を得ました。

それは、いかなる場所でもいかなる時でも調和の心があれば、そこが深山幽谷であり、またそれが道を伝えるかけ橋になるのかもしれない。

その調和の心こそが、平和の世界、平和な心を育む源泉となり、その心をあらゆる人々に伝えるかけ橋となるのが、次の五十周年に向かう宗教者懇話会のメンバーとしての役割と使命ではないでしょうか！



▲ペルー・リマ禅センター・禅の講話

月と日を重ねて



カトリック上神崎教会主任司祭
橋本 勲

月と日を重ねて「明」という字が出来上がります。われらが「宗教者懇話会」も四十年もの月日を重ねて、いよいよ明るく、世界に平和の原型を指し示しつつあること、まことにめでたく思います。

四十年のうち約半分の二十年間程参加しているだけですが、それでも計り知れないほど多くのことを学ばせて頂きました。学びの月日は大いに重なったのですが、紙面の都合上、その中のただ一点だけここに記して、四十周年へのお祝いとさせていただきます。

宗懇は毎年、広島ของ宗教者連盟の方々と交流を持っておりますが、かつてイラク戦争の頃、宗教者として自衛隊派遣に反対しようという提案が広島側からなされたことがあります。広島はそのことで衆議一致したというのです。

長崎側も活発な議論の末、みごとに一致

しました。ただしそれは自衛隊派遣に賛成ではなく、反対でもなく、第三の道の選択でした。

それは、それぞれの宗派の考え方や立場の違いが遠慮会釈なしに堂々と発言され、そのことによって決裂するのではなく、逆に、互いの一致を深めたことの確認でした。「先生、どんどん言わんですか。ただし、わたしや派遣には反対ですよ」。「わたしたちや賛成の立場です」。こんな意見が交わされて、その場全体はとても平和な雰囲気になりました。これを記憶しております。

よく「ちがって一つ」などということを言います。それは言うに易く行うに難しいことでもあります。宗教宗派の違いが違ったまま、一つである姿をあの時つくり上げ、ほんの小さな世界の片隅ではありましたが、これを指し示すことができたのではないかと思います。このことを、過日亡くなった

諏訪神社の前宮司、大神照彦先生は「わたしたちは人格において一致している」と言っておられました。

世界を見渡せば、悲しいことに、宗教同志、宗派同志がみ合っている現実の中で、安易な妥協でもなくその立場と主張を異にしなから、しかも同じテーブルに着いている姿は、まさしく世界平和作りの原点を指し示していると言えるのではないのでしょうか。

そのことの背景に、それぞれの宗教も宗派も絶対ではないこと、神仏のみが絶対であること、ひたむきに自分の信じる道を歩む者同志、深く揺るがぬ信頼が厳粛に支配し、同時に弱さと貧しさに包まれた人間へのいとおしみと謙虚さがあふれていることは言うまでもありません。まさに大神先生の名言「人格における一致」であります。これからも豊かな月日が重ねられていくことを祈念してやみません。

宗教者懇話会 のこと



浄土真宗本願寺派光源寺住職
楠 達也

思えば大音寺先代住職本原邦堂先生よりお声をかけて頂いた時には、何も解らないまま昭和六十一年二月十八日、東急ホテルでの第一回広島・長崎宗教者平和会議にオブザーバーとして参加させて頂きました。その時はただ変わった集団もあるんだなという程度でした。気がついてみると、いつのまにか宗教者懇話会と離れられないメンバーの一人になってしまっていました。不思議なものです。

ローマ、バチカン、アッシジ巡礼、そしてインド参拝。例年の広島・長崎平和会議、そして毎年八月八日の原爆殉難者慰霊祭と、日を重ねるごとにこの活動の大切さを感じます。平和・いのち・反核は宗派・宗教のセクトを超えてはじめて真の平和が開けてくるのだとの確信を得たようです。これからますます世は混迷し、大変な時代に突入しそうですが、こんな時であるからこそ、このつながりをしっかりと守り伝えていくべきと思っています。

皆様と共にますます努力・精進したいと念じています。



▲長崎市・平和公園にて 平成23(2011)年8月9日

神人和楽



天理教長崎教区長
田邊 治郎

天理教では、この人間と世界を創造した神を「親」とし、人間を「子」と位置づけ、神と人とが共に和し共に楽しむ陽気ぐらし、つまり「神人和楽」の親子団欒の世の中になることが人類創造の目的であると明示されております。

人間の欲望には限りがなく、地球全体を、自然現象も変えてしまうほどの消費と争いを繰り返して、日本も亜熱帯化してしまっていることを肌身に感じます。「自分さえ良ければ良い。人はどうなっても良い。今さえ良ければ、先はどうなっても良い」という人間のみの考え方が招いた結果であると思います。

人間だけの世界ならともかく、親なる神様が存在する世界であるとするならば、一日も早く、一人一人の人間が、親なる神様がお喜びくださる心に切り替えていかねばならない。具体的には、異質の者、異文化の者同士が、互いに相手を尊重し、立てあい、たすけあいをする心になるということでしょう。

世の人の心は、物欲と執着にまみれ、親なる神様の思惑とは、正反対の方向へ人生を歩み、代を重ね、年月を重ねてきている

ように思います。人間の苦悩の元は、人間の心が種となり現実と重なってくると教えられますので、人の心を癒し、心の豊かさや繁栄を教え導く宗教者の言動は、世の人々に重大な影響を与えるものと確信しております。宗教者の心と行い、言行一致が求められる時でもある。宗教者の日常が、祈りの時と場所を離れた時、人の悪口を言い、物欲に走るような行いをしていては、世の中は悪くなるばかりでしょう。

この宗教者懇話会では、原爆殉難者慰霊祭を主催しておりますが、これは、長崎県の宗教宗派の代表者が、異文化という一つの垣根を越えて、時と場所を共有し、被爆なさった人々の魂を鎮め、世界の平和を祈るものであります。たすけあいをさせる為に、異質の国や者を創造なさったという、本教の教義にも通ずるものでありますので、今後積極的に関わり、つとめさせていただきたいと考えております。政治や経済の混乱低迷から、震災、集中豪雨の被害などと、人心の不安極まる現代に於いて、今後、宗教者懇話会の活動が進化発展し、世の中の一筋の光明となっていくことを念願する次第でございます。



▲原爆殉難者慰霊祭で「お清めの儀」を務める田邊師
平成 26 (2014) 年 8 月 8 日

手に手を携えて



長崎県神社庁長
鎮西大社諏訪神社宮司
池田 剛康

長崎県宗教者懇話会発足四十周年を衷心よりお祝い申し上げます。

私ごとですが、平成二十五年六月一日付で神社本庁より長崎市諏訪神社の宮司の任命を受け着任いたしました。貴会には長崎県神社庁長として入会しておりましたが、庁務の関係で思うように出席できなかったことをお許しいただきたいと存じます。

貴会には、故藤本勝樹庁長・故上杉千郷庁長・故下條洋二庁長と長崎県神社庁の歴代の庁長が入会してご活躍をされ、中でも故上杉庁長（諏訪神社第二十三代宮司）には、貴会の発足当時より神社を挙げて協力し、その御功績は多大であったと聞いております。

さて、長崎の宗教文化は、江戸時代より外国の文化と触れあいながら発展してきました。神道では、諏訪神社の例大祭、「長崎くんち」に見られるように日本の「和」の

文化、中国の「華」の文化、そしてオランダを始めとする西洋の「蘭」の文化がうまく融合して素晴らしい絢爛豪華な祭典を作り上げ現在に継承されています。仏教では精霊流し、キリスト教では世界有数の教会群など、この長崎の地に於いて共同社会の共同信仰として根付いています。

宗教界においては、長崎県宗教者懇話会が取り組む「平和への祈り」「命の大切さ」などを中心に各宗教者が手に手を携えて活動を展開しています。この活動も宗教文化と同様に長崎らしさを象徴するものだと考えます。本年当会が発足四十周年を迎えるに当たり、発足当時の諸師の思いを今後も継承し、未来永劫に懇話会がご発展致しますよう衷心よりお祈り申し上げます。挨拶いたします。



▲諏訪神社 太鼓楼

バチカン 平和をを目指す姿



浄土真宗本願寺派大光寺住職
三浦 達美

ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が来日された際、過密スケジュールの中から特別な思いで訪問されたのが広島、長崎だった。広島、長崎は原爆被爆地であり、法王ご自身、原爆被爆の問題を深くお考えになっていたからである。我々の巡礼も法王がまずはバチカンから始まった。

諸宗教対話評議会で

最初に訪れたのは、バチカンの諸宗教に對する窓口である諸宗教対話評議会（以下、評議会）だった。

このあたりどれもそうだが、評議会の建物もかなり古めかしい。この二階にラファエロが住んでいた、とガイドが言う。誰かと思えば、ルネサンスを代表するあの大芸術家ラファエロである。思わず評議会の建物を上から下まで眺めなおした。

バチカンのもとより、ローマのどこへ行ってもしばしば、このような具合で、いたるところが生きた歴史の博物館と言ってよく、巡るほどに膨大な文化遺産に圧倒されることになる。近世歴史学の始祖ランケの有名な言葉「すべての道はローマへ通ずる」を思いだした。

評議会の中へ入る。すると意外なものが目についた。壁にかけてある「夢」という漢字の額である。よく見ると何と前の天台座主、山田恵諦師の書ではないか。一瞬、夢かと我が目を疑った。恵諦師は比叡山で宗教サミットを主宰するなど、諸宗教の対話に貢献された方である。それにしても異教には違いない仏教の高僧の書を、それも夢という文字を掲げているところに、評議会の立場が意味深く現されているように思えた。

外観と打って変わって、近代的な音響設

備が整った会議室で話し合いを行う。原爆被爆の問題について意見を交わした後、上智大学で教鞭をとったこともある評議会次官補の尻枝神父と、極東担当の次官補マチャード神父から、お話をうかがう。

評議会は、第二バチカン公会議の成果の一つだが、対話の焦点は平和だという。困難な諸宗教との対話も焦点を平和に定めることによって、可能なはずだともいう。なるほど、我々が宗派を超えて対話を続け、今回はるばるヨーロッパまで同舟の巡礼を挙げてきたのも、まさに平和への思いで結ばれているからではないか。

当日あいにく重要な公務のため、不在だった評議会长官アリンゼ大司教が託された「あなた方のヨーロッパ巡礼の旅が、バチ



カンから始まったのはまことに意義深い」というメッセージをかみしめながら、評議会をあとにした。

サン・ピエトロ大聖堂で

法王に謁見するため大聖堂へ向かう。壮大な伽藍を仰ぎ見ながら、中へ入ると堂内はすでに満堂。広島・長崎の宗教者として、最前列の特別席を頂く。

近くでポーランドから来た女性のコーラスが、美しいハーモニーを響かせている。優先席に導かれた身障者の人達が、敬虔な祈りを捧げている。

いよいよ法王のご入堂である。全世界カトリックの頂点に位する最高位の聖者に謁見すると思えば、やはり緊張を覚える。

ところがである、法王は我々の緊張を一挙に解きほぐすかのように、むしろ飄々とした感じで入ってこられた。この種の催しにありがちなコケおどしの類は何もない。古典的衣装をまとったスイス人傭兵の優雅なパフォーマンスがあるだけである。以前、狂信的な凶漢に銃弾を撃ち込まれ大手術の結果、九死に一生を得た法王だというのに、

警備はいたって緩やかである。シークレットサービスはいるのだろうが、文字通りシークレットで表には見えない。

だから、謁見はいたって和やかな雰囲気で行われた。壇上から各国の言葉で歓迎のメッセージをお述べになると、歓喜の輪が堂内に広がった。

壇から降り立たれた法王は三末神父（巡礼団団長）と何やら話をされた後、親しく我々のところへ歩を運ばれる。羽織袴に威儀をただした上杉宮司（副団長）が、広島・長崎の各市長から預かったメッセージをお渡しする。そして、我々も一人一人温かい握手を頂いた。

ところで、眼前に接するご温容の法王について、忘れてならないことがある。それは、法王がバチカンの先頭に立って、いかに懸命に世界平和の実現に取り組んでこられたかということだ。

私の貧しい知識の範囲でも、旧ソ連や東欧自由化の重要な契機となったゴルバチョフとの会談など、法王にそのような平和への積極的な取り組みを促すものは何か。それは、第二バチカン公会議以来のバチカンの路線もさることながら、やはり、法王ご

自身の戦争体験や祖国への思いが大きな比重を占めているに違いない。

法王の母国ポーランドは、アウシュビッツ収容所やカティンの森の存在が物語るように、第二次大戦でも最も過酷な戦争体験を強いられた国である。もともと演劇専攻だった多感な若き日の法王の、戦時の苦痛苦悩は想像にあまりある。原爆被爆の問題を深くお考えになる所以も多くここにある、といえるだろう。

感動に包まれながらも、以上のような思いが脳裏を去来するうちに謁見は終わった。長いような短いような、名状しがたい貴重な一時だった。

法王はまた、飄々と去って行かれた。大聖堂を出ると、サン・ピエトロの広場には、抜けるような青空から初夏の陽光がさんさんと降り注いでいた。来るべき人類の平和な輝かしい未来を、讃えるかのよう

に。
以上は、第二次大戦終戦五十年にあたり挙行された、広島・長崎県宗教者懇話会合同ヨーロッパ平和巡礼の際に書き記したものである。

「宗懇」の 理念と行動



真宗大谷派光永寺住職
正木 慶晴

一、異なるものからハーモニーは生ず

長崎県宗教者懇話会（以下「宗懇」と略す）の主催する儀式（八・八原爆殉難者慰霊祭や東日本大震災の合同祈禱集会など）は長崎カトリック合唱団・ルンビニーコーラス・PLコーラス隊・佐世保コールソレイユ合同による賛美歌や佛教賛歌などと共に始まる。そしてその前には雅楽が奏される。

この異教徒同士のハーモニーこそ「宗懇」の実状を象徴するものであると思う。かつて古代ギリシアの哲人ヘーラクレイトスは「異なるものから（こそ）ハーモニーは生ずる」と言ったが、これぞ信仰の異なる人々が共に集いて発信するうるわしきハーモニーである。

二、「質」を「量」で決める娑婆の 論理への反省

私はデモクラシーが「人類の到達した最高のシステムだ」などとは思っていないと公言している。この様な物騒な発言をする民主的な人々からのクレームを受けるかも知れない。二千五百年昔の古代ギリシアに発するこの制度が、主として英語圏で受容されているのはあくまでも「消去法」の結果、未だにこれに勝る制度が見い出せないからであろう。一党独裁の全体主義や強権を振りかざす統治には危機感がただようからである。

元来デモクラシーのプリンシプルはダイア・ロゴス（dialogos 対話）である。異なる意見をもつ人の間で、言葉によりロゴス（理性）が行き交い、結論は参加者の多数決

で決まるといふものだ。結論は51・49など、人数（量）の多少で正邪・善悪と言った「質」が規定される。「構成員すべてに正確な情報に基づく十分な判断力があること」が前提に無いならば圧倒的な情報欠如者・無関心層を含む人々の間で多数決を実施するのはあたかも数人の有識者しかいないジャングルの中で採決を迫るようなものだ。

もし政策「目標」よりも、量としての「議員数」の増加のみを目的とした選挙活動となれば「理念」どころか大衆迎合的なスローガン（マニフェスト）を掲げて戦うから、後日党内から反対意見が出て来る。そこで量的多数を確保せんとすれば、なり振り構わず連立に走るしかない。しかし、マスコミからは「少数」意見も尊重せよと言われる。それは大切なことだが、然し「多数決とは何であったのか」との疑問が残る。何

も決まらぬ政治現象は今やデモクラシーの本家本元の国でも露呈している。

プラトンはその著「ポリテイア」(国家論)において、真理を知る有能・有徳な哲学者の統治に軍人・市民が同意することにより「理想国」が出来る(哲人政治論)と構想したが現実には叶わなかった。

釋尊の原始教団(サンガ)においても多数決ではなく、経験とすぐれた判断力のあるリーダーの提案に一同が同意する形であったらしいし、イスラーム圏での共同体運営法も、今日のトルコの政体に見るように、アングロサクソンの決定システムとは多少趣を異していると思われる。

「政体循環論」を主張したギリシアの歴史家ポリュビオスによれば、有徳者の単独支配→専制→貴族制→寡頭制→民主制→衆愚制→?そして再び有徳者による支配へと循環する、と言う。

今の日本では、小選挙区制の中で量を確保するために大衆にこびへつらうから理念や行く先が全く曖昧になる。その結果、多くの無関心層を排出し、理念なき人々の間での多数決となる。これが質を量で決める

システムの行き着く先である。それでは今後一体どうなるのか?それを語るのが小論の目的ではないので話を次に進める。

三、宗教者の集うサロン

「宗懇」が四十年も続いた一因は、この集団が何事かを強引に決定・実現せんとしたことが無かったからだと思う。故に時には有志のみで行動する場合もあった。構成メンバーが自分の属する宗教・宗派の独自の教義とそれに基づく信仰・儀式作法を堅持するのは当然のことであり相違点はあった方が良いのである。

宗教は科学とは違い、同一の基準で定量化し数値化して強さや速さ・正確さや効率を競う必要はない。信仰と言う精神文化の領域にあってはバラエティー・豊かさこそが大切だと思う。この地上が全体主義化して一種類のみの価値観で被われ、宗教をはじめ、芸術も言語も風習・服装・はては料理まですべてが統一されて一色となるならば何と殺風景なことであろうか。キリスト教各派・イスラム教諸派・ヒンズー・イスラム・神道・佛教や諸宗教:色とりどりの

花が咲き乱れる処に、地上の楽園の精神的な豊かさがあるのだと思う。

諸宗教の間には相違があった方が良いが、お互いの間に悪しき先入観や誤解があったのでは真の対話は成立しない。故に私達は年に何回も集いディスカスを重ね、教義の背景や歴史を理解するためにお互いの聖地や佛跡・本山等を訪ね合い、指導者とも懇談・飲食を共にし、時には共に歌う。クリスマスには法衣姿の僧職がミサに参加し、花祭りにはお祝いのメッセージがローマ法王やイスラームの指導者から寄せられる。

このように努めて自己の宗教以外の教えを奉ずる人々と交わるのは、過去の歴史や現下の世界の実情にかんがみ会員相互の心中に心の平安を願う筈の宗教が戦争の原因になってはならないとの暗黙の諒解があったのことであろう。メンバーの方々からは、信徒との公式の交わりよりも宗懇の仲間の方が「よりフランクに付き合える」との会話を一再ならず耳にしている。

たしかに政治や外交の世界とは違い、平生の何気ない交流こそが重要である。かつて宗懇の或る主要メンバーの方は「宗懇は

サロンで十分なのです」と言われた。それはもちろん歓楽街のあやしげな酒席のことでは無く、教養豊かな聖職者の肩のこらない心の交流の場からの真の融和をイメージされたものであり、名言であると思う。

争いの絶えない世界の「現状」をしつかり見据えればそれを克服した「理念」とは言う迄もなく「争いの無い平和な世界」であり、その点について諸宗教の間に意見の不一致は無いのである。問題はどの様にして現実から理想へとハシゴを懸けるかである。そのためにはお互いが正しく他の宗教を理解し、異なることを尊重し合い、そして共に祈り願うことが求められる。

長崎の「宗懇」はそのことを四十年間続けて来たのである。

四、分析判断から総合判断への動き

一八九三年にシカゴで「世界宗教会議」(The World's Parliament of Religions)が開催され、日本からは釋宗演師が出席、インドからはヒンズー教の代表としてラーマクリシュナ(一八三六～一八八六)の説により成立した教団の青年僧ヴィヴェー

カーナンダが参加した。彼はあらゆる宗教の真理は同一であると主張し、すべての宗教における平和と愛情の存在を確認した。この様な考え方が概して汎神・多神教的なアジア地域以外で広く受け入れられたのは、米国が最初であろう。

この万教帰一的な発想の根源は、インド・ヨーロッパ人の有する最古の文献の一つたる「リグ・ヴェーダ」にみられる。諸々の神々は一つの神の異名に他ならぬから「唯一なるものを賢き人々は種々に呼びなす」(I.164.46)と。

従来の佛教学や神学にあつて他との違いを強調し、その独自性や優位性を強調することが若しあつたとすれば、それは近代科学の分析判断の手法と同様に、他の多くのもと分断して判断する手法であつたことに思いを至さねばならない。ラーマクリシュナの発想はその逆であり一見異なるものの中に努めて『共通する点』を探り共に行動せんとする総合判断であると思う。

いわゆる汎神・多神教においては異なる神々の容認にそれ程の違和感はない。東アジアの宗教では皆が神となり佛となる(成

佛教)のが理想だから唯一神ではなく八百萬(やおよろず)の神々や諸佛・諸菩薩は天地に満ち満ちており、概して他宗にも寛容である。ところが二十世紀の後半になって旧約聖書を根本聖典の一つとするいわゆる「一神教」を信奉する立場から、画期的な提案がなされ始めた。筆者の不確かな記憶に従えば、昭和四十(一九六五)年前後のバチカン公会議ではキリスト教以外の諸宗教に対する従来とは違う思い切った立場が示され、その後の歴代法王にその精神は受け継がれ組織的な活動が続いている。

我が国では昭和四十二(一九六七)年に神道・佛教・キリスト教・諸宗教の有志が「宗教者の連帯による明るい平和な世界の創造」を目指して超宗派の「世界連邦日本宗教委員会」を発足させた。(これらに関する動向については本書の日宗委・W C R P・広島宗連等の記事を参照されたい)

五、「宗懇」展開の精神風土

↳土地柄と人脈

長崎の旧市内はキリシタン時代にローマ法王の知行地となり、神社・佛閣は破壊さ

れ異教徒は追放されたが、幕府の禁教令の
後にはキリスト教徒が大きな被害を被った。
この様な過去を背負う先人の末裔たる長崎
の人々は、お互いに異教徒に対して特殊な
思いを抱いて来たであろうし、原爆・水害
の災害での助け合いも経験し、長崎特有の
宗教的風土をかもし出している。

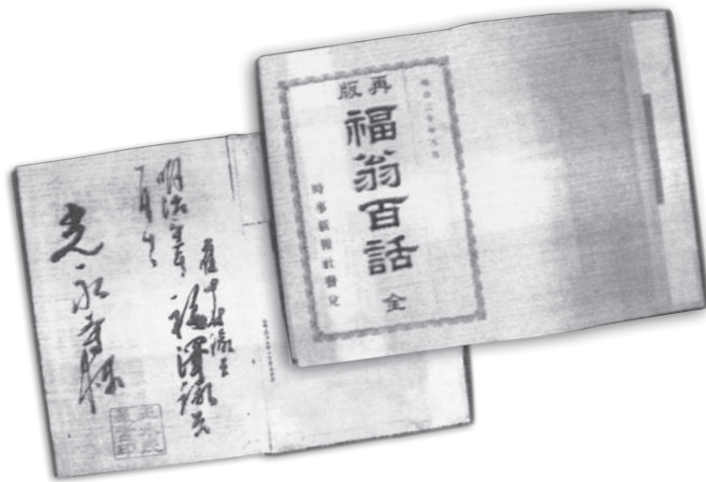
加えて「宗懇」発足当時には（実名は省
略するが）、佛教・神道・キリスト教・諸
宗教の各界に畏るべき大人物が続出した。
肝胆相照らす彼の諸聖方の尽力無くしては
今の「宗懇」は語れないと思う。同時に神・
佛・基の指導者と若き日に同窓であったキ
ーパーソンも存在し、諸宗教間の中保者的
な役割を演じて来た。思えば長崎の「宗懇」
は人材にも恵まれていたのである。

《結び》

平成二十二年秋季には「宗懇」の野下会長
を団長とする一行がトルコ・イスラーム教
の最高指導者と宗教対話をする機会を得た。
イスタンブールのブルーモスク付属の聖職
者室でのイブラハム師の発言は予想外であ
った。「イスラーム教は平和の宗教であり、佛

教・キリスト教その他の諸宗教もみな同じ
神の異なる表現である」と言い「自分も諸
宗教の代表と共に世界の平和の為に祈りた
い」と発言されたのである。その翌年の原
爆慰霊祭には約十人の一行が来崎され共に
平和への祈りをささげたのである。そして
平成二十四年にはユダヤ教のラビの方もこ
れに加わった。世界は確実に「総合」・「調
和」へ向けて動いているのである。

平成二十四年八月二十六日 記



▲福沢諭吉 自署の「福翁百話」



御挨拶まで



日蓮宗瑞光寺住職
森 良昭

合掌

昭和六十一年頃でしたか、長崎市仏教連合会の会長であられた大音寺御住職本原邦堂様より声をかけていただき、明社協に入会させていただきまして、現在の長崎県宗教者懇話会の末席を汚している者です。

出席が悪くメッセージなど書く資格などある者ではないのですが、今の世間を見ますと宗教者の力が必要と思われれます。先生方の益々のご活躍と、この宗教者懇話会のご発展をお祈り申し上げます。

再拝



▲瑞光寺 今月の聖語

霊性の交流



曹洞宗西蓮寺東堂
茨木 兆輝

本原邦堂師との旅

「最初の国はドイツでしたよネ？」

四十七年以上も前に訪れたヨーロッパの旅。今はもう、この返事は聞けない。亡き本原邦堂師（平成九年他界）と共に、幼児教育世界大会で（会場はフランス）、勧められるままに、一ヶ月以上の期間日本を後にしました。

スイスの幼稚園

スイスは、アルプスのマッターホルン（四四七八メートル）のある高地の多い国で、いくつもの国に囲まれていて、隣接した国によってその地の言葉が変わるのです。スイス・フランス語、スイス・ドイツ語、又、スイス・イタリア語等を話す地方もあります。

ある日、本原師と一緒にスイス・フラン

ス語地方の幼稚園を訪問しました。

私は自分で作った人形劇用の人形二体を持参したのでした。

幼稚園では、人形劇の簡単な舞台を作ってもらい、人形二つ登場の人形劇の上演です。

私が入形を動かしながら、日本語でセリフを言うと、言葉は解らなくても、人形の動きの面白さで子供たちは「ワツハツハハハ」。

私の日本語のセリフを、本原師が英語で話す。それを幼稚園の女性の先生がスイス・フランス語で子供たちに話す。そこで子供たちがまた、「アツハツハハハ……」。

人形劇は、楽しくリズムミカルに展開してゆく。人形が舞台を飛びまわる。人形が取っ組み合いをして、オスモウだ！ 子供たちはワーワーと人形を応援するので、もう言葉なんかいらぬ！。

おしまいのアイサツに、二つの人形がサヨナラと頭を下げると、子供たちも一緒に頭を下げた。んだけど……ワーツと子供たちが舞台に押しかけて大混乱！
壊れそうになった舞台を片づけて、さあ、歌のお稽古です。

♪スズメのガッコウ♪
日本の歌詞で、先ず私が歌いました。子供たちはみんな目をパチクリ。そこで、先生に訳してもらったスイス・フランス語の歌詞でお稽古です。先生も初めてですから、ピアノも子供たちと一緒に稽古です。何回も何回も練習しました。もうダイジョウブ！

チイチイパッパ チイパッパ
すずめの 学校の 先生は
お手々（ムチを）振り振り チイパッパ
チイチイパッパ チイパッパ
歌いながら、人形も一緒に子供たちと手

を取り合って輪になって踊ります。

本原さんも一緒になって、大柄な体で輪になって歌います。踊ります。童心そのものです。

チイチイパッパ チイパッパ

楽しかったナア。

戦争のない永世中立国のスイスの幼稚園で、戦後二十年（一九六五年）少しづつ少しずつ日本の国情が治まって来た頃でした。軍港都市佐世保には、アメリカの兵隊さん達が大勢、右往左往していた頃です。

平和を祈らずにおれない日本の坊さん二人がスイスの子供たちと遊ぶ図の面白さ。

幼い純粹無垢な子供たちだからこそ、何のこだわりもなく、疑いもなく信じ合っているのだわりもなく、楽しい笑顔で歌ってくれた日本の童謡。

『雀の学校』で、とてもすばらしい魂の交流ができたのでした。

「チイチイパッパ チイパッパ」子供たちにとっては、日本の人形劇と共に、とても印象深い思い出となったことだろうと思います。

あれから四十七年も経って、あの子供たちももう五十何歳でしょうか。

あの人たちが、幼い日に歌った日本のわらべ歌を思いだしては、今も口ずさんでいるかもしれません。

私たちも幼い日に覚えた思い出の歌を、懐かしい気持ちで歌ってみるように。

出発前の心配

旅行出発前、私にちょっと問題がありました。旅費がスカンピンだったので。

今から五十年程前（昭和四十年・一九六五）一般的に、一ヶ月の給料が二、三万円時代の旅費が百万円。どうする？ やっと親類から借りました。当時の外国為替相場が一ドル＝三六〇円でした。ともかくドルが高かった。

帰国後、結婚した妻が、その借財を背負ってくれました。ゴメン！（今頃だけど）

バチカン広場

イタリアは好きな国でした。

バチカン訪問では、あの大広場でその偉容に感動。バチカン市国の郵便切手発行も驚きで、旅の便りもここで出しました。

教会内は、その厳かな、又絢爛な規模に目を瞠りながらお参りしたのでした。

中世のヨーロッパでは、キリスト教の神父さん達が、『東洋の聖者達』という仏教の修行者の物語を読んでいたと知りました。

中世期には、キリスト教も『魂の存在』を信じていたと言われていますから、東洋の未知の世界である仏教の坊さんの生き方を、深い洞察の中で得心されていたのでしよう。微笑ましい話です。

もう三十年も前からでしょうか

『靈性の交流』という意味で、日本の禅僧たちが、欧州の神父さんや尼僧さん方と心の交流を持ちたいと、キリスト教の教会や修道院の中で一緒にミサをし、坐禅や瞑想の時間を持ち、その結果、深い魂の純化の体験をしたというのです。「お互いの宗教の違いを超えて、純粹な心の交流こそ、真実に、人間の心の、魂の向上となり、それは、神の、仏のみ心に通じるものだ」と共に喜び合ったと聞きました。

国も宗教も異なり、言葉も通じにくい人たちの間で、相互理解の努力が続けられる

という事のすばらしさ。今の我々お互いの在り方、長崎宗懇の進む方向を思い、嬉しく納得しますね。

長崎の八・八の祈り、(比叡山の世界宗教者会議は勿論ですが)広島八・六の祈りの活動が、人類は一つと考え、宗教宗派を超えて全宗教者、一般市民が集まって、世界平和の為に祈念し行動する。これ程の大切なことを、現実に実践遂行する所は、他に見当たりません。

かたよらない心

こだわらない心
とらわれない心

広くひろく、もっとひろく

これが 般若心経
空の心なり

(奈良・薬師寺 高田好胤師訳)

あの難しいお経を、この爽やかな短い言葉で言い表されています。

宗教心が純粹無垢であれば、何事にも囚われない。だから、世界のこだわりのない純真な宗教者が、長崎を中心に集い合うの

でしょう。

『万教帰一』という根源的な言葉に示された事実が、今、長崎で実現している。そう思うと、誠に心豊かな感動が湧き上がってきます。

我々こそ更に、かたよらない、広々とした心の生き方を日々努めてゆきたいものです。上では、神様やみ仏が大いなる『慈悲と愛』のみ心で通じ合っていていられるし、人間同士は、『慈愛の心と信頼』で結ばれているのですから。

本原邦堂師プロフィール

師は、昭和四十九年十一月に発足した長崎県宗教者懇話会の初代会長でした。リーダーの資質の高い人で、現在の長崎県宗教者懇話会の基礎を築かれた努力家でした。宗教的見識も高く、英語も堪能でしたネ。

大様で明るく、酒好きで遊び好きでもあり、人から好かれる人でした。(女性からも……) つい羽目はずすことも有ったようです。

後年、(平成元年から)病に倒れ、本来の力を発揮できず、九年間も失意の中に病床生活を送られ、平成九年九月二十六日、行年六十七歳で遷化されました。

『追憶の情深し』という思いです。



我以外皆、 我が師なり



真宗廣濟寺住職
有馬 英昭

今年の四十周年おめでとうございます。又、ご苦労様でございました。

私もまだ十年近くしかお世話になっていませんが、宗教者懇話会会長様はじめ、様々な方のご指導を頂いて人と人とのつながりが広まり、又、深くなり様々な勉強をさせて頂きました。ともすれば「井戸の中の蛙」になりがちな日々新しいいのちを頂いた心持ちです。

『親鸞』『宮本武蔵』等の著書を残された吉川英治師の「我以外皆、我が師なり」という心が宗懇の関わりの中で深く思うことです。これからも益々のご交流を頂き、宗懇の繁栄、又、世界に向けての平和へのメッセージが一步でも二歩でも届きますことを願わずにおれません。

合掌



▲廣濟寺

宗教の枠を 超えた集い



黄檗宗興福寺住職
松尾 法道

長崎県宗教者懇話会に参加させていただき、多くの出会いや思い出に恵まれました。様々な宗教者の方々と交流は言葉で言い尽くせない感動と経験でした。

一番の思い出は、二〇〇八年十一月二十四日に開催された日本初の「列福式」に、国内外から参集した三万人の中に、光栄にもご招待を受けて参列したことです。ローマ法王庁主催で長崎県営野球場に於いて開催されたこの列福式は、江戸時代に長崎等で処刑された「ペトロ岐部と百八十七人殉教者」をカトリック教会が最高位の「聖人」の前段階である「福者」になることを宣言する儀式です。

イタリアの「聖人が動く」と雨」という諺どおり、ローマ法王が来日した三十二年前も大雪、そして、この日も朝から雨となっていました。傘はさせないので参列者全員が雨合羽を着用。幸いにも式の途中で

雨はやみ、晴れ間もみえてほっとしました。

ミサ形式で執り行われた式典では、ローマ法王特使マルティンス枢機卿が百八十八人の列福を宣言。長崎や京都、大分などの各殉教地の司教が殉教者の名前、その信仰の経緯を紹介。―天正遣欧使節の一人として知られる中浦ジュリアンは長崎で処刑。ペトロ岐部は司祭になるためにマカオからローマに入り、帰国後殉教―など、全福者について述べられ、四時過ぎに終了となりました。

ローマ法王の代理として列席されたマルティンス枢機卿様や司祭達の退場をお見送りしていると、突然、ミサを司式された白柳誠一枢機卿様が踵を返して我々のいる来賓席に降りて来られたのです。ご高齢でもあり、これは予定外のことだったようですが、まるで、来賓の一人一人に話しかけるようなしぐさで挨拶なさったのです。

宗教の枠を超えて参列した神道、仏教、その他の宗教の私達聖職者に対して、枢機卿は感謝の気持ちを表して下さったのでしよう。嬉しさに思わず涙してしまいました。期せずしてカトリックの信者さん達からも拍手が起こり、いかにも長崎らしい、この新たな歴史の一頁に参加出来た事を有り難く胸に刻み、暮れ始めた会場を後にしました。

当山は毎日多くの観光客が拝観に来山されますが、中には、宗教が違うからと本堂での参拝を拒否される方もおいでになります。「ご自分の宗教のかたちでよろしいのですよ」と促しますが、頑なに断られます。そのような時に、いつも私は、宗教者懇話会の話をお聞かせします。特に八月の原爆殉教者慰霊祭や列福式のことを話しますと、皆さん大変驚かれます。

あらゆる宗教の壁を超えて理解し合うことはとても難しいことですが、国際化が進む現代こそ長崎県宗教者懇話会の活動が、世界平和へ向けての小さな一歩になるものと確信しております。

長崎ちゃんぽん 皿うどん



浄土宗大音寺住職
本原 大義

「長崎からのメッセージ」。日本中、世界中に発信すべく歩みをつづけるこの宗教者懇話会にご縁を頂き、お陰さまで私も間違いなく世界が広がり、さまざまな国・人種・宗教・信仰・感覚・人生・思い・祈りがあることを教えて頂いています。ともす



▲大音寺 歴代住職の墓苑

れば宗祖信仰という狭い限られた世界に捉われがちな今の日本仏教の中に身を置く私にとって、仏教のみならず、多くの宗教者の方々と親交を持てる、世界的にも貴重な感覚を持った会であり、全ての違いに捉われず、違いを超え、認め合い、同じ祈りを捧げる事が出来る喜びを感じています。

「長崎ちゃんぽん皿うどん」 寄り道せんとよ」と、某CMがあります。諸先輩の皆様と同じく、私もこの懇話会は長崎だからこそだと感じます。ちゃんぽんのごとく、何でもおいでおいでと、混ぜこぜに、しかしそれぞれの素材のもつ旨味が絶妙に絡み合い、美味と化す。まさにこの懇話会がそうではないでしょうか？

時には寄り道したり、迷ったりとありながら、「平和への祈り」という全ての方の心に共通してある芯を頼りに、ぶれることなく一歩一歩進んでゆく先輩方の姿には、

いつも感銘を受けますし、学ばせて頂いております。

席を共にする懇親会においても、親しい方も初めての方も、どんな方でも気軽に優しく温かく接してくださいませ。会話もお互いの違いではなく、お互いの共通の思い、考え、感覚を確認しあったり、時には何気ない雑談など、「あ、世界中の人々がこのような感覚で共に生きる事が出来たら、何と素晴らしい事だろうか」と毎回感じます。この長崎県の宗教者の実現している「平和・共生」をいつまでも続け、やがてその輪が宗教者のみならず、世界中のあらゆる人々に広がり、究極の目的である「世界の恒久的平和」が実現される事を心の底から念じる次第であります。

長崎ちゃんぽんも美味しいですが、地球ちゃんぽんはもっともっと美味しいのではないかと心待ちにしています。

宗教者とは



曹洞宗正覚寺住職
雲山 曉春

これまで人権啓発に関する事に携わってききました。人権に関する事は多様にありますが、主に部落差別及び元ハンセン病患者の人権に関係する事に関わってきました。人権啓発に関わるなかで、自分の中で宗教者とはなんぞやという、自分への問いが、いつも心の中で湧いていました。

その思いを綴りたいと思います。

私が人権の事に関わるようになってから、熊本県に所在します元ハンセン病患者の療養施設「菊池恵楓園」を初めて訪問したときの事です。それまで、元ハンセン病患者の方にお会いすることはありませんでした。また、ハンセン病に対しての知識もありませんでした。それより、私の中では旧名の癩病という名で、それも病気に対する誤った偏見をもった認識しかありませんでした。その認識は、ハンセン病は感染する怖い病

気というものでした。そのことが訪問した際に相手の方を傷つけることになってしまいました。

それは、恵楓園を訪問した折に施設の方からお茶を出された時でした。私はのどが渴いていたので飲もうとしたのですが、なかなか手を出すことが出来ませんでした。「ハンセン病は感染する怖い病気」という誤った認識が頭の中をぐるぐる巡り、手が出なかつたのです。無知というものは怖いものではありません。

あえてこの事を吐露するのは、その時お茶を出してくださった方に対して申し訳ないことをしてしまったという自責の念からです。

その後ハンセン病の事を勉強するために各療養施設を訪問させていただきました。そこでは、入所者の方々の筆舌に尽くしがたい苦難の歴史にふれる事になりました。

国の隔離政策により自由を奪われたこと、ハンセン病患者に対する偏見と差別、その中には、宗教者が偏見と差別の助長に関わっていた事実などがあり愕然としました。しかしキリスト教関係の宗教者がハンセン病患者救済の活動をされていた事などがかがいが、感銘を受けました。

その後、定期的に訪問している時にこんな出来事がありました。

僧侶仲間と施設の皆様との交流会に参加し、昼食の弁当を食べていました。元患者の一人のおじいさんが、その弁当を半分残していました。おじいさんは残りの半分は夕飯の酒の肴にするつもりでした。その事情を知らない体格の良い坊さんがやってきて「じいちゃん、弁当は食べきれんとね、俺にくれんね」と言って、おじいさんの残した弁当を食べてしまったのです。すると、

おじいさんが涙をこぼして泣いているのです。隣にいた坊さんが「あんたが、じいちゃんの弁当を食べたけん泣きよらすたい」と言いますと、そのおじいさんが「ちがう、ちがう」と手をふって、「うれしかと。自分の弁当を食べてくれたのがうれしかと」と涙を拭きながら言われました。

若くして病気になり強制的に隔離され、長い間外の世界と遮断され、いわれなき差別に苦しみ、人としての尊厳を無視された生活を過ごしてきた人の心にはわだかまりがあつたにちがいありません。それが、食べ残しの弁当をすんなりと食べ、おじいさんをすっぽりと受け入れた僧侶を見て、涙がこぼれたのでしよう。きつと暖かい思いが胸にあふれたことと思います。

私はその場面に接した時、宗教者とはなんぞやと自分にあらためて問うた次第です。



▲正覚寺 鐘楼

いのちの叫び

— 平和へのあゆみ



浄土真宗本願寺派了願寺住職
加藤 正行

長崎の地に一発の原子爆弾が投下され、人間のいのちだけでなく、生きとし生けるものすべてのいのちを一瞬にして奪い去ってしまいました。その戦争がもたらす悲惨さ、原爆という大量破壊兵器の犠牲者となられた方々のいのちの叫びの中に、平和を願って発足された「長崎県宗教者懇話会」が四十周年を迎えること、有り難く尊く思うことであります。

異なる宗教者の方々が恒久平和を願って四十年。たゆまぬ努力を賜った先輩諸師に対し、深く感謝いたしますとともに、心から敬意を表したいと思えます。

だれもが平和な世の中を願い、平穏な日暮らしを求めています。ある意味では平和を論じる必要のないことが平和な世の証かも知れません。しかし、現在でも世界のどこかで戦争・紛争が起きていることも事実であります。「人類の歴史は戦争の歴史」とも言われる由縁です。それとともに科学技術の発達は私たち人間に豊かさや便利さ・快適さを与えてくれましたが、一方では兵器の進歩も成し遂げ続けてきました。その一つが核兵器であります。

核兵器の開発と保有は戦争の抑止力と考えている国もあり、核軍縮の現実、核廃絶の困難なことは言うまでもありません。しかし、戦争における核兵器使用の悲惨な姿は、被爆県として看過できませんし、平和への歩みを発信し続けて行かねばなりません。それが原爆で尊いいのちを奪われた方々、今なお原爆症で苦しんでおられる方々のいのちの叫びではないでしょうか。

強い者が弱い者を、富める者が貧しい者を支配する世界観、排他的・独善的な思惑は、対立と闘争を生み出します。そこには人間の利潤がからみ、無くしていいもの、無くしてはならないもの、無くさなければならぬものの区別が見失われてくるようです。

世界の人々との対話、恩恵を被っている自然との共生の中、安心して生活ができる平和な社会を築いていく取り組みが求められているのではないのでしょうか。原爆犠牲者のいのちの叫びを聞くことは、再び残酷な原爆を使用させないことでもあります。そのためには長崎県宗教者懇話会の活動と平和への広がりを期待するものであります。

合掌

手を組み合おう



真宗大谷派妙行寺住職
三角 紘容



ローマ法皇訪問団の一員としてイタリ
ー・スペイン等の巡礼の旅に参加させて頂
いたのをご縁に、宗教者懇話会の会員とさ
せて頂いた。新参者の会員である。「我一人
尊し」の世界から「他も同じ様に尊し」の
宗教者懇話会の方々の意識に感動を覚え、
更には、今まで関わりが殆どなかったイス
ラム教、ユダヤ教の重鎮方との対話が生ま
れ、今日に至った。この五年の間にトルコ
に二十回ほど訪問し、更に友好と親善の絆

で結ばれ、お互いが「我が宗教」を聴き合い、
異文化、異宗教の中から世界に果たすべく
目的「恒久平和」のもとに今、正に「手を組
み合おう」となるに至った。

今、異宗教者間での向き合う方向が明ら
かになり、歩みを始めたような気がする。
宗教者懇話会との出会いが私を変えた！
勿論良い意味で！



恒久平和を 心から願う



真言宗御室派室生寺住職
梶山 祐弘

長崎県宗教者懇話会創立四十周年記・記念誌発行を心からお祝い申し上げます。諸宗教聖職者の皆様方との出会いを頂き、宗教・宗派をこえて対話されている姿に接し、平和な世界・住みよい社会になりますように、今後各界の人達と学び語り合いながら、釈尊の教え、特に空海の教えのもとに、少しでも世の中の役に立ちますように努力精進して行きたいと考えております。

入会時はお役目として開会の辞・黙祷を担当しました。お清めの儀の時には土砂降りでしたが、しばらくすると雨もやみ、予定通り多くの人達のご参列のもとに慰霊祭の式が行われました。共に心を一つにして、魂に対して献花、合掌、礼拝する姿は、誠に宗教を超えた人の心と心の繋がりが原爆殉難者の魂に伝わっているものと念じます。

私の祖母は原子爆弾の音にビククリして血圧が上ががり、数日後に亡くなったと聞いております。当地西山三丁目に親が住んでいた頃に、金比羅の山のお陰によって命が助かり、又、黒い雨が降ったと聞いて

ております。思いますれば戦争の無い世の中になりまことは大変難しいことではありますが、この住みよい地球の自然・恵みに感謝し、決して核兵器等を使って壊してはなりません。又、人間として、人として共に命のあるかぎり自分がなすべき事をしっかりとやりながら生きて行くことが、戦争や原爆で亡くなった人達への供養の一つになることではないかと考えます。

現代社会では様々な問題がいっぱいあるようです。その中でも年々と宗教心が薄れているようであり、仏教で説きますところの慈悲心、恩の心が、その一つでもあります。宇宙から見るすばらしい地球の姿、夜は全世界の光が輝き、何と美しい地球でありましょうか。そこに住んでいる人間が争ってはなりません。平和に仲良く一生を人として、大空のように広い心を持ち、でっかい我が心を持ちたいものであります。恒久平和を心から願ひ、宗教者懇話会が益々発展されますと共に、各先生方のご活躍を御祈念申し上げます。

至心合掌

ノーモア長崎



天台宗平仙寺住職
山下 秀憲

本会に入会させていただき日の浅い私が、四十周年の記念誌に登載させて頂くことに戸惑いとともに、今日まで諸活動に貢献されてこられました先生方に敬意を表する次第であります。

私ごとであります。小学一年生（一九五〇年）の夏頃、唐津市の片田舎の谷間の上空を埋め尽くすほどの大小の軍用機が毎夜東から西へ飛び交い、それは蜂の巣を突いたような異様な状態が幾日も続いて夢にもうなされる状態でした。

翌年の四月、現在の佐世保市針尾の寺に転向すると、ある夜裸電球に黒いジャバラ状のものを兄が取り付けていました。灯火管制の命令が出ていたそうです。新聞や『アサヒグラフ』には戦争の写真、寺の山や境内まで設立されたばかりの警察予備隊の演習が行われ、ときには外便所の中に入ってまでのガチャガチャ訓練、上官の白旗・

赤旗での判定。

一方、小型の上陸用艦船に乗って女性を伴い休暇を楽しむ米兵は、カービン銃と腰にはピストル携帯で、飲み終えた缶や瓶を立て乱射し、無線塔の中でも手当たり次第乱射、つきまとう子供たちが拾う薬莢分捕り合戦を見て笑っている。それが朝鮮戦争時の日本の現状でした。

その後も幾度の中東紛争・ベトナム戦争等など、今でも紛争が絶え間なくひきおこされています。日本の戦時中の出来事は年ごとに多くを知ることになり、今でも新しい情報が次々に出て知るたびに心が痛みます。特に福島原発事故と重なり、広島・長崎の被爆は、被爆者として証人台から降りるわけにはいかないと、生涯をかけられた山口仙二さんの言葉「被爆者が証言をやめたら、地獄は必ず再来し、人類は滅亡する」「ノーモア長崎」を私たちは守り続けなけ

ればならないと痛感させられました。

一九八七年以来、今日まで毎年開催されています比叡山宗教サミット「世界平和の祈りの集い」に、今年も参加を予定しています。昨年のこの集いに教皇ベネディクト十六世のメッセージが寄せられ、その「福者ヨハネ・パウロ二世が一九八六年アッシジで開催した祈祷集会の精神に基づき毎年宗教者が集い、祈ることが何よりも大切なことです」との導きのお言葉に従い、率先して参加し、アッシジの精神を實踐していくことに心がけたいと存じています。

本会の活動も、この一環でもあると存じますが、四十年も前からの大先達者たちの行動に感謝を申し上げ私のコメントとさせていただきます。

合掌

宗教の垣根を越え



黄檗宗聖福寺住職
田谷 昌弘

長崎県宗教者懇話会四十周年を迎えましておめでとうございます。

四十周年を迎えた年にお声を掛けて頂きこの度、長崎県宗教者懇話会の一員に加えて頂いた事、誠に恐縮いたす次第に御座います。

お寺の子として生まれ、小学校の頃に諏訪神社の祭祀「おくんち」のお上に参加し、カトリックの高校に進み聖書や聖歌に触れ、京都の本山での修行を終え今日に至ります。

今ある自分の宗教者としての価値観は、各宗教が身近にある長崎の環境が多分に影響していると思います。各宗教の先生方が一つの目標の為、宗教の教義の垣根を越え集い平和の祈りとして爆心地公園にて原爆殉難者慰霊祭を行う事は、全世界にむけて意義のある活動であると思う次第にございます。

以前、大浦天主堂にて黄檗の声明を行う事になり、参加させて頂きました。参加するまでは教会で声明を行う事に敬虔な信者の方々から批難されまいか？と思っていました。いざ始まると天主堂の席は満席、終始静かに声明を聴いて下さり、退場するときには拍手を頂きました。その時、ああ長崎の人達はなんて大らかで温かいのであるうかと感動したものです。この大らかさは歴史的な人間交流の賜であります。が、四十年間宗教の垣根を越えて活動されてきた宗教者懇話会のご尽力のおかげでもありましょう。

そして今年よりその末席に加えて頂きましたこと、恐縮至極にございます。浅学非才の身ではありますが、自分出来る事で恒久平和に繋がる活動に従事出来ればと思えます。



▲聖福寺 山門

長崎県宗教者懇話会 とわたし



カトリック時津教会主任司祭
長谷 功

二〇〇一年四月長崎県宗教者懇話会に入会し、四十周年の記念の年を迎えることが出来ました。この間、十二年宗懇の皆さんと活動を共にして、多くのことを体験し、学んできました。

二〇一二年八月八日、悪天候の中、例年の通り宗教・宗派を超えて市民の皆様と共に原爆殉難者を追悼し、世界平和への願いを祈って慰霊祭が挙行されました。前年に続いてトルコの国よりイスラム教、ユダヤ教、そしてカトリックの総本山バチカンから教皇庁諸宗教対話評議会の局長チエラータ大司教を迎えての慰霊祭でした。まさしく長崎は宗教と文化と歴史の町、そして平和の町という観が致しました。そこに国際的な諸宗教者の集まり、殉難者の慰霊、平和祈願の祈りの場、長崎を象徴する宗教者の祈りの集いとなりました。平和について学び、考え、共に

祈り、行動する平和運動の原点を見る思いがありました。

長崎・広島被爆六十周年を迎えた二〇〇五年八月、長崎・広島被爆都市宗教者がバチカンを訪れ、着任されたばかりのローマ教皇ベネディクト十六世を表敬訪問し、教皇の一般謁見に参列しました。ローマ教皇に日本での諸宗教者の集まり、その活動を報告出来たことは最も意義があり、素晴らしい事だったと思います。その時の皆さんの笑顔、そして教皇様の嬉しそうな顔を今でも忘れることが出来ません。

また、毎年開催される広島・長崎の宗教者の平和会議に参加して、被爆地である広島・長崎の宗教者が被爆都市の絆を深め、宗教の垣根を越えて協力し、全人類の切なる願いである平和の道を目指して、いろいろな形で平和の尊さ、戦争の

おろかさを学び研鑽し、行動に移す努力をしている姿を見て、宗教者のつながりの大切さを身にしみて感じています。

十年余りの宗懇の集まりで私が強く感じていることの一つは、この集まりに参加しておられる各宗教者の皆さんが自分の宗教に対して誇りと確信をもって、この会の勤めに励んでおられていることです。決して他の宗教・宗派に対して自分の宗旨を押しつけるのではなく、かえって尊敬を持って接している姿に感動します。自分の宗教の教え、祭儀、規律をしっかり身につけ、他宗教の皆さんと行動出来るすばらしい宗教観を持っておられる各宗派の皆さん。これからも長崎県宗教者懇話会の発展の為にがんばって頂きたいと願うとともに、私自身これからも会を盛り立てていきたいと思っています。

感動した慰霊祭



カトリックセンター事務局長
小瀬良 明

二〇〇九年四月よりカトリックセンターの事務局に参りましてから今年で五年になりました。この間、長崎県宗教者懇話会（宗懇）の皆様方とお近づきになることができ、とても嬉しく思っております。

宗懇は数々の大きな行事を行っておられ、特に八月八日に執り行われています殉難者慰霊祭には感動させられました。中でも二〇〇九年八月八日に行われました慰霊祭には、教皇庁諸宗教対話評議会議長ジャン・ルイ・トーラン枢機卿が出席され、諸宗教者の対話と世界の平和のためにお祈りを捧げられたことは心に残っています。

また、二〇一二年にはトルコからイスラム教の方々の参加があり、世界を意識させるものでありました。

世界の平和と人類の救いのために、自らを奉献することは宗派を超えて、宗教の道を歩む宗懇に負わされた使命であると感じています。今から約五十年前に開催された「第二バチカン公会議」は、私たちカトリック者にそのことを名言するものでした。

自然科学が発展する中、宗懇は宇宙に目を留めながらも、美しく素晴らしいこの地球が永遠（とわ）に存在し続けることを心から祈念したいものです。



▲カトリックセンター

長崎で味わえる 不思議な力



日本二十六聖人記念館館長
デ・ルカ・レンゾ
(Renzo De Luca, sj)

私が生まれたアルゼンチンはカトリック国であり、幸か不幸か他宗教と関わる事がほとんどありませんでした。

指導する立場にある者として、日本に来て初めて様々な宗教と関わりながら生活することになり、戸惑うこともありましたが、このころ、初めて自分が宗教として前提にしていることが通用しないことを味わったからです。最初は習得しにくい日本語のせいにして自分を励ましてみましたが、来日三十年近くになった今では、言語だけのせいにする事は出来なくなりました。日本語が通じてても宗教について対話してみますと、依然互いの理解を難しく感じます。

自分の宗教について話し、その宗教を広めるために日本にいる私は、果たして日本にいる意義があるのかと自分に問いかけることもあります。しかし長崎に来て宗教者懇話会に参加することによって、自分の役

割を別な観点から眺めることが出来るようになりました。互いの忙しさもあって参加することが難しくなりましたが、宗教者懇話会に参加する度に宗教的な視野が広がる



▲日本二十六聖人記念館（日本二十六聖人記念碑）

安心感を覚えます。

宗教者懇話会は宗教者の根本的な問いに光を注ぐように感じます。大勢が集まる中、一人ひとりと話す時間が取れませんが、宗教が異なっても、互いの顔を見て、それぞれ自分に任せられた人々をより霊的な生き方に導こうとする仲間意識を感じます。集う先生達は、誰もが人間であり、偉大な存在と人間とをつなげようとする役割を担っているに相違がないと思います。

「不思議」とたとえそれぞれの教義に相違があっても、それを越える共通な力を感じます。個人的な解釈をしますと、互いに信じている存在は私達を束ねていると言えましょう。私達がこの世で体験できる現実には本来、分離されていない、あの世での「あるべき姿」の一部に過ぎないように思います。それぞれの宗教者は、自分を越えた存在とつながっていることによって全ての人間とのつながりを持つことになり、皆が平等であるので、恒久的な平和を求めています。

私達も人間的な一致を持つことの難しさを体験しながら、それを乗り越える世界を追い求めたいと思います。

お喜び 申し上げます



イエズス会長崎修道院副院長
アントニオ・ガルシア
(Antonio Garcia)

宗教者懇話会（明るい社会づくり運動協
議）発足四十周年にあたり心よりお喜び申
申し上げます。

顧みますと四十年の歩みは長い歴史です。
皆様方とともに宗教者として互いに協力し、
活動できるのは素晴らしい務めです。

私が長崎に参りましたのは一九七〇年で
した。数年経ってから宗教者懇話会の会員



▲聖フィリッポ教会

になり、二ヶ月ごとに、いつも会員の皆様
とお祈りで始まりました。その間多くの諸
先生方とお知り合いになりました。しかし、
当時の懐かしい先生方の何人かはすでに天
国で安らかに憩われています。

私はいろいろな会議で、先生方お一人お
ひとりのお話を拝聴して内容を深く考えま
すと、ほとんどのの方が隣人とともに歩み、
救われることでした。また導きを通して平
和の道を祈念していらっしゃることが心に
残っています。

どんな信仰や思想であっても心の平安と
愛の分かち合いが得られるなら、それはす
ばらしい布教です。

これからも皆様方と心合わせて世界の平
和のために祈念したいと思います。

平成二十六年十月



■1987年に日本で友人となり、それ
以後毎年手紙を交換してきた教皇フラン
シスコと再会することができました。久
しぶりの再会に感動し、ハグしました。
平成26(2014)年3月バチカンにて

人と人との出会い



カトリック長崎大司教区
法人事務所長
下 窄 英 知

昨年から長崎県宗教者懇話会に入会させていただいた新参者ですので、四十年の会の歴史を語ることはできません。甚だ僭越ですが、カトリックである私の諸宗教との出会いの思い出を幾つか語らせていただきたいと思います。

私が小学生の頃のとある日曜日、地域の金比羅山で子供たちの相撲大会がありました。私は誘われなかったので行きませんでした。私は誘われなかったので行きませんでした。弟は、友だちに誘われて参加したようです。



▲カトリックセンター 玄関
(教皇ヨハネ・パウロ2世の訪日記念の碑)

何かの賞品をいただいて帰って来ました。

ところが弟は、このことで母から叱られるはめになりました。カトリックでありながら、他宗教の行事に参加したからです。当時の私には母が正しいのかどうかは判断できませんでしたが、友だちと相撲に行っただけで叱られている弟がかわいそうでした。

高校生になって、友だちの家に泊まったことがありました。朝、私たちの朝食のお世話をして下さった彼のおばあちゃんは、まず仏壇にご飯を上げ、熱心にお祈りし、それから私たちに配膳して下さいました。今思うと、一緒に手をあわせてお祈りすればよかったなあと、当時の自分の未熟さを反省しています。

大学生になって、行動範囲も広くなり、福岡の太宰府天満宮や日光東照宮、鎌倉の鶴岡八幡宮など、旅行のついでに神社に立ち寄ることも多くなりました。しかし、ただ眺めて感心するだけで、他の参拝者のよ

うに鈴を鳴らしたり拍手を打ったりすることには抵抗がありました。

そんな私ではありましたが、勉強の中で『歎異抄』と出会い、それをきっかけに仏教思想の書籍を乱読する時期がありました。それは私にとって、逆説的ではあります。聖書のことばが心に響くきっかけとなりました。

長崎県宗教者懇話会との出会いで改めて心開かれたこともたくさんあります。祈る場所として神社仏閣があることの意義を改めて感じさせてもらいました。生きている人は祈りたいのだ、祈る場所があればお参りしたいのだ、という単純なことに気づきました。

また、宗教者懇話会ではありませんが、その根っこは宗教者という立場を超えた人と人との出会いの場だということも、うれしい気づきでした。そして、今やイスラム教・ユダヤ教も参加する、原爆殉難者の慰霊と世界平和を祈る八月八日の式典。夜空に響く祈りは、人間の祈りです。

本会を立ち上げられ、育て、発展に尽くされた諸先輩方に心からの感謝をお捧げし、これを継続することに力を尽くしていきたいと思っております。

更なる飛躍を こいねがって



カトリック中町教会主任司祭
久志 利津男

「時(とき)」について旧約聖書は語ります。

何事にも時があり、天の下の出来事には
すべて定められた時がある。

生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

求める時、失う時

黙する時、語る時

愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。

(コヘレトの言葉三・一〜八)

長崎県宗教者懇話会が発足されて四十年
という一つの「時」と「節目」を迎えました。
「継続は力なり」と申しますが、様々な違い
を超えて、宗教者が先頭に立ち世界の恒久
平和のためにその使命を遂行してきたこと
にある種の驚きと感動を覚え、さらには発
足当初から関わってこられた方々のご尽力



▲「聖トマス西と十五殉教者」顕彰庭園(中町教会境内)

に心からの敬意を表すものであります。

「平和の長崎」と国内外から注目されて
きた中で、だからこそ教派教団を超えて一
つになっての、この懇話会の存在がいかに
大きいものであったか確信することができ

ます。その意味で、この四十周年は意味あ
る「時」であり、「節目」であると言ってい
いでしよう。

毎年「平和への祈り」を中心に、平和構
築のために様々な活動がなされてきました。
そこには事務局がイニシアチブをとっての
スムーズな議事進行や行事の運営があつた
からでしょう。それによって宗教者同士の
絆も深まり、確固とした土台ができました。
その土台と貴重な経験を活かして、更なる
飛躍のために策を講ずる必要があると思わ
れます。

一つは「宗教者懇親会」ではなく、「宗教
者懇話会」の原点に戻ることです。互いの
宗教を知る勉強会や各教派教団主催の平和
祈禱会など工夫された集いも時のしるしと
考えます。四十年、まさに「語る時」「祈
る時」ではないでしょうか、何事にも時があ
るのですから。

長崎県宗教者懇話会 発足四十周年に よせて



長崎キリスト教協議会議長
日本基督教団長崎古町教会主任牧師
藤井 清邦

長崎県宗教者懇話会発足四十周年を、心より祝い申し上げます。今日の長崎県宗教者懇話会を形づくられた諸先生方の懇篤なる御導きと、多くの尊い御苦勞を深く感謝申し上げます。

現代において「諸宗教間の対話」は、極めて重要な課題の一つです。

日本では少数派のキリスト教の信徒たちは、家庭や地域との関わりの中で、また冠婚葬祭や地域の祭事など、様々な事柄を通じて、その課題と直面し向き合いながら歩んできました。この「諸宗教間の対話」という課題は、多くの人々が生活のごく身近なところで、実際に直面する課題でもあります。

一方、一五四九(天文一八)年、聖フランシスコ・ザビエルによって、日本にキリスト教宣教が始められて以来、その歴史の中で、不幸にも宗教間の対立や争いが生じ、

社寺や教会堂が破壊され、多くの人間の命までもが奪われていった深い悲しみと痛みが記憶されています。こうした歴史は、現代に生きる私たちに宗教の意味やあり方を厳しく問いかけているように思われます。

昨今、神や仏は信じるけれど特定の宗教は持たないという人たち、また神そのものの存在を信じないという人たちが増加の一途を辿っています。人間がその存在を証明できるものは信じるが、証明しえないものは非科学的で信じるに値しないものという意識に捉えられ、神こそ人間の証明しえない、信じるに値しないものの最たるものと主張する人々がいます。無宗教葬や直葬と呼ばれる葬送の形態も増え、現代において無神論教とでもいうべき意識の蔓延と、その危機を強く感じさせられます。

また、地方では宗教宗旨に関係なく、これまで教会や寺院を支えていた信徒の、都

市部流出に伴う信徒の減少という課題も生じてまいりました。

こうした宗教を取り巻く様々な共通した課題の中にあつて、私ども宗教者(聖職)は、宗教の意味と果たすべき役割をより明確にし、信仰を守る必要に迫られています。

また、これまでの宗教間の対立や争いを克服し、将来へと向かつて一層対話が深められていくことが求められています。その第一歩は相手への無関心を乗り越え、対話への一歩を踏み出すことではないでしょうか。

野下千年神父様の作詞作曲された「長崎の祈り」のように、この長崎の地において「教会と寺と神社の音和して」、長崎県宗教者懇話会が、諸宗教間の有意義な対話を生み出し、平和への祈りに心をあわせることができる幸いな場であることを深く感謝致しますと共に、長崎県宗教者懇話会の今後の一層のご発展を心より祈念申し上げます。

一期一会と 中今のこころ



大浦諏訪神社宮司
今村 豊親

「二期一会」の言葉には、出会う一人ひとりに真心を尽くし、巡り合う一瞬一瞬を真摯な態度で受け止めようという、戒めの意味があります。

また、神道の言葉の「中今（なかいま）」は、過去の事を悔いることなく、先の事を案ずることなく、今を生きるこの時を、大切に真正面に真正直に生きてこそ、永遠の命や幸せを築くものになるとの意味です。

今日、親から子へ、子から親へと伝えられている精神文化が失われ、社会風潮は荒れさぶばかりです。現代に生きる私たちにとって、こうした日常生活の中で、まわりとの「和」と、そこから生じる「癒し」は誰もが求めてやまないものです。

「和」とは「わ」の他に「なごみ」「やわらぎ」という読み方もあります。つまり「和」とは本来、心と体・人と人・時・空間・森羅万象の中で創造される一体感と、自然と時間との調和であります。

もう一つ大切な表現は「笑顔」です。
わが国には昔から「笑う門には福来たる」という有名な

な諺があります。「笑顔は健康のもと」「笑顔で食膳に」などともいわれておりますが、笑みを浮かべれば自然に心がなごやか（和）になり、健康法として最良の方法であります。

笑顔はまた人間関係においても大切であります。
笑顔は人に好感を与えます。笑顔の奥に潜む好意、親愛、ゆとりといった人間的な温かさによって相手の心をほぐすのです。それ故、笑顔に満ちた家庭は明るく、笑顔に満ちた社会は明るく安定するのです。

一期一会と中今からは、「和」と「笑顔」との大切な要素が相まって生まれるのです。

森羅万象の世界も、そして人との出会いも、一つとして同じものではありません。常に変化するからこそ、その瞬間瞬間が大切です。同じ時間は二度とこないのです。物事にそれぞれの視点と感性で感動の共有ができるとすれば、それは「和」であり、「笑顔」です。

繰り返すことの出来ない出会い。「一期一会と中今のこころ」を大切に。

長崎の祈り



大浦諏訪神社禰宜
今村 早紀子

大浦諏訪神社禰宜 今村 早紀子

私は、大浦の鎮守・諏訪神社を宮司である主人と共にお護りしております。

この度、長崎県宗教者懇話会の皆様と、深いご縁を結んでいただけましたのは「長崎の祈り」の野下千年神父様の歌詞が、この世に誕生しましたお陰でございます。

長崎の祈り

教会と寺と神社の音そして

清らに明ける長崎の朝

平和を祈る長崎の街

平和を告げる長崎の空

この歌のメロディーを口ずさむと、平和を祈る人々の美しいお姿が浮かんでまいります。そして、まさに宗教の垣根を越えて祈りを通して、常に感謝の心を持つことの大切さを、神の御心を感じ入るのでござい

ます。

畏れ多いことですが、私は昭和天皇様の御製（ぎよせい）を心において、神明に奉仕しております。

日々の我行く道を正さんと

隠れたる人の声を求むる

隠れたる人は神様です。天皇陛下であられた方が、国民の幸せをただひたすらに願

い、常に神様とお心を合わせて祈られていたお気持ちを思うと、私はかたじけなさでいっぱいになります。

日々の生活の中に神々を敬い感謝し、畏怖の心を持って、いつも祈りを忘れず暮らしていきたくと思います。

最後に拙い私の歌を記させていただきます。

生かされて生きる我が命

魂をこの世で磨き 神のみ許へ



▲大浦諏訪神社

長崎県宗教者懇話会 設立四十周年



立正佼正会佐世保教会会長
田中 基世

長崎県宗教者懇話会設立四十周年、誠におめでとう
ございます。発足当初より、先達の諸先生方が宗旨、
宗派を超えて心ひとつにこれまで築き上げてくださっ
たご尽力によるものと深く敬意を表し、お祝い申しあ
げます。

私は福岡県より平成二十二年十二月に佐世保に転任
してまいりました。長崎県宗教者懇話会とのご縁を頂
戴したことに不思議さと有り難さを感じております。

それは私の祖先の本籍地が長崎市であり、そして多
くの親族が長崎原爆被爆者として尊い生命を失って
いるからです。

宗教者懇話会主催で開催する原爆殉難者慰霊式典は、
私もその一員として参加できることが有り難く、宗教
協力によって皆で作り上げるこのような活動は他では
あまり見られないものです。この姿こそ世界平和を願
い、行動する姿であると感動します。また、式典で痛
切に思いますことは世界全体の平和の大切さと、一人
ひとりの心の平和を築かなければならないことを多く
の御霊に誓うことです。

宗教の垣根を超えてお互いに手を取り合い、平和境
建設に向けて献身する生き方は、犠牲となられた御霊
に対する回向供養につながり、なにより人間として尊
い生き方であると思います。

平和な世の中を築くために、平素より平和を祈願し、
自らの心田を耕していくことを大事にし、行動してま
いりたいと思います。



▲立正佼正会会長 庭野日鏡師の書

長崎県宗教者懇話会 四十周年に当たって



パーフェクトリバティ教団
浦上教会長
伊勢 千里

長崎県宗教者懇話会の四十周年に当たり、今日まで支えてこられました皆様方に心より敬意を表します。

長崎に赴任して、早や七年になります。町並みの美しさだけでなく、「人柄がとても良いところだなあ」というのが私の印象です。

そして、この「人柄の良さ」は、当地に信仰が根付いているからであり、そこには当懇話会の存在が大きな意味を持ってきたと受け止めています。

宗教協力の活動は全国にもありますが、各団体がここまで親密に信頼し合い、事を進めていけるコミュニティは他に類がないのではないかと、私の浅薄な経験上からはありますが、そのように確信いたします。

そして、このようなコミュニティが生まれることになった土壌を考えます時、や

はり「長崎に原爆が投下された」という史実は外せません。

米国のAP通信が世界二十六か国の報道



▲パーフェクト・リバティ浦上教会

機関、七十一社の協力を得て「二十世紀の十大ニュース」を発表したところ、そのトップに挙げられたのが「広島・長崎への原爆投下」だったと、某新聞のコラムで紹介されていました。

これほどまでに大きく、悲しい出来事を経験した長崎が、どうしてここまで美しく心豊かな街になれたのか。それは一人ひとりの「愛する心」や「信じる心」そして「祈る心」があつたからに違いありません。そして、その心を育て、導いて来られたのは、まさに愛情深い諸先生方であつたと思うのです。

このことは、この先、人類がいかなる困難に直面しても、当会が明確な「鍵」を世に示せる、ということも意味しているのではないのでしょうか。

そのような点においても、この四十年間はとても意義あるものであつたと思ひますし、この先の役割というのは、またさらに大きなものになると存じます。

この節目に、ますますの発展を祈念すると共に、僭越ですが今後も一員として皆様のお導きをいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

手を取り合って



パーフェクトリバティ
浦上教会
小原 敬正

本年四月からパーフェクトリバティ教団浦上教会長として赴任させていた
だきました。

長崎には三十七年ほど前に高校の修学旅行で神戸から訪れて以来です。長
崎と言えば、カステラやちゃんぽん、原爆の殉難地であり、江戸時代には島
原の乱や、隠れキリシタンの迫害などがあった所、という知識しかありませ
んでした。

この度、長崎県宗教者懇話会の末席に座らせていただき、四十年前前から
これほど多くの宗教や、教えの違いを超えて集まり、手を取り合って平和を
祈りつつ活動しておられることを初めて知り、感動と喜びを覚えました。

私どもも戦前に、前身である「ひとのみち教団」が当局の不当な宗教弾圧
を受けて解散させられました。戦後PL教団（現在の「パーフェクトリバテ
ィ教団」として、再び佐賀県の鳥栖で立教して後に、御木徳近二代教祖が
多くの諸宗教と手を取り合って、新日本宗教団体連合会（新宗連）を結成して、
信教の自由と宗教協力、八・八原爆殉難者慰霊祭には、新宗連加盟の青年た
ちをはじめ、多くの仲間が参加して、平和への祈りを捧げることができると
は、本当に素晴らしいことと思います。

私も若輩で至りませんが、諸先輩の先生方から教えていただきながら、少
しでもお役に立てるよう努力する決意しております。どうぞよろしく願いま
す。



▲パーフェクト・リバティ浦上教会

世界は一列兄弟



天理教長福分教会会長
大岩 光紀

この世の元始まりはどろ海でありました。無い世界、無い人間を創められた親神さまは、この混沌とした様を味気なく思し召し人間を造り、その陽気暮らしをするのを見て共に楽しもうと思いつかれました。そして人間をお創め下さいました。(天理教経典)

毎日を健康に「陽気暮らし」をする。幸せな暮らしを求めない人はこの地球上に居ないとします。幸せな暮らしこそ親なる神様の望みであり、人類の究極の目的なのです。家庭、社会、国家もそれぞれ幸せを求める心は同じでしょう。ところが、今も地球上、至る所で武力抗争が起き、国民は苦難に喘いでいます。私達人間は神様から心を自由に使う事を許されましたが、国家の指導者が神様の一番お嫌いな心「欲の心」「我が身中心の思いやりの無い心」を使う事によって国民を不幸に陥れているので

はないでしょうか。

人間を創り下された神様を親と仰ぐ時、私達世界人類は皆兄弟なのです。助け合わなければならぬのです。「我が身中心の心」「自分さえ良ければ良いという心」を離れて互いに立て合い、助け合うことこそが神様もお喜びになり、私達も幸せに暮らせるのです。

二〇一二年七月二十七日から四年に一度の若人の祭典、ロンドンオリンピックが開催されました。第一回オリンピック開催から百十六年目を迎え、参加国二百五か国、選手総数は一万五百人だそうです。平和の祭典、オリンピック開催に当たり、陰の力としてどれ程の人が参加したか計り知れません。国を問わず、全世界のアスリート達が頂上記録を目指し、切磋琢磨し、競い合い、成した記録の更新を喜び、抱き合い、肩を叩き合って、健闘を讃え合う、純真な

姿は見えていても微笑ましく、感動し目頭が熱くなります。この讃え合う姿を見ると、人類はお互いに助け合うと「平和な世界」が実現出来ると信じます。このオリンピックこそ平和の象徴ではないでしょうか。

朝日新聞「天声人語」で物理学者の小沢通二さん(八十一歳)は、「戦争や核兵器はなくならないという人がいる。でも考えてみて下さい。日本は戦国時代や江戸末期、国内で戦争をしていましたね。いま国内で戦争が起きる可能性があると思う人はおよそいないでしょう。地球上だって同じです」と書かれていました。私も同じ思いです。「慎み」は人類の一人ひとりが自我や欲望を律しつつ、周りの人々や自然と調和していく、自分をむきだしにしないという心です。この心を持ち、互いに手を取り合って平和を希求するならば必ず「陽気暮らし」の「平和世界」は訪れると信じます。「世界の平和」「陽気暮らし」を目標に国境を越え、世代を超えて世界唯一の被爆国日本の長崎から「世界の平和」のメッセージを全世界へ発信し、私達宗教者がリーダーシップを取って核廃絶、戦争の無い「陽気暮らし」の「平和な世界」の実現を推し進め、次世代へとつなげなければならぬと思います。

いかに遠くとも 手元から



金光教長崎教会長
大淵 光一郎

本年ここに、長崎県宗教者懇話会が四十年という節目の年を迎えさせて頂くこととなりました。これもひとえに、先輩諸師が宗教宗派の垣根を越えた、平和希求への弛みない祈りと働きによるもの。さらにはその働きを姿なく声なく守り支えて下さる原爆殉難者の御霊神様方の導きが、一日一日、一年一年積み重なっての四十年であろうかと思えます。

その記念の冊子に、私のような若輩者の拙文を掲載頂くことは、申し訳ない気持ちでいっぱいです。父(大淵道開)の霊に継りながら、私の思うところを書かせて頂きます。

私は「平和」ということを考えるとき、いつもある御信者さんのお話を思い出します。それは、小学二年生のお子さんを持つあるお母さんが、教会に参拝された折に御結界にお届けされた内容です。

ある日、外で遊んでいた子どもが家に飛び込んできて、「お母さん、今ぼく五円拾ったから、交番に届けてくるよ」と言ったそうです。その言葉を聞いた母親は「それなら、お巡りさんにきちんと届けておいで」と送り出したそうです。しかし、母親は内心、「届けても、きちんと受け取ってもらえるだろうか。五円はあげるから持って帰りなさいと言われるのではないだろうか」と心配だったそうです。

母親の心配に反し、子どもはニコニコしながら帰ってきました。尋ねてみると、お巡りさんはその子が持ってきた五円をしっかりと受け取って下さっただけでなく、その子の名前、住所、電話番号と学校の担任の先生の名前まで聞いて下さったとのことでした。

しばらくすると、交番より「どうぞお子さんを褒めてあげてください」と電話



▲金光教長崎教会 拝殿



▲金光教長崎教会

があり、母親はお巡りさんの優しさに驚くと同時に、正しい選択のできた我が子を褒めてやったというお届けでした。

たしかに、母親が思ったとおり、たかが五円玉一枚と言ってしまえばそれまでかもしれないませんが、その五円を届けて来た子どもをいい加減にあしらわず、その幼い子どもを善意を大切に扱い、その上「お子さんを褒めてあげてください」と電話までかけてこられたお巡りさんの温かな気持ちに、私はきっとそのお巡りさんが人間一人ひと

りを大切にされる方なのだろうと思いましたが。きっとその子も、自分のささやかな行為を認め、大切に接してくれたお巡りさんのことは忘れないでしょう。

この話のどこが平和だろうかと思われるかもしれませんが。たしかに平和というものの捉え方は大きく、また難しい問題であろうかと思えます。何ををもって「平和」というのか。その感覚は人それぞれであろうかと思えます。しかし、平和を願わない人はいないのではないのでしょうか。

金光教の教祖生神金光大神様は「信心は家内に不和の無きが元なり」と教えて下さっています。私は、平和とは一人ひとりの手元から、人間を大切にし、不和のない生き方、不和にならない和やかな豊かな心を持ち、平和を生み出していく実践の道を互いに求め合い、取り組んでいくことから始まるのではないかと思えます。

前述の母子の行動と、それを温かく受け入れてくださったお巡りさんの気持ちのように、互いの思いや行いを認め合い、尊重しあう中から一歩ずつ平和というものは生み出され、育まれるのではないかと思えます。

宗教・思想・民族 を超えて



念法真教長崎念法寺主管
久保田 芳晃

「宗教、思想、国境も超えて友だちになろう」

これは、昭和五十年頃、私が目にしたあの念法寺の看板でした。それを見たとき、「なんと大きなことが書いてあるなあ」という思いと、「そんなことが出来るのだろうか」というのが、その時の気持ちでした。

あれから三十数年、今長崎でまさに「宗教、思想、民族」を超えた集まり、「長崎県宗教者懇話会」の一員に加えて頂き、新鮮な驚きを体験させて頂いております。

私は長崎に生まれ育った者ではなく、近畿地方で生まれ育ったのです。原爆のことに関して学校で学んだ程度の認識しかありませんでした。

念法にご縁を頂いた頃、小倉霊現開祖は全国巡教の折に、広島信徒宅の床下から出てきた原爆の熱で融けてグニャグニャになったビール瓶を手にして戦争の悲惨さを

説かれました。開祖様は「二度とこのような戦争をしてはいけない。苦しかったことを忘れてはいけない」との思いから常に戦闘帽をかぶってお話されました。話の内容と共に目にしたビール瓶が強く印象に残り、ただじっとそれを見つめていたことを覚えております。

時が過ぎ、今長崎の地で教団主催の原爆殉難者慰霊法要と、宗教者懇話会主催の慰霊行事に携わることとなり、色々と「長崎」を意識することになって教わりもしました。

「和華蘭」文化を築き上げ、宗教の争いを繰り返し、そして原爆の苦しみを越えて多くの人々の幸せと平和社会の実現に向かって、他では見られない宗教宗派を超えての活動が四十年も続いているこの宗教者の「絆」は、生まれるべくして生まれ、現代の人々に平和を呼びかける大切な活動となっております。

いま、歴史の体験者として「宗教、思想、国境」を超えた長崎県宗教者懇話会の役割は大きな意味をもつものと思われれます。

懇話会のはじめを担って下さった諸先生方の熱意とご苦勞に心から感謝申し上げます、後に続く者が仲良くして、その成果をあげるとき、必ずや、神、仏のご加護があることと思えます。

私も懇話会の末席より、「仲良く」の実践に努力精進することをお誓いし、平和の基礎ともいえる念法開祖のことばをお伝えして結びとさせて頂きます。

「毎日の生活の中で多(た)くさん戦争の種を作っているくせに、外でどんなに美しいことばでもって「戦争はいけない、やめよ」と叫んでみても筋は通らない。まずめいめいが自分の足元の生活を反省し、争いの種をなくしていかなば、真の世界の平和にはならない」

一念一年



真言宗延命寺住職
堤 祐敬

山が そこに あった

緑多く、茂みは誇りを 思わせた

麓に着いた私には

頂きからの風景への憧憬と

進む術を全く知らぬ

もどかしさがあった

ふと 既に昇り始めている先人が声をかけて下さった

「君は登ると決めたのだろうか？」

「はい」

「じゃあ、自らの足で歩むしかない」

「はい」

「私の方だけでなく、ちょっと左右を見てごらん」

よくよく目を凝らすと
幾筋も道が出来ていて

それぞれの経路で臨んでいる方が何名も

「ここから先は 君が決断する

私の後でもいいし

あの方の後でもいい

それとも敢えて未開の樹木と相対し、

全くオリジナルの道を造っても面白い

とにかく 後程 会おう

一味和合の頂きで」

春も 夏も 秋も 冬も

一念一年

「平和の誓い」

僕は、今、この空を見上げています。

私は、今、この場所で沢山の、見えない足跡の上に立っています。

僕の近くには何本も木が生えていて、緑の風が少し吹いたりしています。

この空は、誰かのものではありません。

この大地も、沢山の生き物が少しずつ分け合ってひと時

貸して頂いているだけなのです。

風を感じたら、それが沢山の命の繋がりの御陰と思ったらどうでしょう。僕達は、

この両手を広げて、隣の人と繋ぎ合います。

そして、その隣の人にも呼び掛けます。

まあいい「輪」を創りましょう。

まあいい「輪」には笑顔が生まれます。

まあいい心、繋がる心

まあいい地球に住む私達

「ごめんなさい」と「ありがとう」をきち

んと言え 星の生き物

「ごめんなさい」と「ありがとう」をきち

んと言え 星の生き物

「ごめんなさい」と「ありがとう」をきち

んと言え 星の生き物

(平成二十二年八月八日 爆心地公園において 子供達による誓いの言葉)

忘れられない イタリア・ハワイ への平和巡礼



協力会員
前田 敏博

私は大音寺の本原邦堂先生にご縁を頂き、明社協や宗懇の活動をいろいろ手伝わせて頂く機会を得て、平成十五年頃からは一時的に明社協の事務局長代行をつとめさせて頂きました。その頃から広島長崎宗教者平和会議や広島原爆忌にも参拝させて頂いたりするように、事務局を離れてからも平成十九年には宗懇の協力会員に加えて頂き、核兵器廃絶地球市民集会の開会式での平和の祈りなどの活動にも参画させて頂いています。

私が携わったこれまでの活動の中で、一番忘れられない思い出が、被爆六十周年にあたる平成十七年に参加させていただいた二つの巡礼の旅でした。

バチカン・イタリア平和巡礼の旅

その一つが、宗懇と広島県宗教連盟の共

催で、八月二十三日から三十日まで実施された「被爆六十周年記念・バチカン・イタリア平和巡礼の旅」です。

名誉団長の高見三司大司教様、団長の野下神父様をはじめ、広島、長崎の諸宗教の先生方など約三十人が参加される中、私も同行させて頂きました。

この平和巡礼の旅は、平成七年の被爆五十周年にも広島と長崎の宗教者が参加して行われており、二回目となるものでした。昭和五十六年に来日され、広島や長崎を訪問されたヨハネ・パウロ二世教皇が、生きておられるうちに行こうという願いも込められていましたが、出発の四ヶ月前に亡くなられ、図らずも就任されたばかりのベネディクト十六世教皇に謁見するというたいへんありがたい、感動的な旅となりました。

バチカン市国を訪問すると、サン・ピエ

トロ大聖堂や宮殿はスイスの衛兵によって守られていました。ものすごく大勢の人々が集まる中で、私たちは一番前列に席を設けて頂きました。そこで待っていると、ドイツから帰ってきたばかりのベネディクト十六世教皇が登場。教皇は私たちの前で立ち止まり、私たちからのメッセージとともに広島市長、長崎市長のメッセージを渡すことができました。教皇と握手することができた人もいて、大変ありがたい謁見となりました。

この後、諸宗教評議会を表敬訪問し、フレックス・マチャード神父との懇談も実現しました。その後、諸宗教対話の聖地として知られるアッシジの聖フランシスコ大聖堂を訪問し、さらにフィレンツェ、ベニス、ミラノを巡りました。

今も印象に残っているのは、ドウオモ（サンタ・マリア大聖堂）を中心とするフィレンツェの美しい街並みの景色です。メディチ家のウフィッツィ美術館も素晴らしいものでした。また、ミラノでは、聖マリア教会の「最後の晩餐」を見学しましたが、第二次大戦で教会が空襲を受けたにもかかわらず、とてもよく残されていました。多

くの教会を巡りましたが、とにかく建物も
フラスコ画も素晴らしいものばかりでした。

ハワイ真珠湾慰霊祭

もう一つの巡礼の旅が、十二月七日(日
本時間八日)にハワイ真珠湾のアリゾナ記
念館で開催されている真珠湾攻撃による犠
牲者慰霊祭への参列です。

この年の原爆忌には、被爆六十周年を記
念して世界連邦日本宗教委員会の招きによ
ってハワイ真珠湾のアリゾナ記念館からダ
グラス・レンツ館長夫妻が来日され、広島
と長崎の原爆忌に参列されました。このう
ち長崎では八日夜の慰霊祭に参列され、慰
霊の言葉を捧げられたり、原爆資料館を見
学したり、宗懇のメンバーとも交流されま
した。

世界連邦日本宗教委員会は毎年、夏に平
和巡礼を行っておられ、八月四日の比叡山
宗教者平和の祈りの集いを皮切りに、八月
六日の広島原爆忌、八月八日の宗懇主催の
長崎原爆忌前夜の慰霊祭、八月十五日の沖
縄宗教者の会主催祈りと平和の集いに巡礼
団を派遣するとともに、十二月にはハワイ

真珠湾にも巡礼団を派遣しておられます。
ハワイへの取り組みはもう三十年にもなる
そうですが、その中のダグラス・レンツ
館長の来日でした。

そして十二月のハワイ真珠湾への巡礼は、
夏の来日への答礼の意味も込められて実施
され、長崎からも参加しようとして、毎年、参
加されている野下神父様に加え、法生寺の
神崎先生と私が参加しました。

七日の慰霊祭に先立ち、五日と六日には
パンチボール太平洋国立墓地、マキキ日本
海軍墓地、愛媛丸の慰霊碑を巡り、さらに
ハワイの金刀比羅神社・太宰府天満宮、出
雲大社、カトリック司教座聖堂、ハワイ真
言宗寺院、平等院などを表敬参拝しました。
カトリック教会の中川先生にはたいへんお
世話になりました。

七日の真珠湾の慰霊式典に私は紋付き袴
を着て参列しました。会場にはゲストのハ
ワイの要人、ハワイの米軍の幹部や兵士、
真珠湾攻撃の犠牲者の遺族や生存者で会場
はいっぱいでしたが、その中であって、一
番最初のゲストスピーチと祈りを捧げたの
が、世界連邦日本宗教委員会の代表だった
のには驚きました。かつての敵と味方が恩

讐を超えて犠牲者を慰霊する姿にとっても感
動し、理解し、許し合うことで平和はきつ
と訪れるとの思いを確信しました。

その後、ボートに乗って当時の犠牲者が
沈んだままになっている戦艦アリゾナに渡
り、祈りを捧げ、献花しました。さらにカ
ネオへ海兵隊の将校クラブでの昼食の後、
飯田中佐の慰霊碑、クリツパーメモリアル、
硫黄島メモリアルなどを慰霊して回りました。

ハワイで滞在したホテルは、旅費の節約
のため、他の参加者とは別に、神崎先生と
私は二人で安いコンドミニウムに泊まり、
ABCストアで食材を買って自炊して過
ごしました。

これらのイタリアとハワイの二度の平和
巡礼の旅に参加させて頂くことができたの
も、宗懇とのご縁を頂いたからこそなもの
です。私は宗教者ではありませんが信仰者
の一人として、宗教宗派の違いを超えて一
緒になって平和について取り組むという宗
懇の活動にとっても共感しております。会の
活動がますます盛り上がっていくことを願
い、協力会員として少しでも応援させて頂
きたいと思っております。

長崎県宗教者懇話会 発足四十周年を 祝して



協力会員
岩本 孝義

この度、宗懇が発足して四十年を迎えられたこと、会員の皆様と共に心から喜びを分かち合いたいと存じます。まずはじめに、何故私ごときが宗懇と関わることになったかを語らなければなりません。

私の家はもともと浄土宗九品院（小田義海ご住職）の檀信徒であり、両親共に信仰心の篤い人たちでした。二〇〇五年十月に浄土宗の修養会である五重相伝を受ける機会を得ました。お念仏と説教主体ですが、朝八時から夕方四時ぐらいまでを五日間続けるといふものでした。そこで浄土宗の開祖法然上人の生い立ちやその他のことを色々と知り、感銘を受け、生活が一変しました。それまでの私は「明日できることは今日するな」みたいなこととでしたが、その後は「時は今、ところ足もとそのことに打ち込む生命、永遠の御命」という具合で一日一日を大切に、「今日決裁すべきは今日する」という変わりようです。それからはお寺の諸行事にも積極的に出かけるようになりました。

ある時、小田ご住職より「私が関わっている会の定期例会が長崎であるので勉強になるからついていらっしや

い」と言われて初めて出席したのが護国神社での定例会議でした。そこで会に先立ち、長崎県のそれぞれの宗教宗派を代表される方々と一緒に記念写真撮影をしました。その写真が後に、八・八平和の祈りのポスターになりチラシになりました。私はその事が嬉しく誇らしくてたまりませんでした。そしてあらためて、小田義海先生が色々な宗教関連の方々との深いお付き合いとチャンネルを持っておられ、その縦糸・横糸・斜め糸の人脈のお裾分けを頂いたと心から感謝しています。

その後、何度となく小田ご住職と宗懇関係の集まりに参加させていただいて今日に至っております。

宗教者懇話会が毎年八・八に開催される原爆殉難者慰霊祭を主催されていますが、その度に実行委員と事務局の皆様が綿密な打ち合わせと用意周到な準備で臨んでおられる姿に頭の下がる思いであります。

これからも、私自身協力会員として、平和の大切さを発信し続けるお手伝いが少しでもできればと思っております。

諸宗教対話の 具体的な実践に ついて



宗教者懇話会事務局長
鎮西大社諏訪神社禰宜
宮田 文嗣

宗教は、発生した時期や経緯・預言者や教主及び経典・聖典の有る無しなど、それぞれの宗教観・神観念を有している。また、これらの違いにより国家観・戦争観・文化観の違いもあるのが当然である。

私は、「諸宗教対話」「宗教協力」は、基本的に前述した宗教の根幹を議論するのではなく、理解することから始まると考えています。

諸宗教対話の具体的な実践については、それぞれの宗教・宗派の共通する目的・理念「平和の尊さ」「命の大切さ」「心の豊かさ」を基に「諸宗教対話」「宗教協力」が祈りを通して成り立つものであると考えます。また近年、世界規模で「地球環境保全」について、様々な活動が繰り広げられていきます。「地球環境」は人類にとって共通の財産であり、次世代へつないでいくものである。

この「地球環境保全」については、世界の諸宗教も神道に注目しており、神道的観念が大いに生かされることを望むところであります。

また、各宗教者の心得として、自分自身の信仰を大事にしようとするれば、相手の信仰に対し、「礼節」と「敬意」をはらう心を持ち、更に宗教者同士の交流が宗教者としての人格の向上につながり、対話と協力として一層深め、人格を共に尊重することが基礎となつて初めて、真の「諸宗教対話」「宗教協力」ができると思います。

私は、氏子をはじめ他県からの参拝者や外国人に対し、神道についての解説や神社の由緒を話す機会が多くあります。その折は、長崎の宗教事情について必ず触れていきます。

長崎には多くの宗教が存在すること、宗教者同士の仲が良いことなど、宗教者懇話



▲諏訪神社 神馬

会の活動を中心に話をしています。聞かれた方には、一様に理解を示して頂いております。

以上のことから、今後も「諸宗教との交流・対話」「宗教協力」が積極的に継続され、実際の活動を通じて、広く人類の福祉の増進をはかるとともに、日本人の培ってきた「生き方」「暮らし方」「精神の構え方」を伝え、国の内外の諸宗教の方々にも広く理解していただけるように努めてまいりたいと思います。

「NAGASAKI の平和観」 について



立正佼正会
糸谷典也

私が長崎にお役で赴任になったのが、今から三年十ヶ月前のことでした。高校生の時、三重県から修学旅行で訪れて以来のことでした。一年目はお役のこととも出会う人のことも初めてで全てが勉強でしたが、長崎の歴史・文化・土地のことを知りたくて、月に一度「長崎一人さるく」で長崎市内を

隅々まで歩かせて頂きました。

江戸時代より遊学の地・長崎を訪れて、政治・商業・医療・文化を学んだ先人たちがそれらを日本の全土に広めたこと。キリスト教伝来、中国やオランダとの交流により日本文化との融合で生まれた「和華蘭」世界の誕生。など……。たくさんのことを学びましたが、一番の驚きは「永井隆さん」の存在でした。宗教を持つ人間として、今までの自分の生き方に対して頭を殴られたような衝撃を受けました。

一度しかない人生、永井隆さんのような生き方は出来ないけれど、人として、宗教人として与えて下さったこのいのちを自分のためだけに使うのではなく、世の中のため、人さまのために役立つ生き方をしていきたいと思います。

そして、もうひとつの驚きは「長崎県宗教者懇話会」の仲間に入れて頂いて感じた、

他の地では味わえない「こんなにも宗教者同士が仲が良い」こと。市長さんはじめ、長崎の人が宗教に対して「こんなにも理解がありとけこんでいる」ということでした。

こんなすばらしい長崎に、今から六十七年前、原爆が投下され、沢山の尊い命が奪われました。平和教育のために長崎を訪れる人が大勢います。原爆の悲惨さ、戦争の無意味さを学ぶことも大事だと思いますが、長崎にとつての平和教育とは何だろうと考えた時に、私は「永井隆さん」の生き方や、「長崎県宗教者懇話会」のつどいをもっと知ってもらおうことだと思えます。そのことが長崎としての役割であり、長崎に住み暮らす私の使命だと信じます。そしてそれを伝えることが人を思いやり、みんなと仲良くしていく真の平和づくりにつながっていくと疑いません。私は縁ある人にはそのことを自分の言葉で語り伝えていきます。またこれから違う土地に行っても語り伝えていきたいと思っています。

沢山のことを学び、教えて頂いた長崎での経験に対して本当に心より感謝しています。

合掌



▲立正佼正会長崎教会 玄関ロビーにある龍

信仰青年としての 誓い



立正佼正会
横山 元一

長崎県宗教者懇話会に事務局として参加させていただいております。宗教者懇話会の定例会に初めて出席した時の感動は今でもはっきりと覚えています。他宗教・宗派を包摂する先生方の温かさにもまれた特別な空間に居合わせることができ、信仰者としての喜びを実感しました。私の師である立正佼正会の開祖の著書にこのような一節がございます。

「伝教大師に『一日の羅は鳥を得ること能わず』というお言葉があるが、それは、一つの目しかない網では一羽の鳥さえも捕らえられないように、一宗だけでは、さまざまな機根の大衆を救うことはできないという教えである。仏教には八万四千の法門があるといわれるが、それも、さまざまな立場の人を残らず救うためであって、禅でなくては、念仏でなくては、題目でなければと争っていた

のでは、一人の人も救えないということ戒めていると受け取れよう。まさに宗教協力の原典を示されたお言葉で、それを現代にあてはめれば、キリスト教だ、仏教だ、イスラム教だと、たがいに争い



▲立正佼正会長崎教会

あうのではなく、それぞれの宗教が時代や人々の機根、風土、文化にふさわしいかたちで人々を救うために存在していることを自覚し、たがいに尊重しあい、力をあわせなくてはならないことを教えられていると解せるのではないだろうか。」

長崎県宗教者懇話会は、人々のために手を取り合っている同志なのだと思え止めさせていただいております。このようなご縁に心から感謝申し上げます。そして、今後も先生方から多くのことを学ばせていただき、そのお心を次の世代に受け継いでいくことが私たち青年の役目であると思えます。

宗教者懇話会の記念すべき時に信仰青年と共に精進していくことをお誓いいたします。

存在感が偉大だった 故岩切先生を偲んで (天理教島原分教会七代会長)



長崎県宗教者懇話会会長
野下 千年

寒中とはいえ、時折、陽光のさす島原路を宗教者懇話会事務局、諏訪神社の宮田先生の車に便乗させていただき、天理教島原分教会第七代会長故岩切正幸教会長の出直の式典に向かったことを、あらためて思い出しています。

岩切先生は、近年人類の幸せと世界平和のために異なった宗教の指導者たちが、その違いをのりこえて協力していこうという、いわゆる宗教者対話の運動の流れのなかで、



▲故 岩切正幸 師

始まった長崎県明るい社会づくり推進協議会の宗教部門に所属され、同会の常任理事となられました。その後間もなく全国に先がけ昭和四十九年に発足した長崎県宗教者懇話会の会員となられ、亡くなられるまでの十五年余を、会のために尽くしてくださいました。わたくしが前会長の諏訪神社宮司・上杉千郷先生のあとをうけ会長をさせていただいたときから二期六年間は副会長として、わたくしを支え、会の発展に尽くしてくださいました。その間、先生のご厚意により、わたくしどもの四月定例会の会場として島原深江の天理教教会を快く提供してくださいました。

過去の日誌をひもときますと平成十一年(一九九九年)から平成十五年までの五回をご自分の島原深江の教会で、その後の二回は新しい諫早の教会で開催させていただきました。先生には大変ご迷惑をおかけす

ることは承知の上で、いつのまにか「四月会議の会場は島原の岩切先生の教会で」となったようです。

先生のご厚意に甘えた会員たちが勝手にきめたことでもありましたが、その大きな理由の一つは、先生と奥さまをはじめ家族全員で準備をしてくださる島原の旬の名物、ふぐ料理をはじめ、たくさん自家製料理のご馳走にあずかれることにありました。「島原ではふぐ料理をガンバ料理と言うのです。棺桶(島原ではガンオケ)をそばに置いて食べるということでしょうね!」との解説を聞きながらの、ご馳走つき会議は会員の楽しみでもありました。会議においては冷静、沈着な方でしたが言葉少ない発言には確信と重みがありました。いつもおだやかな先生のお顔に、こちらの気もちもなごむ思いでした。集まりの場にはいつもカメラを持参して来られ、集まった会員た

※本文は平成23(2011)年1月31日発行の「岩切正幸追悼集」に寄稿したものを転載させていただきました。



▲8・8慰霊祭「献水の儀」で奉献者を務める岩切師 平成19(2007)年

ちのプロフィールをさりげなくねらってパチリ!! その後、必ず焼いた写真を一人ひとりに丁寧にとどけられる心遣いのこまやかさに感服いたしました。くださる写真は撮られた人の最もいい顔の一枚でした。会員のほとんどの方が自らも納得の写真を数枚はきっとお持ちのことでしょう。一緒にいて楽しい思いにしていただけ先生は、きっと天理教の宗旨「陽気ぐらし」を実際に生きておられるようでした。

平成十八年(二〇〇六年)の天理教諫早教会での会議で、一つの特別議案が上提案されました。当時まったく無名の新人歌手・秋川雅史と彼の所属プロダクションの代表が来崎。秋川の売り込み新曲「千の風になつて」を、宗教者懇話会主催の恒例行事、

八月八日夜、原爆落下中心公園での原爆殉難者慰霊式典の中で是非歌わせてほしいとのこと。同曲のプロモーションCDを試聴したあと、申し入れ受理を決議しました。式典当日の夕べ、松山のオープン式場に響きわたった「千の風になつて」は、すばらしい感動を参列者たちに与えました。そして、この年の年末恒例のNHK紅白歌合戦に秋川は「千の風になつて」で新人デビューを果たしたのです。秋川の殉難者慰霊の思いに対する天理王命のご加護だったのかも知れません。

これはわたくしの岩切先生との思い出です。ある年の島原教会での会議の折、開会前のひとときを拝殿の祭壇前に座って手を合わせていたところに、身をすり寄せるように座られたのは岩切教会長でした。先生はそばの台の上に積んであった小冊子のひとつを手にとって開き、わたくしにさしだして見せながら「これが親神天理王命より教祖中山みきが賜ったことばを書き留めた『おふでさき』ですよ」と言って、和歌のスタイルで書かれた一句を心こめてゆっくりした言葉で説明してくださいました。長崎教区の教区長としての岩切先生の熱心な信

仰者、使命感に満ちた教師の一端に触れさせていただいた思い出でした。感謝のうちに大切にしたいと思います。

長崎県宗教者懇話会における存在感の大きな先生が去られたことを淋しく思いますが、「出直」なされた岩切先生が新たなまなざしで、わたしどもを見守っていてくださることを信じて、会員一同目的達成に励んでまいります。

改めて岩切先生のご冥福を会員一同心よりお祈り申し上げます。



▲8・8慰霊祭「黙とう」の様 平成19(2007)年
左から2番目が岩切師

第二章

平和巡拝・慰霊の旅



終戦五十周年 広島・長崎宗教者平和巡礼

平成七（一九九五）年七月三日〜十三日



▲聖ペトロ大聖堂前広場で 左から 宮田、加用夫妻、香月、山根、斉藤、久保田、三浦三末、山根、上杉、田中、小岱夫妻、浅野、渋谷、上杉夫人



▲聖ペトロ大聖堂前で謁見（故 教皇ヨハネ・パウロ二世）



▲教皇庁諸宗教対話評議会訪問 左から2人目マチャーレ師、3人目尻枝師



▲ジュネーブ WCC 本部を訪問

巡礼の日程【平成7(1995)年】

7月3日(月)

関西空港発 11:35 スイス航空163便
 チューリッヒでスイス航空604便に乗り換え
 ローマ着 20:55
 (ホテル・チチェローネ泊)

7月4日(火)

午前: 教皇庁諸宗教対話評議会を訪問 次官補の尻枝神父とアレックス・マチャーレ神父と懇談、アリンゼ長官のメッセージを頂く
 その後システリーナ礼拝堂、聖ペトロ大聖堂見学
 午後: ラテラノ、サンタ・マリア・マジョーレ、聖パウロの各大聖堂を見学

7月5日(水)

午前: 10:30 オーディエンスを聖ペトロ大聖堂で受け、ホテルではITALY NATIONAL TV のインタビュー(三末団長、久保田師、小岱師)
 午後: アッシジへ 聖フランシスコ大聖堂見学
 (ホテル・スバシオ泊)

7月6日(木)

午前: コンベンツアル・フランシスコ会修道院、聖クララ、サンダミアーノ、サンタ・マリア・デリ・アンジェリの各聖堂と聖フランシスコの生家を見学
 ローマ発 20:50 スイス航空609便 ジュネーブへ
 ジュネーブ着 22:20
 (ホテル・ワーウィック泊)

7月7日(金)

WCC (World Council of Churches) 本部訪問
 ドクター・コンラッド・ライザー会長、サルピー・エスキジャン女史、ドクター・ターレック・ミトリ史、アルーナ女史等と懇談

7月8日(土)

シャモニーへ ロープウェーにてエギュー・ドゥ・ミディへ登り、モンブランを眺める

7月9日(日)

ジュネーブ発 10:00 スイス航空925便 チューリッヒ経由
 ワルシャワ着 14:15 ワルシャワからバスでクラクフへ
 (ホテル・コンチネンタル泊)

7月10日(月)

ホテル・コンチネンタルの一室でイエズス会クラクフ管区長ニェチェスラヴ・コズフ師と懇談、通訳は上智大学名誉教授オボオンク師
 クラクフの古い市街、ヤゲロン大学等見学 オシフィエンチウムへ向かうアウシュヴィツ強制収容所見学

7月11日(火)

クラクフからワルシャワへ
 ワルシャワ発 15:05 スイス航空447便にてチューリッヒへ
 (チューリッヒ泊)

7月12日(水)

チューリッヒ発 13:00 スイス航空162便にて帰国

7月13日(木)

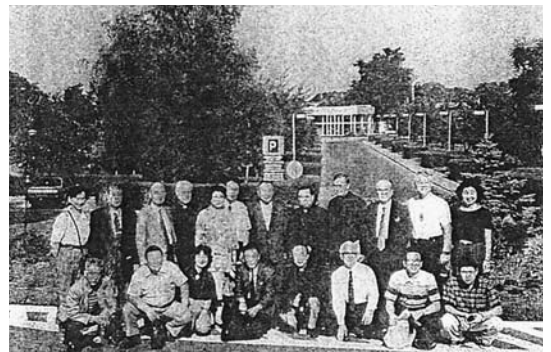
関西空港着 08:20

参加者【平成7(1995)年】

三末 篤實 (カトリック広島教区)
 齊藤 真仁 (カトリック幟町教会)
 加用 雅愛 (妙慶院)
 加用 稔子 (妙慶院)
 香月 辨海 (西蓮寺)
 田中 寛康 (長久寺)
 久保田訓章 (広島東照宮)
 浅野 和同 (饒津神社)
 渋谷 健紀 (草津八幡宮)
 上杉 千郷 (鎮西大社諏訪神社)
 上杉 延子 (鎮西大社諏訪神社)
 宮田 文嗣 (鎮西大社諏訪神社)
 三浦 達実 (大光寺)
 小岱 護城 (教宗寺)
 小岱メグミ (教宗寺)
 山根 由之 (株西九州新生活センター)
 山根 久典 (株西九州新生活センター)
 川崎 裕子 (パックスインターナショナル株)



▲アッシジ



▲ポーランド・クラクフ
 後列右から4人目:
 イエズス会管区長ニェチェスラヴ・コズフ師
 左から4人目:
 上智大学名誉教授オボオンク師



広島・長崎宗教者 カンチャナブリ戦没者慰霊法要の旅

平成十(1998)年十一月二十四日〜二十九日



▲カンチャナブリでの慰霊法要

団長挨拶



第二代宗教者懇話会会長
団長 鎮西大社諏訪神社
宮 司 上杉 千郷

昨年十一月二十五日から二日間、同じ被爆地として交流を重ねている広島・長崎の宗教者十三名が、シンガポール宗教連盟を訪問した。

シンガポールには、ヒンドゥ教、ユダヤ教、ゾロアスター教、仏教、道教、キリスト教、シーク教、イスラム教、バーハイ教の九教団が、一九四九年に宗教連合を結成し、四十九年の歴史をもっており、このことは今日の世界の宗教者にとって画期的なことであり、是非交流してアジアの一面に宗教者による平和の架け橋をと考えた。

実は私はもう三十年も前に、神社本庁よりシンガポールの宗教連合に使節団を派遣した折に、その団

法要の旅 日程【平成10(1998)年】

11月24日(火)

福岡発 12:00 TG649便にてバンコクへ
 バンコク着 15:50 (実乗5時間50分)
 バンコク発 19:15 TG401便に乗り換えてシンガポールへ(実乗2時間20分)
 [マンダリンホテル泊]

11月25日(水)

シンガポール 11:00 ホテル出発 太平洋戦争戦没者をはじめ、異境の地で果てた日本人が祀られている日本人墓地参拝
 16:30 インターレリジョン オーガニゼーション。シンガポールの方々と懇親・交流
 [マンダリンホテル泊]

11月26日(木)

シンガポール発 08:30 TG402 タイ航空にてバンコクへ
 バンコク着 09:45 バス(実乗2時間15分)片道約130km
 着後、カンチャナブリへ 戦没者慰霊法要
 [アマリ・エアポートホテル泊]

11月27日(金)

バンコク発 08:00 PG930 カンボジア航空にてシェリムアップへ
 シェリムアップ着 09:00 (実乗1時間)
 着後、アンコールトム視察
 昼食後、休憩の後、アンコールワット視察。
 [ノコール・コクトロックホテル泊]

11月28日(土)

シェリムアップ発 09:40 PG931 カンボジア航空にてバンコクへ
 バンコク着 10:40 (実乗1時間)
 着後、バンコク市内観光
 [機中泊]

11月29日(日)

バンコク発 01:00 TG648 タイ航空にて帰国
 福岡着 08:00 (実乗5時間)

参加者【平成10(1998)年】

上杉 千郷(諏訪神社 宮司)
 上杉 延子(諏訪神社 令夫人)
 三浦 達美(大光寺 住職)
 田中 寛康(長久寺 住職)
 下條 洋二(淵神社 宮司)
 斉藤 真仁(幟町カトリック教会 主任司祭)
 加用 雅愛(妙慶院 住職)
 加用 稔子(妙慶院 令夫人)
 中林紀美枝(主婦)
 中川 元慧(善正寺 住職)
 松本 守久(諏訪神社 権禰宜)
 松田 正行(石清水八幡宮 典仕)
 花岡 史記(中外日報社広島支社 支社長)
 中林 雪(ITP ツアーズ)

員の一人に加わったことがあり、異宗教の人達が大変親しく協力し合っている姿に深い感銘を受けたことを思い出し、あの宗教連合が今日も活動を続けているならば是非もう一度交流したいと、シンガポールに駐在している私の友人に調査を依頼した。

広島と長崎の宗教者が交流を初めて十周年の記念事業として、一昨年バチカンにローマ教皇を訪問する平和使節団を派遣したことから、出来れば外国の宗教者と交流の事業を時折行っはとの提案があり、その訪問先を探していたことから、このシンガポールの宗教連合のことを思い出し、早速手配した次第である。

早速その友人より、その宗教連合は現在も活発に活動しており、友人よりの打診によれば、我々を喜んで歓迎するとの情報であった。そこで両市の宗教者と相談し、更に中外日報社の花岡広島支社長のお知恵もお借りして、正式に訪問のことを連絡したところ、シンガポール宗教連合より招聘状が到着し、今回の使節団の結成となり、交渉の経過より私が団長をお引き受けすることとなった。

更にこの機会に、シンガポールに於いて日本人墓地の慰霊とタイのあの「戦場に架ける橋」のカンチャナブリに於いても慰霊祭を行うこと、それにカンボジアのアンコールワットも見学しようという相当強行軍の日程になった。

シンガポールの宗教連合の心暖まる歓迎と世界平和を祈念する会合は、まことに心を揺さぶられる感激であった。それに、何よりも人種の坩堝と言われるシンガポールに於いて、九つもの異なった宗教の、和気藹々の姿を拝見して、これが世界各地に拡

がれば、今日の宗教による紛争は無くなり、世界に真の平和が訪れることになる、暗夜に燈を見た思いであった。

我々日本の宗教者は、相寄り宗教宗派の垣根を越えて、世界平和のために何が出来るか、爪に火をともしように些やかながらも、一生懸命の努力を重ねて来た。しかし、世界の各地で宗教による紛争の続発の報に接するたびに、何か無力感に似た気持ちを持った。

しかし、広い世界にはシンガポールの宗教者のように力強い宗教者の連合が行われていることを知り、我々のこの運動も決して無駄ではない。必ずこの運動が池に投ぜられた一石のように、やがて大きな輪となって行くことを確信する次第である。

この誌上を借り、シンガポール宗教連合の今後のご活躍を祈り、今回のご高配に深甚なる感謝を捧げ、今回の旅行に際しご協力下さった方に厚く御礼を申し上げ、ご挨拶いたします。

平成十一年六月一日



▲アンコールワット



終戦六十周年 広島・長崎宗教者バチカン・イタリア平和巡礼

平成十七(2005)年八月二十三日～三十日

「平和を願ってⅡ」 の発刊によせて

長崎県宗教者懇話会会長
カトリック中町教会司祭
野下 千年

長崎県宗教者懇話会と広島県宗教者連盟の合同企画により、昨年(平成十七年)八月二十三日から三十日までの八日間にわたって実施された「バチカン・イタリア平和巡礼の旅」から早くも半年が経過致しました。巡礼に参加された皆さまの胸中には、あの旅の感動がなお余韻をとどめていることと存じます。この度、参加された皆様から寄せられた旅の感想文をまとめ「平和を願って」と題する記念小誌を発刊できました。このことを、皆様とともに心からお慶び申し

上げたいと思います。

昨年二月、広島での第二十回広島長崎県宗教者平和会議は、原爆被爆と終戦六十周年を迎えての両被爆都市宗教者による合同記念行事につき審議がなされ、広島側からインド仏跡、長崎からはバチカン・イタリア巡礼と期せずして両方から平和を祈る聖地巡礼の実施が提案され、十年前にも行われた同じ行事に次ぐ第二回「バチカン・イタリア平和巡礼の旅」の実施が決議されました。長崎からは名誉団長としてバチカン当局との交渉にご尽力くださった高見三明大司教及び副団長の法生寺住職神崎正弘師ほか二十三名、広島からは副団長をお務め頂いた善正寺住職中川元慧師他四名、合計三十名の参加により実施されました。

新ローマ教皇ベネディクト十六世と各自が手を握りあつての接見、教皇庁立諸宗教



▲於バチカン

巡礼の旅 日程【平成17(2005)年】

8月23日(火)

長崎空港	07:10	NH372 全日空カウンタ ー前に集合
長崎発	08:00	
名古屋着	09:20	
名古屋発	10:30	LH737 空路フランクフルトへ(所用12時間5分)
フランクフルト着	15:35	着後簡易入国審査(ユーロ内、シェンゲン協定国)
フランクフルト発	16:30	LH3848 乗り継ぎ、空路ローマへ
ローマ着 [ローマ泊]	18:15	専用バス 着後ホテルへ

8月24日(水)

ローマ	午前:ローマ教皇との謁見	パウロ6世 謁見ホール
	午後:専用バス	ローマ市内観光 フォロ・ローマーノ、コロッセオ、トレビの泉
[ローマ泊]		

8月25日(木)

午前:専用バス	バチカン教皇庁諸宗教評議会表敬 (カステルドルガフ訪問)
ローマ発	15:00 専用バス 高速道路をアッシジへ
アッシジ着	17:30 清貧の聖フランシスコの聖地 [アッシジ泊]

8月26日(金)

午前:専用バス	聖フランシスコ大聖堂訪問、聖クララ教会
アッシジ発	11:00 専用バス 太陽道路をルネサンス発祥の地のフィレンツェへ 途中、イタリアブランドのアウトレット見学
[フィレンツェ泊]	

対話評議会訪問と同評議会副議長フェリックス・マチャード師との懇談、平和の聖者フランシスコゆかりの地アッシジ巡礼と同修道院の特別チャペルでのミサなど、得がたい数々の体験に恵まれた巡礼となりました。ローマで合流参加くださった妙行寺住職三角紘容師はこれを機会に私どもの宗教者懇話会の会員となつて下さったことはまさに神仏のお恵みでした。

また、この度の巡礼にあたり、バチカン訪問に関するお世話をいただいた和田誠神

父、ローマ市内見学の案内をお手伝いいただいたシント・ブスケット神父の現地在住の両師に感謝申し上げます。

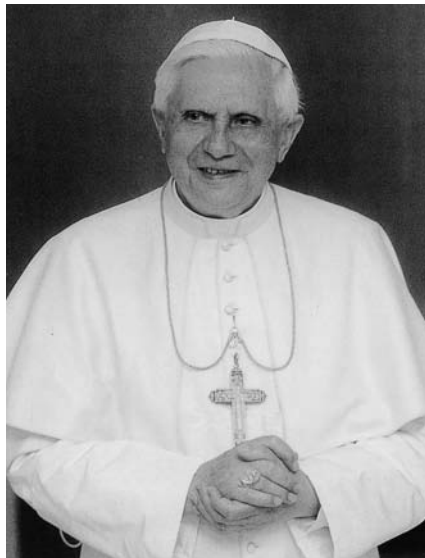
この記録集により、参加者各位の旅の記憶を再確認して頂き、あの時の感動を今一度新たにしていただければ幸いに存じます。なお、当誌刊行にあたり、感想文をお寄せ頂いた方々、および編集の労をお引き受けくださった長崎県宗教者懇話会事務局長諏訪神宮司大神照彦師ならびに権禰宜宮田文嗣師ほか同社務所の皆様に心から感謝の意を表します。



▲広島の宗教者方々と 左から 斎藤真仁師、吉村恵洋師、池田雅美師



▲於ローマ



▲ローマ教皇ベネディクト16世

▶ローマ教皇ベネディクト16世のご入場
世界各国より約1万人の老若男女で会場は埋め尽くされた



◀ローマ教皇との謁見
正木先生が固い握手

参加者【平成17(2005)年】

高見 三明 (カトリック長崎大司教区 大司教)
野下 千年 (カトリック中町教会 司祭)
上杉 千郷 (皇學館 理事長)
高木 麻里 (皇學館 大学生)
神崎 正弘 (法生寺 住職)
楠 達也 (光源寺 住職)
正木 晴彦 (光永寺 住職)
三角 紘容 (妙行寺 住職)
緒方 正典 (桃原寺 住職)
前田 敏博 (法生寺)
中川 元慧 (善正寺 住職)
隈部 健二 (法生寺)
葉山 茂實 (法生寺)
葉山 陽子 (法生寺)
吉村 恵洋 (普門寺 住職)
吉村 昇洋 (普門寺 前任職)
加藤 正行 (了願寺 住職)
松尾 久枝 (大音寺)
川上まどか (大音寺)
村上 泰将 (立正佼成会長崎教会 会長)
村上 尚子 (立正佼成会)
長谷 功 (カトリック平戸口教会 司祭)
斎藤 真仁 (カトリック広島司教区 司祭)
池田 雅美 (神田神社 宮司)
下條 一仁 (淵神社 禰宜)
水本 昌克 (皇學館 勤務)
山根 久典 (西九州新生活センター)
岩城 陽子 (西九州新生活センター)
川脇 重男 (カトリック中町教会)
大山 正通 (カトリック中町教会)
宮田 文嗣 (鎮西大社諏訪神社 権禰宜)
末松 信成 (JTB 添乗員)

8月27日(土)

午前:専用バス 花の都フィレンツェ市内観光 ドウオモ(サンタマリア大聖堂)、ベッキオ橋、ウフィッツ美術館、ミケランジェロ広場など
フィレンツェ発 14:30 専用バス 水の都のヴェニスへ
ヴェニス着 17:30 水上バス 水上バスに乗り換えてホテルへ
(オプション) ※ gondolaに乗って運河巡り
※カンツォーネ
〔ヴェニス泊〕

8月28日(日)

午前:徒歩 ヴェニス市内観光 ため息の橋、聖マルコ大聖堂、アンジェリコ壁画、ドウカレーレ宮、ベネチアガラス工房
ヴェニス発 13:00 専用バス ミラノへ
ミラノ着 16:00 ミラノ市内観光、ドウオモ、聖マリアテレグラッテ教会「最後の晩餐」、アンブロジョー教会
〔ミラノ泊〕

8月29日(月)

専用バス ホテルから空港へ
ミラノ発 10:35 LH3965 空路 フランクフルト経由帰国の途へ
フランクフルト着 11:55 着後 乗り換え
フランクフルト発 13:55 LH740 関西空港へ

8月30日(火)

名古屋空港着 08:15 入国手続き、貸切バスにて伊丹空港へ
伊丹発 JL2375 空路、福岡へ
福岡空港 午前 貸切バスにて長崎へ

ローマ教皇ベネディクト十六世に宛てた
長崎県宗教者懇話会
広島県宗教連盟からのメッセージ

〔訳文掲載〕

「御挨拶」

謹啓 ローマ教皇聖下におかれましては、益々ご清祥の事とお慶び申し上げます。

私たちは、歴代ローマ教皇が世界平和のために尽くしてこられたご貢献に心より感謝を捧げますと共に、このたび新たに教皇位にご就任された聖下が、これまでの意図を継承され、世界平和実現のため一層の熱意を示されることに対し、心より敬意を表します。

私たちは、一九四五年、世界初の原子爆弾による被爆体験を共有する日本の広島・長崎両市の諸宗教者団体で、異なる宗教の壁を超えて、共に核廃絶と世界平和を訴え、共に祈り続けてまいりました。原爆で二十一人の死者を出した広島・長崎では、今なお二十七万人の被爆者が、後遺症に苦しんでおられます。こ

の被爆者の方々にとって「過去を振り返ることは、未来に責任を担うことです」とヨハネ・パウロ二世聖下が来日に当たって述べられたお言葉は重く、私たち日本の宗教界もそのお心を共有しています。然しながら、この戦後六十年の間にも世界各地で戦争・紛争が幾度となく引き起こされ、多くの人々が犠牲となり痛惜の極みであります。

このたび、被爆ならびに第二次世界大戦終結六十周年を迎えるに当たり、両被爆都市の宗教者として、原爆と過去の戦争による犠牲者たちのご冥福を祈り、平和推進におけるリーダーとしての自覚を新たにし、永久平和実現のために、熱き祈りを捧げるため、ここローマ聖座への巡礼を決意しました。

聖下におかれましては、この私たちの決意をお汲み取りいただき、戦争のない地球・核兵器のない地球、そして世界の恒久平和実現のために、ご識見を賜りますように切にお願い申し上げます。

私たちは、広島・長崎に於ける原子爆

弾による惨状を聖下にひと目ご覧戴きたく、広島・長崎両市が共同制作した被爆情景の写真三十枚を持参させていただきました。このような惨状を世界の多くの人々の心に留めていただくため、また二十一世紀を世界平和実現の世紀とするためにも、ここバチカンにおいて、「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」の常設展示にご協力戴ければ、誠に幸いに存じます。

おわりに、聖下のご健勝、ご多幸を心よりお祈り申し上げます。

平成十七年八月二十四日

謹言

バチカン平和巡礼団名誉団長
長崎カトリック大司教

高見三明

長崎県宗教者懇話会会長
カトリック中町教会主任司祭

野下千年

広島県宗教連盟理事長
僧侶

池谷亮真



インド仏跡と キリスト教関連施設等巡拝の旅

平成十九(2007)年一月十七日〜二十六日



▲聖地ブッタガヤ(釈尊が6年間修行した場所)で祈る

インド参拝のこと

浄土真宗本願寺派光源寺住職
楠 達也

原爆六十年の平和巡礼でバチカン(終戦六十周年広島・長崎宗教者 バチカン・イタリア平和巡礼の旅、平成十七年八月)を参拝し、多くの学びをいただきました。その帰りの飛行機の中で、これも宗教者懇話会であったればこそこの会話の中に、野下神父様、長谷神父様と「次はインドに行つて仏跡を参拝しては」と話題が広がりました。

さらに「それならコルカタのマザーテレサの教会も訪ねよう」となり、このインド参拝が実現しました。

長谷神父と同室の十日間は楽しくもあり、また、よく飲みました。

そしてお互いに平和、いのち、原爆、自分の信ずるものの大切さ、他の人々の信ずる世界の大切さ、それを理解して初めて自分の信ずる世界の教えに、よりたしかな出会いが出来る……等々、語り合ふことはとても意味のあるものでした。

ここにそれぞれに文をいただいていますので、皆様に読んでいただきたいと思います。掲載させていただきました。

参加者【平成19(2007)年】

葉山 茂寛 (長崎市横尾)
 平山 雅敏 (長崎市高平町)
 一本 孝 (大阪府高槻市)
 一本 昭子 (大阪府高槻市)
 神崎 正弘 (長崎市緑町)
 神崎 弘子 (長崎市緑町)
 加藤 正行 (長崎市小ヶ倉町)
 楠 達也 (長崎市伊良林)
 松本久美子 (長崎市万屋町)
 長尾 一雄 (長崎県諫早市)
 長谷 功 (長崎県平戸市)
 野下 千年 (長崎市中町)
 山本 安則 (長崎市入船町)
 米倉 正久 (長崎市桜馬場)
 奥村 雅堂 (トラベルサライ)

1月23日(火)

ムンバイ発 06:30 9W479 空路、ポルトガル領であったゴアへ
 ゴア着 07:30 着後、聖フランシスコ・ザビエルの遺骸が安置されるボム・ジェズ教会や聖フランシスコ教会、カテドラルなどを参観

午後 海のシルクロード パナジの街を散策
 [フォート・アグアダ・ビーチ・ホテル泊]

1月24日(水)

ゴア発 14:05 9W472 午前中、アラビア海に面したリゾートホテルで帰国準備を兼ねてゆっくりと空路、ムンバイへ
 ムンバイ着 14:45 着後、ムンバイ市内のインド門などを巡覧

[タージ・プレジデント・ホテル泊]

1月25日(木)

ムンバイ発 11:20 SQ421 空路、シンガポールへ
 シンガポール着 19:10 着後、乗り換えの為に時間調整

[機中泊]

1月26日(金)

シンガポール発 01:00 SQ989 着後乗り換えて福岡空港へ
 福岡空港着 07:00 着後、空港にて解散

巡礼の旅 日程【平成19(2007)年】

1月17日(水)

福岡空港発 10:30 SQ990 08:30 福岡空港集合

シンガポール着 05:55 シンガポール航空(予定)
 シンガポール発 09:05 SQ416 シンガポールで乗り換え、インドの東玄関
 コルカタへ

コルカタ着 20:35 着後、市内のホテルへ
 [オベロイ・グランド・ホテル泊]

1月18日(木)

コルカタ 終日 コルカタ市内参観
 カーリー寺院、ジャイナ教寺院、マザー・テレサ女史のミッション・オブ・チャリティー本部と病院、国立博物館、フーグリ河

[オベロイ・グランド・ホテル泊]

1月19日(金)

コルカタ発 10:00 IC729 国内線にて Gaya へ
 Gaya 着 10:55 専用バス 着後、バスにて 仏教聖地 ブダ Gaya へ

ブダ Gaya 着 12:00 着後、釈尊ご成道の地 ブダ Gaya 参拝 (スジャータ村)

[スジャータ・ホテル泊]

1月20日(土)

ブダ Gaya 発 08:00 専用バス 2500年前に栄えた故地、王舎城 ラジギール へ
 ラジギール 着 11:00 霊鷲山、竹林精舎、七重の牢獄跡、城壁跡、ナーランダム 仏教大学跡

[インド・ホッケ・ホテル泊]

1月21日(日)

ラジギール 発 10:00 専用バス Gaya 駅に戻り、急行列車を利用して ムーガル サラ Gaya へ

12:30 ムーガル サライ 駅へ
 Gaya 発 14:10 急行列車 専用バスにて 夕刻のガンジス河へ

ムーガル サライ 着 17:35 専用バス ヒンズー 教徒が集う賑やかな夕刻の法要を参観

[クラークス・ホテル泊]

1月22日(月)

早朝 ガンジス河の沐浴風景を参観
 サールナート見学 (大塔、僧院跡、スリランカ寺院、博物館、迎仏塔)

ベナレス 発 15:30 IC805 空路、商都 ムンバイ へ
 ムンバイ 着 19:55 空港近くのホテルへ

[コーイヌール・ホテル泊]

僧侶と神父の インド巡拝

長崎県宗教者懇話会会長
カトリック中町教会司祭
野下 千年

初めてインドへの旅の機会に恵まれた。超宗派の宗教家をつくる長崎県宗教者懇話会は、互いに宗教や信条の違いを乗り越え、人々に戦争の愚かさを訴え、世界の真の平和を祈るための交流を続けている。インドへの旅はこの交流の一環として企画されたものである。

昨年、バチカン・イタリア巡礼には神主、僧侶、大司教や神父とそれぞれの信徒らが参加し、キリスト教側が案内役を受け持った。今回のインド仏跡巡拝には仏教の僧侶五人と檀信徒十人、カトリックから二人の神父と二人の信徒が参加して、お坊さんごとの案内で巡ることになった。

西洋文化圏に馴染みの深い私どもキリスト者にとって、この度のインドについては恥ずかしながら極めて半端な知識しか持ち合わせていない。

そこで出発直前になって俄学習に取り組み事にした。先ず『仏教聖典・釈尊の生涯とみ教え』（南禅寺禅センター発行）を読む。インド国民の八〇%が信奉するというヒンドゥー教についての基礎知識はインドの旅には不可欠。宗教者の旅とあれば、インドの宗教事情全般についても調べてみる。

驚くことに、世界に名が知られた、バラモン教、仏教、ジャイナ教、シーク教、そしてヒンドゥー教を加えると実に五つの宗教がインド産なのだ。そのほかユダヤ教、キリスト教、イスラム教など外来の宗教も、もちろんある。インドは諸宗教の母なる国、宗教の坩堝のような国だ。

こんな土壌を背景に二十世紀のインドには、世界的評価を受けた偉大な人物が現れた。国民詩人ラビンドラナート・タゴール（ノーベル文学賞受賞）、インド独立の父マホトマ・ガンジー（ノーベル平和賞受賞を四回固辞）、愛の修道女マザー・テレサ（ノーベル平和賞受賞、カトリック福者）である。マザー・テレサはマケドニア共和国出身だが、インド人になりきって生涯をインド人のため捧げ尽くしたために彼女の葬儀は国葬として営まれた。

三者に共通していたのは崇高な神への畏

敬と自然や命あるものへの愛、そして非暴力と平和への願いであった。これらの理念は釈尊やキリストの教えと全く共鳴する。インドは核保有宣言国である事に心いたむ思いである。

旅の初日はコルカタ中心街のヒンドゥー教とジャイナ教寺院のほか、マザー・テレサが開設した、瀕死の人々を収容する「死を待つ人々の家」を見学。その日の収容者数を示す壁に掛けられたカードには男子四十六人、女子六十五人と出ていた。この後マザー・テレサにより創設された「神の愛の宣教者会本部」を訪問、マザー・テレサ



▲聖地ブッタガヤ（釈尊が6年間修行した場所）

の遺体が白亜の石棺に納められて眠る霊安室で一同御霊の安らぎと遺された愛の事業にキリストの祝福を祈った。

ブダガヤの釈尊ご成道の地では菩提樹の陰の法要に心清められ、金剛宝座を拝してラジキールへ。ナーランダの仏教大学跡、釈迦ご説法の霊鷲山の頂での法要にあずかった。ベレナスの早朝は日の出とともに始まるヒンドゥー教徒たちのガンジス河沐浴風景の見学である。河岸は更衣場、洗濯場、

露天商い、野外火葬(荼毘)場もある。ガンジス河は生ける者を清め、死者を神々のもとに運ぶ神聖な河なのだろう。このあとサールナートの僧院跡や大塔などを見学し、仏跡巡拝の部を終了した。この後空路ポルトガル領ゴアへ向かった。

ゴアは聖フランシスコ・ザビエルがインドでの一人の日本人との出会いがきっかけで、日本への宣教を決意し、その準備をしたところ。日本での布教の後、中国へ向か

う途中病死し、遺体はここゴアのボン・ゼズ教会に現在も安置されている。この聖遺体の祭壇で私と同行の神父二人が捧げるミサに全員が参加し、世界の平和を祈り、巡礼の無事終了を神に感謝した。

神仏のご加護により、今回のインドへの旅が諸宗教間の対話と絆を今後一層強くしてくれることと嬉しく思うのである。

※読売新聞(長崎)平成19(2007)年に寄稿した「僧侶と神父のインド行」より転載

インド仏跡巡拝で感じたこと



協力会員
米倉 正久

十日間の巡拝を計画された住職様、また企画実行まで約一年間トラベル会社の奥村様とインドのライセンスを持つポール様の連携プレイに対し心よりお礼申し上げます。今日まで海外旅行した中で一番遠い国での巡拝の為、不安がありました、一日目より帰国まで何の不安もなく楽しい巡拝が出来た事を皆様に感謝申し上げます。

戦後六十二年、日本の復興を考えると、インドという国は何を目標に考えているの

か？ 今後生活水準が一般の人々まで向上して行くのだろうか？ IT部門では世界一とも言われながら、あまりにも貧富の差が大きいのは、日本では考えられない事と感じました。

お釈迦様が説法された霊鷲山参拝で各住職様の説法に参加し、私も住職と同じ場所でお経を一緒にあげさせて頂いたことに対し、心より感謝申し上げます。

今回の巡拝で第一に感じた事は、日本は

お寺参りと申せば、高齢者が多い国です。他国、特にチベット民族は親・子・孫まで一緒に参拝するお国柄でしょうか。日本人、私達も先祖があつて自分があるという事をもっともっと広めなければならぬと思います。

帰国して友人と話す中で、インドは世界一良い生活をし、日本はインドにお世話になっているという話ばかりでした。今回の旅は観光ではなく、巡拝の旅でしたと皆に申し上げ、話を締めくくりました。次回また計画がなされるならば、健康であるかぎり参加出来る事を念じ、お礼文とさせていただきます。

インド仏跡巡拝と 宗教見聞の旅に参加して

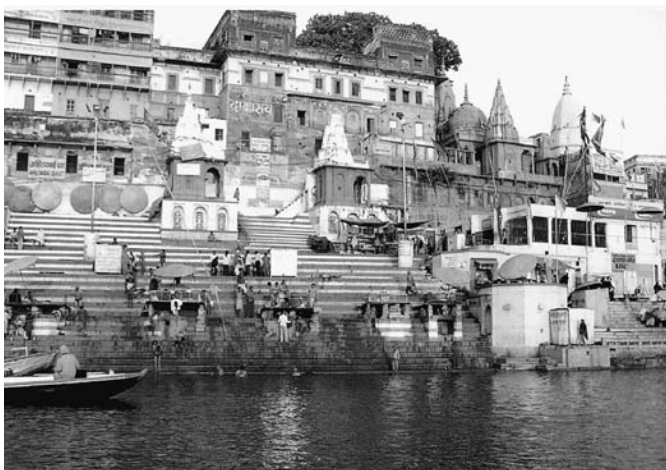
真宗大谷派法生寺住職
神崎 正弘

十二年前にインドカイトリアに行こうと計画しておりました。広島先輩三末司教様をお願いをして実行されましたが、私の方はお寺の増改築と、当時実父の容態が悪く、病院の入退院の繰り返しでも参加できず、非常に残念でありました。その時は、上杉宮司、大光寺ご住職様が参加されました。

今回は、是非実現させたいと思っておりました。私たちのスケジュールに都合を合わせて頂きまして、参加する事が出来ました。私の寺の方からは、葉山茂実総代と、その友人である長尾氏、私の長女である弘子が参加しました。光源寺様の取り計らいにて三回程トラベルサライ(大阪)より長崎に出張して頂き、添乗員である奥田氏より説明を受けました。両者にこの場を借りて感謝の意を表明させて頂きます。



▲霊鷲山にて読経



▲ベナレス河畔

平成十九年一月十七日(水)八時二十分福岡空港に集合するには、長崎駅バスターミナルより朝一番午前五時台の急行バスで出発しなければなりません。早朝に起床。各々の場所から福岡空港で現地集合となりました。チェックインを済ませ、シンガポール航空655便にて、十時二十分の旅に出ました。これで私の寺より電話でのコールバック依頼があっても、十日間は法務より解放されたと思えました(正直な気持ち！)

十六時近くにシンガポール空港に到着。約二時間のトランジット(時間調整)がありました。広い空港のショッピングモールを見てまわり、その後、仲間が席を取って休憩している場所に娘と合流させて貰いました。私はビールよりもミルクが良いと思いました。娘にホットミルクを買ってくるようお願いしました。ところが、ホットミルクが無いようで、コールドミルクで、味を舌で確かめると薄味だと思いましたが、一気に飲み干しました。これが原因? かどうか、す

ぐに三十分もせず、トイレ探しをするハメに。パンパス（大人用おむつ）が必要かと思うくらいにストレートに下の出口より音高らかにトイレで鳴り響きました！便秘性であった私はどこへ行ったの？という感じでした。おかげで、腸内がスツキリ・サツパリしたと確信しました。インドに到着してから注意すればいいだろうと思っていましたが、認識不足でした。

それから約四時間のフライトでコルカタ（旧名カルカッタ）に到着しました。ヒन्दウ教寺院、ジャイナ教寺院、聖ジョージ教会（終末の家）、マザーテレサの病院及びその本部を訪問しました。日本人のシスター影井様とお会いできました。シスター達の献身的な姿に接して頭が下がる思いでした。朝・昼・夜とインド国内線での機内食はインド風で、どうも私の腹には合わないようです。熱と火が通ったものをチョイスして食事をとりました。乞食、物乞い、その他の人々にいつも取り囲まれて巡拝の旅は続きます。その人々の生活・習慣を見てカールチャーシヨックを受けました。

一月十九日（金）十時コルカタを出発して空路ガヤに到着。機内食はほとんど食べ

ず、ジュースのみ。ゆっくりとした雰囲気、田舎風の空港。空港で三帰依がパーリ語で流れていました。何人かが気づき、一緒に唱和していました。すべてが全音符で解放されているような曲感でした。さすが、GAYA！と感動しました。

スジャータホテルに着き、部屋にて着替えてブッタガヤに参拝。場所はインド北部に位置し、一番貧しい州都だそうです。ビハール州、ブッタガヤ、ガヤ、スジャータ村、尼蓮禅河の畔、菩提樹の下にて六年間に及ぶ苦行を経て、悟るものなし、河にて沐浴されて、スジャータという娘の乳粥を食されて一週間後に覚者となられた有名な場所です。そこで感話をせよとの事。準備出来ないまま、現地に到着、入場しました。靴はダメ、靴下もダメで素足で歩きました。すごい人々の中に身を置きました。各国の民族衣装の人々、チベットのラマ僧は特に目につきます。八千人程の僧団でした。菩提樹は四代目だそうで、大木の根元の所で、赤い絨毯が敷かれている場所を確保して頂いておりました。感謝であります。私達は改良服のまま、正座して歎仏偈を唱和しました。続いて、三帰依もパーリ語で唱和。

その後三分程時間を頂いて感話させて頂きましたが、感情腺がゆるんでどうにもなりませんでした。

勤行と感話で感涙でありました。感激で終生忘れ得ない思いでした。皇太子でありながら、王舎城を出て、王位を捨て、妻とも子供とも家来とも別れ、衆生済度の為に出家され、今日に至ります。仏教の華が咲いていることを知らせたい、その御恩を報じる為に日本から西の端の長崎より出向く事が出来ました。「有り難うございます！お釈迦様！」と大声を発したい程の興奮でございました。

今回の巡拝の旅が実現されて、大変な喜びとする一人でございます。神父様達と信者の方々と一緒に参加させて頂いた事を神仏に感謝したいと思えます。次回も是非命があれば、参加させて頂きたいと思っております。それぞれの場所には各担当の住職が登壇されますので、述記を止めます。大無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の説かれた場所に是非再度立ちたいと願って筆を置きます。

「Buddha 4 LIFE」皆様大変お疲れさまでした。See You Again!

インド仏跡巡拝と 宗教見聞の旅に参加して 2

神崎 弘子

ナマステ。

「インドは呼ばれなければ行けない国」
とも聞いた事があります。今回は母（坊
守）の代理で長女である私、弘子が巡拝の
旅に参加させて頂きました。初めての父と
の旅。また、他派のご住職様、門信徒様、
神父様、信者様達とご一緒でき、貴重な経
験をさせて頂きました。これも世界でただ
一つの被爆国である日本、長崎の宗派の枠
を超えた、一般には在り得ない巡拝の旅で
あり、十日間を共に過ごした皆様と、トラ
ベルサライの添乗員である奥村ジー（イン
ドの敬称。おばちゃんでも○○ジーと呼
ぶ）に感謝の意を表したいと思います。

「百聞は一見にしかず」今回の旅はこの
一言につきまます。

聖地（holy ground）を巡り、各担当の
ご住職様より説法を聞き、更にはトラベル



▲ゴアのザビエル教会

サライの奥村ジーより補足して頂く。その
宗教の開祖・創設者にまつわる奇跡や具体
的な出来事が起こった場所、「聖地」でこ
れ以上の生きた話は無いと思いましたが。ま
た、有識者の集団を相手にガイドをする奥
村ジーは、どれだけ勉強・経験されたのか
と驚かされました。もちろん仏教だけだ
なく、ヒンドゥー教、キリスト教、その他多
数：etc。皆様と同行させて頂いた一番の
特典は、有識者ご一行ということで、一般
の方々が決して入れない場所に案内して頂
いた事でした。

サラリーマンの家庭と異なり、父の仕事
を見てきたつもりでしたが、聖地で、父や
皆様の唱和は鳥肌ものでした。とても言葉
では言い尽くせないものを深く胸に刻みま

した。ブツダガヤ大聖堂では各国の僧侶と
巡拝者数に圧倒され、サールナート（初転
法輪の地）では鹿の国の物語に触れ、霊鷲
山（天竺）ではその頂上でサンセットに向
かいながら、空に響くお経が現実の世界で
ないような、神々しいシチュエーションを
醸し出していました。

寺の娘なので、教会でミサに出ることは
無かったのですが、ザビエルの遺体が安置
されているボズ・ジェムズ教会である神父
様達のミサは人生で初めての経験でした。

今私は、首にはマザー・テレサの本部で頂
いたコインをネックレスにつけ、左手には
ブツダガヤで入手した白檀と菩提樹の数珠
をつけて一人他宗教です。（笑）

インドでは、聖地以外では常にインド人
に驚かされました。日本の常識はインドで
は通用しないのです。驚いた順に書かせて
頂くと、

- ① インド人はトイレの後、紙で拭かない。
- ② コルカタでの運転マナー（車線なんか
関係なし！）。
- ③ 河の畔での瞑想（大便）。
- ④ 物売りのしつこさ（生活がかかってい

るからしかたない)。
 ⑤ 一部残っているカースト制度。
 ⑥ ガンガーでの沐浴風景(火葬含む)。
 です。恐るべしインド人。

最後に：
 聖地巡り、説法有り、ミサ有り、ダジャレ有り、腹痛有り、物売りも同行(最後に

は腕いっぱいにかけた数珠全部で「三千(さんじえん)円」が印象的)の珍道中でしたが、インドというワンダーランドに行けた事に感謝致します。
 次回は坊守、若院にも。インドの貧しい大人達、子供達の笑顔が絶えない事を願って：ダンニャワード(感謝)

合掌

インド旅行—— 聖フランシスコ・ザビエルの 御足跡を訪ねて

カトリック平戸口教会主任司祭
 長谷 功

インド仏跡巡拝と宗教見聞の旅、第七日目、一月二十三日。我々一行は空路ポルトガルの統治領であったゴア空港に降り立った。インド南西部ゴア州、ムンバイの南四百キロメートルの地。今までのインドとは気候、雰囲気ともに違った別のインドがあった。

さっそく聖フランシスコ・ザビエルの遺



▲インド・ゴアのボン・ジェズ教会
 ザビエルの遺体が安置された棺

体が安置されているボンジェズ教会を訪れた。「善きイエスの聖堂」を意味し、一五九四年に建設されたルネッサンスとバロックを折衷した様式の教会で、右側にイエズス会の本部修道院が並んでいる。

十六世紀初頭、ビジャープルイスラム王

朝の支配下にあったゴアは、ポルトガルの艦隊によって攻略された。すっかり破壊されたゴアは占領され、リスボンを模して華麗に再建されると、ポルトガルの対アジア貿易とキリスト教宣布の基地となった。

日本で初めてキリスト教を伝え、二年と四ヶ月鹿児島、平戸、山口、京都、大分などで布教活動をし、多大な成果を残したザビエルは、一五四二年五月六日にインドのゴアに上陸している。聖人は一五四二年から一五四八年までの間ゴアを中心にインドの東南の海岸地帯をはじめ、マラッカ、モルッカ諸島などで懸命なる布教活動を行っている。ザビエルは徹頭徹尾、神の御栄えのために働こうと思ひ、自分の心や目的は、神がことごとくご存じであると言つて、どんな不便や困難の中にあつても、全て神を信頼していた人々に神のみ教えを伝えた。私の今度のインド旅行に参加した大きな理由は、私が尊敬する聖フランシスコ・ザビエルがまず東洋のインドで宣教師、司祭として熱き心で働かれたインドのゴアを訪れ、聖人の偉大な業績に触れ、生誕五百周年の記念の年を締めくくりたかったのである。その目的は達成された感があった。

まず、修道院の廊下の広間でイエズス会の老司祭から歓迎のことばでもって迎えられた。ザビエルを中心にした話であった。その後、聖人の遺体が安置されている祭壇に案内され、念願のミサが捧げられることになった。密閉されていた部屋を特別に我々のために開けてくださり、貴重な貯蔵品を見せていただいた。祭服を着けて祭壇に向かう途中、二、三人の現地あるいは巡礼のインド人の母親から子供に祝福を請われ、感激のうちに司祭としての祝福を与えた。聖人が祀られている祭壇で、先輩の野下神父と一緒に巡礼者全員参列の中で記念ミサが捧げられた。後方には多数の他の巡礼者もミサに参加していた。事前に日本からの巡礼者によるミサが捧げられると知らされていたからである。

神は一つ、秘跡も一つ、信仰も一つ、教会も一つ、全世界どこに行っても、パンとぶどう酒の形で捧げられる犠牲の祭り、ミサは同じ。キリストからの愛の賜物である。聖フランシスコ・ザビエルを讃える賛美と感謝の祈りであった。この記念聖堂にはたくさん巡礼者で賑わっていた。インドの仏跡巡拝とまた違ったキリスト教の世界の

姿である。

昼食後、再び訪れたオールドゴア、そして最大のカテドラルのフォサードを見学した。イタリアトスカナ地方の聖堂に範をとったというルネッサンス様式の聖堂で、一六一九年に竣工したという。北側の鐘塔は落雷のため失われていたものの、内外ともに美しく修復され、一九八六年ユネスコ世界文化遺産に登録されている。現在でもミサが執り行われている聖堂である。鐘塔に吊された鐘はゴアでもっとも大きく「金の音色の鐘」と謳われた。

我々の仏跡巡礼の旅は日本の十倍もの広さを持つインドを東・北から西へ、飛行機を使い、急行列車に乗り、貸切バスで走る旅であったが、一言でインドの全体像を言い表すことの出来ない不思議な国である。目で見、肌で感じるインドはある意味で日本よりずっとずっと遅れた国のようであるが、その中に入って、生活するうちに最も自然に、正直に生きていくような感じがした。ひさしぶりに大自然に向かつて立ち小便をしたし、乾期に水のない世界で人間が懸命に生きるインドの人びとの姿はまた別の意味で一番人間らしい自然の生き方をして



▲大塔の樹下 金剛法座で各派の皆様と

いるんじゃないかなと思うこともあった。たしかにインドという国は一度訪れて満足できる国ではないし、場合によっては何度でも訪れたい不思議な国である。この度、インド仏跡巡拝と宗教見聞の旅に参加できたことを大変嬉しく思い、世話をした下さった旅行会社の奥村さん、そして参加された皆さんに心より感謝申し上げます。

二〇〇七年九月二十日

カトリック平戸教会にて



トルコ・イスラームへの 巡礼・平和交流の旅

平成二十二(2010)年十月十一日〜十八日



▲広島・長崎原爆展メンバーと



▲イスラム教指導者のお話を拝聴するメンバー



▲イスラム教大僧正・アククックラー師とアイボール

平成22(2010)年10月、長崎からトルコ平和使節団がトルコ共和国を訪問した。使節団には長崎県宗教者懇話会をはじめ、被爆手帳友の会・高校生1000人署名メンバーなどが参加した。現地では、心のこもった歓迎を受け、現地の高校を訪問し交流を深めた。また、原爆写真展の展示も行われた。



▲長崎の高校生平和大使と、現地の高校生との交流



▲トルコの日本庭園にて



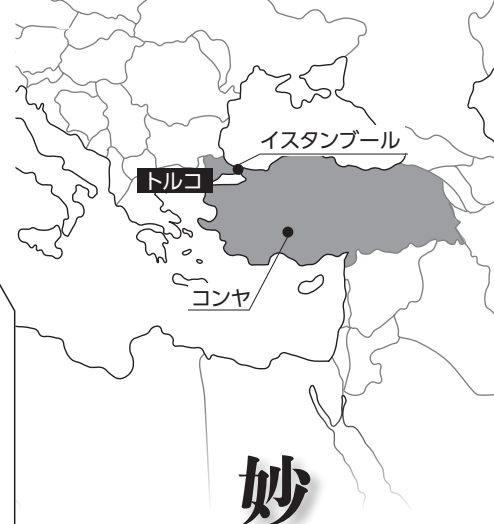
▲トルコの高校での交流風景



▲トルコの日本大使館



▲トルコで遺跡を研究している諫早市出身の大村氏



表敬訪問の旅 日程【平成23(2011)年】

【諏訪神社班一行】

12月15日(木)

12:15 神社発 羽田へ
〔品川プリンスホテル泊〕

12月16日(金)

08:20 ホテル出発
08:48 品川発成田エクスプレス乗車
12:35 成田発
16:10 パリ着(日本時間12月17日 00:10)
飛行距離9720キロ
パリで2時間のトランジット
20:10 パリ発(2時間遅れ)

12月17日(土)

00:30 イスタンブール アタチュルク国際空港着(所要時間3時間20分)
ドクター・アリの迎いでイスタンブール空港近辺のホテルへ
02:05 ホテル着(シャワーと荷物の整理で不眠)
04:30 妙行寺・三角住職一行 9名着 合流
アハメット夫妻の案内でイスタンブール空港へ
06:30 イスタンブール発
コンヤ着
09:00 朝食・休憩
15:00 ホテルロビー集合・メブラーナミュージアムへ出発
トルコの高校生くらいの子供達から大歓迎を受け、写真撮影
一旦ホテルへ戻り、白衣・袴に衣装替え、式典会場へ向かう
19:00 式典およびセレモニー
22:00 式典終了後、会場でアブドゥッラー・ギュル トルコ大統領と面会
(翌朝の新聞に模様が掲載された)

12月18日(日)

08:15 コンヤ発
10:00 イスタンブール着
一旦ホテルへ荷物を預け、観光へ。トプカプ宮殿・ブルーモスク他
20:00 ボスポラス海峡を見渡せるレストランにて夕食

12月19日(月)

朝食後ホテル発 イスラム長老を訪問
15:00 シビライゼーションセンターで神道講演・お茶・生け花のセレモニー
その後イスラム信者の修行の館で修行食

12月20日(火)

午前:センターバザールで買い物
午後:ドクター・アリの案内でモスク見学 ボスポラス海峡をのぞむ喫茶店に
て休憩
ドクター・アリ、アハメット夫妻の見送りを受け、帰途につく

12月21日(水)

07:00 成田着
〔品川泊〕

12月22日(木)

帰崎

妙行寺・諏訪神社一行の トルコ・イスラームへの表敬訪問

平成二十三年(2011)年十二月十五日(土)～二十二日

参加者【平成23(2011)年】

三角 紘容(妙行寺 住職)
信者一同8名(妙行寺)
松本 亘史(諏訪神社 宮司)
松本 守久(諏訪神社 権禰宜)
大川内朋子(諏訪神社 巫女)
草野 陽子(諏訪神社 巫女)



▲トルコ大学での茶道



▲トルコのアリさん他役員の方々



▲トルコ大学教授によるイスラーム教についての講義



▲トルコ大学での神道レセプションに於いて、諏訪神社の巫女の舞(浦安の舞)を奉納した

表敬訪問の旅 日程【平成23(2011)年】

【妙行寺班一行】

12月14日(水)
18:50 長崎発
20:25 羽田着
[ANA インターコンチネンタル ホテル泊]
12月15日(木)
08:30 ホテル発 リムジンバスにて成田へ
11:50 成田発
16:25 パリ着
[Le GRANDO 泊]
12月16日(金)
14:10 パリ発
18:40 イスタンブール着
[RAST HOTEL 泊]
12月17日(土)
06:30 イスタンブール発
コンヤ着
[AMENON HOTEL 泊]
イスラーム教最大の式典に参加など
12月18日(日)
08:15 コンヤ発
イスタンブール着
[RAST HOTEL 泊]
12月19日(月)
08:15 コンヤ発
イスタンブール着
[RAST HOTEL 泊]
12月20日(火)
13:45 イスタンブール発
16:25 パリ着
[Le GRANDO 泊]
12月21日(水)
パリ泊
[Le GRANDO 泊]
12月22日(木)
19:30 パリ発
12月23日(金)
15:25 成田着
12月24日(土)
11:15 羽田発
13:10 長崎着



▲▼シャマ(舞)の奉納



▲モスク寺院前にて



▲モスク寺院前にて



▲夜のモスク寺院



かくれ念仏遺跡巡拝

平成二十四(2012)年八月十八日〜二十日

※「水琴窟」第11号(2009年6月30日)より引用・抜粋させて頂きました。

「かくれ念仏」とは

島津氏の領土であった薩摩や大隈(現在の鹿児島県)、日向の諸県地方(宮崎県都城周辺)、相良氏の領土であった肥後の人吉地方(熊本県人吉市)において、浄土真宗禁制政策がとられ、真宗門徒に対して過酷な弾圧が加えられた。しかし、真宗門徒はひそかに信仰を続け、その念仏の信心に生きた方々を「かくれ念仏」と呼ぶ。(東北では「かくし念仏」が存在した。)

「かくれ念仏」略年表

- 1540 島津氏、薩摩半島まで勢力挽回
- 1549 フランシスコ・ザビエル、鹿児島に上陸
- 1555 相良氏、浄土真宗を禁止
- 1570 島津氏、薩摩国をほぼ平定
- 1578 島津氏、大隈、日向も平定
- 1587 島津氏、豊臣秀吉に降伏
- 1597 島津義弘、浄土真宗を禁止
- 1599 島津家久、浄土真宗門徒であり重臣の伊集院忠棟を手打ちにする。忠棟の嫡男忠真、家久の理不尽を訴え庄内の乱を起こす
- 1600 庄内の乱の鎮圧とともに、伊集院家家臣団の残党狩りと浄土真宗門徒の弾圧も行われる
- 1605 島津家久、浄土真宗の禁止の徹底と門徒の報告を求める
- 1624 島津家久、浄土真宗とキリスト教を法度とする(弾圧の制度化)
- 1632 島津家久、浄土真宗とキリスト教禁制と刑罰の徹底を指示
- 1635 最初の宗門改・宗門手札改が実施
- 1638 藩内各郷での浄土真宗監視体制の整備
- 1642 郷土(下級士族)に対する浄土真宗監視体制の整備
- 1655 宗門改のための宗体座が設置される(1709年に宗門改所と名称変更)
- 1768 薩摩藩家老榊山左京、各郷の五人組で浄土真宗門徒の摘発にあたり、共同責任とする旨を発する
- 1835 「本願寺財政改革上納帳」発覚に伴う、浄土真宗に対する天保の大弾圧
- 1843 薩摩門徒から本願寺へ、天保大法難における、嫌疑者に対する拷問の様を報告
- 1858 加世田郷で蔵元一揆が起こる(江戸時代薩摩で唯一起こった一向一揆)
- 1863 薩英戦争勃発
- 1868 廃仏毀釈始まる(1876年まで薩摩には一ヶ寺もなくなる)
- 1869 書籍奉還
- 1876 鹿児島県参事、各区長宛に信仰の自由を布達、東西本願寺開教に伴い布教活動を開始
- 1877 西南戦争始まる 開教師7名、薩軍によって惨殺
- 1898 禁制時代死亡者追弔法要が厳修
- 1988 「かくれ念仏」顕彰・真宗復興110周年記念法要厳修

※「真実に生きた人々ー薩摩のかくれ念仏ー」真宗大谷派鹿児島別院発行を参照



▲立山(たっちゃんま) かくれ念仏洞のご本尊

平成24(2012)年8月18日、野下千年師、下窄英知師他12名、代表を神崎正弘師が務め鹿児島県の知覧町など、南九州への巡礼旅行を行った。主な目的は、「かくれ念仏」関係施設等への巡拝である。「かくれ念仏」の歴史を紹介する。



▲かくれ念仏洞入口碑



▲念仏洞の狭い入口

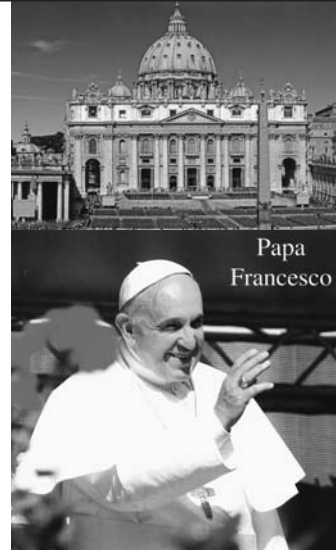


▲ご本尊を隠して運んだ「御本尊お運び魚籠(びく)」

広島県宗教連盟・長崎県宗教者懇話会 共催 巡礼旅行のご案内 より

期間 平成27(2015)年
6月19日〔金〕～6月27日〔土〕

月/日 発着・滞在地	スケジュール(宿泊地)
6/19(金) 長崎発、広島発 羽田着	長崎・広島空港より羽田空港へ (機中泊)
6/20(土) 羽田発(全日空) フランクフルト着 フランクフルト発 マラガ着	ドイツ・フランクフルトへ (時差 7 時間:所要12時間10分) 着後、乗換てスペイン・マラガへ ■スペイン・アンダルシア地方観光 (マラガ泊)
6/21(日) スペイン アンダルシア地方	■スペイン・アンダルシア地方観光 白い壁と色鮮かな花々で演出される ミハスの町並を訪れます ピカソが生まれた街マラガ、アルカ サバ、ヒブラルファロ城なども訪れ ます (グラナダ泊)
6/22(月) グラナダ	◆スペイン・グラナダにて平和会議 (アルハンブ宮殿) 【世界遺産】アルハンブラ宮殿とヘネ ラリーフェ庭園の観光 他 (グラナダ泊)
6/23(火) グラナダ マラガ ローマ	マラガよりイタリアローマへ (航空便は変更あり) (ローマ泊)
6/24(水) ローマ	◆バチカン訪問 教皇様の謁見、サンピエトロ大聖堂、 諸宗教対話省訪問、ローマ市内巡礼 (ローマ泊)
6/25(木) ローマ	■イタリア・ローマ観光 【世界遺産】フォロ・ロマーノ、コロッ セオ、パラティーノの丘、カンポ・デ フィオーリ広場など ●オプションツアー アッシジ日帰り観光 7:00～19:30 サンタキアラ教 会・サンフランチェスコ教会・ポポロ 宮・市庁舎など (ローマ泊)
6/26(金) ローマ発 フランクフルト着 フランクフルト発	午前中自由行動 空路、帰国の路へ 着後、乗換にて、羽田空港へ (時差 7 時間:所要11時間25分) (機中泊)
6/27(土) 羽田着 羽田発 長崎着、広島着	着後、入国手続後、空港にて解散 各自、長崎・広島へ ※長崎行きは18:40発



■サンピエトロ寺院と
第266代ローマ教皇フランシスコ

終戦70周年事業 バチカン・ス・ペイ 平和巡礼の旅

各位には、当会運営に際しまして常々格別のご高配を賜り衷心より厚く御礼申し上げます。

さて、平成27(2015)年はご周知の通り終戦70周年の節目の年を迎え、私たち宗教者は改めて原爆殉難者を始め全戦没者に対し慰霊の真心を捧げる次第です。

この戦後70年を顧みるとき、世界各地で戦争・紛争・テロリズムが幾度となく繰り返され、多くの人々が犠牲となり痛惜の極みであります。人類初の原子爆弾の悲劇を体験した広島・長崎両都市の宗教者として

は、このような戦争・紛争のない平和で美しい地球を次世代へ残せるよう祈りを通じて努力して行かなければなりません。

つきましては、この意義ある年に今一度、諸宗教者(神道・仏教・キリスト教・諸宗教・イスラーム)が集い世界平和について考える機会をと、世界平和を訴え続ける歴代ローマ法王の聖座バチカン市国及びスペイン巡礼の旅を左記の通り企画いたしました。

何卒、この趣旨をご理解いただき多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます。

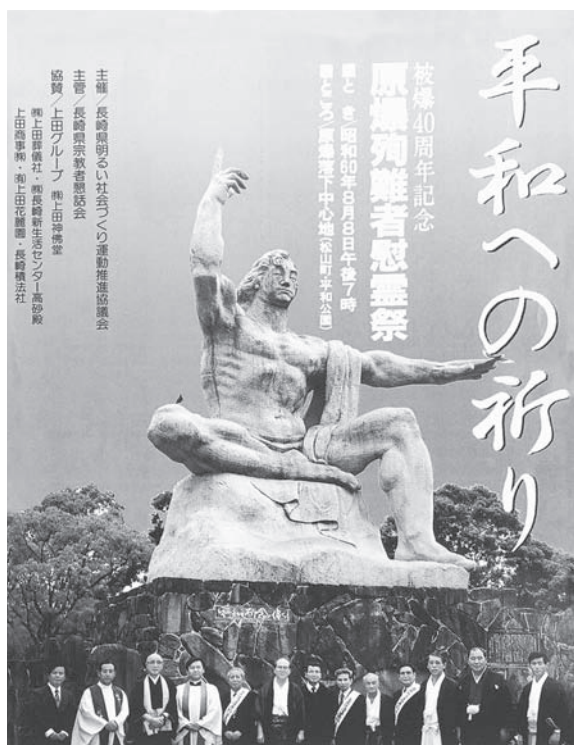
第三章

原爆殉難者慰霊祭

平和への祈り

原爆殉難者慰霊祭。ホスター

昭和60年(1985)
～平成26年(2014)



昭和60・61年(1985・1986)
平和祈念像前にて 13名参加



昭和62・63年(1987・1988)
浦上天主堂前にて 18名参加



平成4年(1992)
大浦教会内にて 13名参加



平成元年(1989)
諏訪神社にて 14名参加



平成5・6年(1993・1994)
諏訪神社にて 17名参加



平成2・3年(1990・1991)
大音寺山門前にて 18名参加



平成10年(1998)
原爆中心地にて 13名参加



平成7・8年(1995・1996)
原爆中心地にて 22名参加



平成11年(1999)
大光寺山門前にて 14名参加



平成9年(1997)
大音寺本堂前にて 20名参加



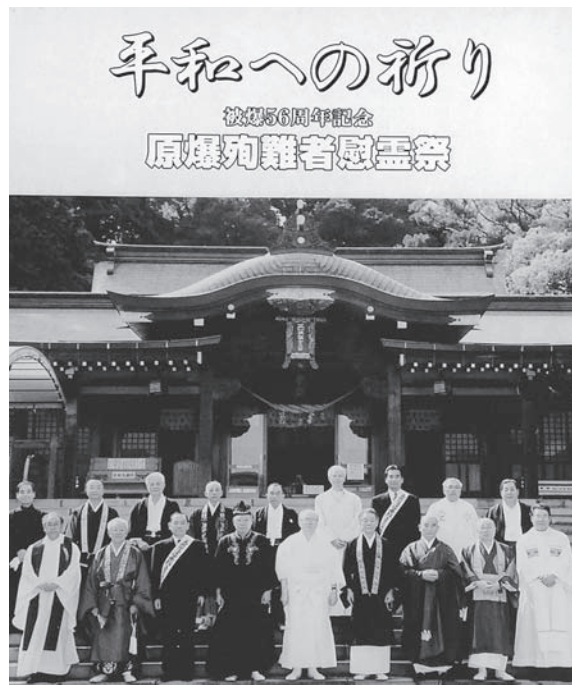
平成15年(2003)
浦上天主堂前にて 21名参加



平成12年(2000)
諏訪神社にて 17名参加



平成16年(2004)
平和祈念像前にて 22名参加



平成13・14年(2001・2002)
諏訪神社にて 18名参加



平成19年(2007)
興福寺本堂前にて 14名参加



平成17年(2005)
桃源寺(諫早)山門前にて 19名参加



平成20年(2008)
長崎県護国神社にて 27名参加



平成18年(2006)
天理教(諫早)教務所にて 14名参加



平成23年(2011)
立正佼正会長崎教会にて 43名参加



平成21年(2009)
浦上天主堂前にて 33名参加



平成24年(2012)
原爆中心地にて(ALB) 35名参加



平成22年(2010)
光永寺山門前にて 37名参加



平成26年(2014)
大浦天主堂にて 39名参加



平成25年(2013)
光源寺にて 27名参加



▲第42回原爆殉難者慰霊祭 祈りが込められた千羽鶴

被爆69周年 第42回 原爆殉難者慰霊祭 次第



▲第42回原爆殉難者慰霊祭 式次第の表紙

と き 平成26(2014)年8月8日(金) 午後7時
Friday August 8th Heisei26 (2014) 7:00PM

ところ 長崎原爆落下中心地公園(長崎市松山町)
Atomic Bomb Hypocentre (Matsuyama-machi)

主催 長崎県宗教者懇話会
(FRIEND) Fellowship of Religionists in Nagasaki for Dialogue

主管 長崎県明るい社会づくり運動推進協議会
Nagasaki Prefectural Association for The Promotion of a Healthy Society

特別参加 世界連邦日本宗教委員会／広島県宗教連盟
世界宗教者平和会議日本委員会

後援 (株)長崎新生活センター法倫會館 諫早法倫會館
ブライダルサロンウィ／(有)上田花麗園
メモリードグループ(ガーデンテラス／長崎ロイヤルチェ
スターホテル／メモリード典礼會館／稲佐メモリードホール／
大橋メモリードホール／公善社／稲佐會堂)

■ 第42回原爆殉難者慰霊祭関連行事

18:00 特別公演 能舞「地の心」 能楽師 清水寛二氏

18:45 トルコ・イスラーム平和の祈り

19:00 第42回原爆殉難者慰霊祭

(司会：浅田眞澄美)

■ 雅楽 奏楽

天理教長崎教区雅楽部

■ 開式の辞

法生寺住職 神崎正弘

■ 賛歌合唱(献水の儀 終了まで)

長崎カトリック合唱団／佐世保女子校久田学園

ルンビニーコーラス／佐世保コールソレイユ

PLコーラス隊／佐世保立正校成会

■ お清めの儀

天理教長崎教区

■ 献水の儀

日本聖公会九州教区主教 武藤謙一

日本聖公会神戸教区主教 中村 豊

日本聖公会沖縄教区主教 上原榮正

長崎聖三一教会牧師司祭 柴本孝夫

■ 平和の誓い・平和の灯

大音寺 アメリ もも スティーヴンズ(5歳)

レイラ めい スティーヴンズ(2歳)

新宗連長崎県協議会青年会

■ 慰霊のことば

①長崎県宗教者懇話会

松尾 法道 興福寺住職

②教皇庁諸宗教対話評議会

インドゥニル・カンカナマラグ 次官補神父

③世界連邦日本宗教者委員会

田中 恆清 同会々長 石清水八幡宮宮司

④世界宗教者平和会議日本委員会(WCRP)

樋口 美作 同会監事

■ 黙とう

鎮西大社諏訪神社宮司 池田剛康

■ 慰霊電文披露(司会者)

■ 献花(宗教者・来賓)

■ 「長崎の祈り」合唱(参加者全員)

■ 閉会の辞

カトリック上神崎教会司祭 橋本 勲

■ 一般参列者献花

雅楽奏楽 天理教長崎教区雅楽部

原爆殉難者慰霊祭 慰霊のことば



◀第42回原爆殉難者慰霊祭
原爆落下中心碑に設けられた祭壇

被爆六十周年

第三十三回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成十七(2005)年八月八日〕

慰霊のことば



世界連邦日本宗教委員会
最高顧問・大本教主
出口 紅

長崎原爆六十周年を迎え、原爆の犠牲となられました殉難者の御霊の御前に謹んで追悼の誠をお捧げ申しますとともに、今も被爆による後遺症に悩み苦しんでおられる方々に心からお見舞を申し上げます。

本年も長崎市民の皆様、また長崎県宗教者懇話会の皆様方により原爆殉難者慰霊祭が、いとも厳粛に斎行されましたことを心より感謝申し上げますと共に、ご関係各位のご尽力に深く敬意を表したく存じます。

今から六十年前、原子爆弾の投下により、美しく歴史ある長崎の街は一瞬にして廃墟となり、そして幾多の尊い命が失われまし

た。原子爆弾は、人類が作った最も残酷で愚かな、そして悲しむべき兵器でございます。

長崎は、この原爆の惨劇を乗り越え、市民の皆様のご努力と助け合いにより見事に復興を成し遂げられました。そして絶えず世界へ向けて平和への願いが進まれ、二度とこの地上に被爆の惨禍が繰り返されぬよう祈り続けてこられました。

しかしながら、地球上には今なお三万個にもなる核兵器が存在するといわれ、小型核兵器の開発競争や拡散が問題となっております。また世界各地ではテロと紛争が絶えることなく繰り返されており、非人道的な悲しむべき状況が続いています。

このような危機的状況が続く中、私たちは、いまここ長崎の地で、六十年前の地獄的な体験を二度と繰り返されないよう、そして戦争と軍備がこの地上から無くなる時

代が訪れるよう、世界平和への誓いを新たにいたしたいと存じます。

また私たちが念願し続けて参りました、世界連邦の理念を日本の国是にしようとする国会決議がいま衆議院において決議されるようとしております。

世界平和に至る道のりは、なお険しく幾多の試練をのり越えなければならぬと存

じます。今こそ、私たちは国家・民族・宗教の障壁を取り除き、お互いが尊厳と理解を深め一致和合し、神仏のご加護のもと、この地上が愛と希望に満ちた平和で幸福な

世界となりませう、国内外の宗教者の皆様と共に手を携え、力の限り努力して参ります。ことを犠牲者の御霊にお誓い申し上げます。「慰霊のことば」とさせていただきます。

◆第三十三回 原爆殉難者慰霊祭

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表
天理教日新分教会長

長崎北支部支部長

高比良 政好

ここに設けられた原爆犠牲者の霊璽の御前に平伏して、お亡くなりになられた霊様方を拝し宗教者を代表し、天理教長崎北支部長・高比良政好……謹んで申し上げます。

私ども人間が想像する事の出来ない恐るべき忌まわしい惨事が昭和二十年八月九日、

ここ長崎の地に於て人間の愚かなる業によりて引き起こされました。それから月日は流れて早くも六十年の歳月を数うるに至りました。

広島と共に未だかつて世界人類が経験した事のない大惨禍をもたらし一瞬にして数多くの尊い御命を奪い、すべてのものを焼き尽くした悲惨さ……その余りにも大きな犠牲は只々目を覆うばかりでございました。

この大惨事に遭遇なされた数多くの犠牲者の霊様方のことを憶えば、お慰め申し上げる言葉もなく……ひたすら悲しく無念やるかたなく春夏秋冬・幾星霜……涙の種とお偲び申すと共に衷心からご冥福を祈り上げるものであります。

私どもは毎年この日に慰霊祭を執り行いかかる惨害を、この地球上のいずれの国の人々の上にも二度ともたらす事のなきよう世界の平和を祈り人類の平安を願ひ、御前に集う多くの市民並びに関係者の皆様と共に犠牲になられました霊様方をお慰め申し上げたいと、花束をはじめ心づくしのもを万感の念を込めて捧げ奉りて慰霊の御祭を執り行う状をお心安らかにお受け取り下さいますようお願い申し上げます。

何卒この深き縁につながる残されし者の、それぞれの身にも家にも、更には町々にも……ひたすらに平和と繁栄のお恵みを頂けるようお見守りとお導きを賜りますよう一同と共に慎んでお願い申し上げます。



ご挨拶

アリゾナ記念館館長（パールハーバー）
ダグラス・A・レンツ

ご来賓の皆様、志を同じくするお仲間の皆様、そしてわが友人の皆様、本日ここにお集まりの皆様のご挨拶ができますことを嬉しく光榮に存じます。

はじめに世界連邦日本宗教委員会からご招待をいただき、こうして日本に來られましたことをありがたく感謝申し上げます。

世界連邦日本宗教委員会の皆様は、十二月七日に開催されますパールハーバー追悼記念式典に過去二十三年にわたって毎年参加され、平和と和解のために積極的な役割を果たしていらっしゃいます。

日本では、毎年春になると開花する桜は人間の魂の象徴的なものとされています。つまり長い年月にわたって日本の文化が変質をとげながらより良いものに高められていくその象徴が桜の木であると聞いていま

す。私は日本人にとって桜はそういう存在であると信じています。

ワシントンD.C.にある桜の木が美しい花を咲かせ春を告げる場面を、私はよく思い浮かべます。そして日本からアメリカ合衆国へプレゼントされたこれらの桜は、首都ワシントンを訪れた多くの国民にどんなにか影響を与えているだろうと思いをめぐらせます。

私は昔から、自然というものに心を打たれ、歴史に興味をもってきました。

「合衆国国有公園サービス」は、未来のわたしがいつまでも楽しみ学ぶことができる文化遺産や自然遺産を守る目的で、設立されました。そのようなところで働くのが私の夢であり、今、その夢が叶ったのです。

私の責任は決して軽くはありません。私の今の立場は、アメリカの財産の一つであるアリゾナ記念館を維持・保存していくことに責任を負うことです。

館長となって私は多くのことを学びました。特に、ただ単にデスクに座って指示を出すだけが私の職務ではなく、それよりもアリゾナ記念館の価値を理解し、犠牲になった人たちについて理解を深めることがよ

り重要な職務であることを学びました。

そして、アリゾナ記念館はアメリカ国民の意識を向上させるのに重要な役割を果たしていることを知ったのです。アリゾナ記念館を訪れた人たちは、アメリカという国の力や弱さ、成功などを学び、触発されたり、悲しんだりするのです。心を動かされたり、怒ったりするのです。このことは私たちが過去を理解するのに必要なことなのです。

第二次世界大戦で私たちが経験した損害に匹敵するものではありません。しかし全ての国が、全ての国民が、傷をいやしていかなければならないのです。アリゾナ記念館というこの聖なる場所で私たち職員は、老若を問わず人々がアリゾナ記念館の存在を理解し、犠牲者に敬意を払うことができるように手助けをしています。アリゾナ記念館は、国も文化も越えて、私たちの肉体や血や心をつなげる場所なのです。そして、今この不確実な世界では、私たちが平和な心で出会うことこそが大きな力となるのです。

第二次世界大戦の退役軍人でもある先代のブッシュ大統領は、パールハーバー攻撃五十周年記念式典で、心に残るスピーチを

されました。彼の言葉は私たちを激励するものであり、和解に向かって私たちが大いに導いてくれるものでした。彼は、本日と同じような集会の中で話をしました、過去の出来事に敬意を表したかったのです。

「今、私が何を感じているのかお話をさせてください。私はドイツ、日本に対して恨みという感情はありません、まったくないので。そして、失ったものはあるけれども、あなた方の心にも恨みの感情がないことを希望しています。」と彼は演説しました。そして最後に述べました、「私たちは敵を友にしたのです。」

癒しというものは、個々によっても、国によっても違いますが、癒していく過程に身を投じることが深い精神的なものへと変わるのです。私も、皆様と分かち合いたい「許し」に関する思いがあるのです。アリゾナ記念館は多くの人々にとって多くの意味をもっています。私が思うにその中の一つで重要なものに「和解」があげられると思います。

私がアリゾナ館の館長に就任してまだ一週間かそこらしか経っていないある日のこと、以前お会いした事のあるディック・フ

イスケさん（彼はパールハーバー攻撃時の生存者の一人）が、私のオフィスに一人の日本人紳士を連れてきました。ディックは、吉田次郎という名のその日本人を私に紹介しました。吉田さんは新聞記事のコピーをくれました。その中の一枚には彼の写真が掲載されていました。言葉の障壁があり、私と吉田さんの会話は短いものでしたので、その時点ではこの紳士が誰なのかハッキリと理解できませんでした。

数分後、フイスケ氏と吉田氏が帰ったので、私はすぐに新聞記事に目を通しました。そこで初めて吉田さんは日本海軍のパイロットであっただけでなく、パールハーバーを攻撃した戦闘機に乗っていたということを理解したのです。熱い感情がこみ上げてきました。つまり、攻撃された側と攻撃した側が一緒になって、私に会いにきてくれたのです。

私は館長に就任してから、また別のパール・ハーバー生存者を知りました。その人エヴェレット・ハイランド氏はアリゾナ記念館のボランティアをしています。彼はパール・ハーバー攻撃で深い傷を負いました。そして兄弟は硫黄島で戦死しています。彼

にとって第二次世界大戦の傷は深いものですが、エヴェレット氏は平和への意識を失うことはありませんでした。

私は、エヴェレット氏がどのような心の傷をそんなにうまく扱っているのかと思いましたが、彼には日本人妻がいて、多くの日本文化を取り入れていることを、やがて知りました。事実、彼は一年のうち数週間をここ日本で過ごしているのです。ここ日本は一人の男が多くのを失った場所でもあり、同時に平和と和解を見出した場所でもあるのです。

この人たちの話はなんてすばらしいものなのでしょう、彼らだけでなく他の多くの人たちも、過去を乗り越えることができたのです、許すことができたのです、そして自身の行動を通して他の人々に教えているのです、何故なら行動は言葉よりも強いからです。

ですから本日、こうして海を渡ってきたことで、日本とアメリカ合衆国が和解を続けていくことに支持を表明している私の姿勢を、行動で示せたことをとても光栄に思っているのです。

慰めと癒しを与えてくれる多くの記念物

があります。私はこの記念物の一つであるアリゾナ記念館をお預かりしていることを大いに誇りに思っています。私たちは過去を乗り越えた人々の話を語りつぐことに誇りをもっています。

最後に申し上げます、広島と長崎を忘れないでいましょう、第二次世界大戦を忘れないでいましょう、それよりもむしろ、敬意をもって、思い出し、心に映し出しましょう、そうすることで理解しあえるのです。この相互理解を通して、過去が未来への道しるべとなるのです。

そして毎年春になれば、満開の桜を、その繊細な美しさを心に思い浮かべましょう。異なる国と国民が、桜の美しさと平和が同じものであるということに、どうやって気づくことができたのかということを考えてみましょう。

犠牲者に哀悼の意を捧げることができ、この機会を与えて頂きましたことに改めて感謝申し上げます。そして両国間の友情と平和のためにご挨拶をさせていただけましたことに感謝申し上げます。

ありがとうございます。

被爆六十一周年

第三十四回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成十八(2006)年八月八日〕

慰霊のことば

世界連邦日本宗教委員会運営委員
社会福祉法人「太陽の町」理事長
福岡 延子

長崎被爆六十一周年を迎え、原爆の犠牲となられました殉難者の御霊に謹んで追悼の誠をお捧げ申し上げ、今もなお後遺症に苦しんでおられる方々に心からお見舞いを申し上げます。

本年も長崎市民の皆様、また長崎県宗教者懇話会の諸先生方により、慰霊式典が、いとも厳粛に斎行されましたことを心より感謝申し上げますと共に、ご関係の皆様のご努力ご尽力に深い敬意を表します。

六十一年前、長崎に一発のプルトニウム型原子爆弾が投下されました。その原子爆弾によって長崎の街は一瞬にして廃墟と化

しました。数千度の熱線、強烈な爆風、恐るべき放射線によって罪もない数多くの人々が亡くなられました。かろうじて生き延びられた方々も、いまだに心と体に傷をかかえ、不安と後遺症に苦しんでおられます。

私は、広島で被爆をいたしました。広島原爆では三十万人を超える尊い命が失われましたが、その惨劇からわずか三日後に、長崎でもその悲劇が繰り返されてしまいました。その後、「ナガサキの惨劇を繰り返すな」「ナガサキを最後の被爆地に」との願いは、多くの人の心を動かし、その願いは世界へと拡がり、いまや人類の共通の祈りとなりました。

けれども、このような悲惨な現実を目の当たりにしたにもかかわらず、核保有国は約三万発もの核兵器を製造し、核実験もたびたび行ってきました。また近年は核兵器

の小型化や核兵器の拡散が進み、いま世界は再び核の危険に直面しています。

私たちはいまこそ、戦争の被爆の悲惨さを伝え、平和の大切さと命の尊さを伝えていかなければなりません。世界各地で発生しています紛争、飢餓、貧困、人権抑圧、そして環境破壊など、平和を脅かす諸問題を、それぞれ自身の問題としてとらえ、その解決のために、宗教や民族、国家という障壁

をも越えて、お互いに理解と尊敬をもって世界平和実現のために行動しなければなりません。

被爆六十一周年にあたり、原爆でなくなった方々のご冥福を心からお祈りいたしますとともに、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けてさらに努力を続けていくことを犠牲者の尊い御霊の御前に謹んでお誓い申し上げ、慰霊の言葉と致します。

被爆六十二年

第三十五回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成十九(2007)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表
西川 實子

ここ浦上の原爆落下中心地の記念碑に鎮まり給う原爆殉難者七万三千八百八十四柱の御霊の御前に長崎県宗教者懇話会を代表

し、謹んで慰霊のことばを申し上げます。昭和二十年八月九日、午前十一時二分、長崎の地に投下された一発の原子爆弾により一瞬にしてすべてのものを焼き尽くした悲惨なあの忌まわしい日から六十二回目の夏が巡ってまいりました。

私たちは犠牲となられた御霊の御遺族の方々の永遠に癒えることのない悲しみや、

今も尚、その後遺症で苦しみ続け、死への不安におびえておられる方々が居られることを決して忘れ去ってはならないと思えます。

今の私たちの幸せは、平和の礎となられた殉難者の方々の犠牲の上にあるのだと思いをせ御霊の御前に献火・献水を献上し一輪一輪の献花に心から慰霊の誠を込めて



▲第35回 原爆殉難者慰霊祭で祈る 平成19(2007)年8月8日

ご冥福をお祈り申し上げる次第でございます。

私たち長崎県宗教者懇話会は、長崎の原爆殉難者慰霊祭の今日、再びこの地上にある忌まわしい被爆の惨事が起きませぬように、宗教・宗派を超えて心を一つにし、平和を祈願する共通の祈りで、共に祈り続け、如何なる国の核兵器も許すまじと固い決意を持って平和世界の実現に更なる努力を重ね

ねてゆく事をお誓い申し上げます慰霊のことばと致します。

みうた 四八九首

犠牲者の 無念のころろ 身に受けて

非核 非戦の 平和きずかん

原爆殉難者の御霊 平安なれ

原爆殉難者の御霊 平安なれ

やります やります やります

◆第二十五回 原爆殉難者慰霊祭

慰霊のことば

世界連邦日本宗教委員会代表

上杉 千郷

天地の神にぞ祈る朝風の
海の如くに波たたぬ世を

これは、昭和十五年、皇紀二千六百年奉祝祭に作曲、作舞された昭和天皇のお詠みになつ御製です。しかし、歴史は、朝風の海のような穏やかな世界平和を祈られた昭

和天皇の御気持ちとは裏腹に、昭和の御代は戦争に突入して行きました。

そして、広島・長崎の原爆投下を迎えることとなります。広島二十万人、長崎七万人の犠牲者、しかも戦後六十年、いまだに被爆の後遺症は、多くの市民を苦しめています。原爆は単なる爆弾ではなく、人類が生み出した悪魔そのものです。わが政府は、原爆が落とされたことに対し、直ちに次のような抗議文をアメリカに送っています。「米国は国際法および人道の根本原則を無視して……本件爆弾を使用するは、人

類文化に対する新たな罪悪なり……。」

原爆投下は戦争の加害、被害を問う前に、「人類文化に対する罪悪」として「全人類および文明の名において」決して許してはならないものです。原爆反対・核兵器廃絶の理念は、ここに原点があるのです。

しかるに、終戦後六十年以上経つ今日でも、未だに、日本の侵略・加害に対する報復、早期戦争終結の手段など説かれ、防衛大臣迄「しようがない」など原爆容認論と取られるような発言が出る始末であり、今なお原爆廃絶の運動はなお道遠しと云わざるを得ません。

我々日本宗教委員会は、被爆地長崎の宗教者懇話会の方々と共に手を携えて、民族・宗教・国籍・思想を越え、文化・文明そして人類を滅亡から救うため、毎年原爆投下の前夜、この爆心地に於いて原爆犠牲者の御霊安かれと慰霊の誠を捧げ、核廃絶を誓う次第です。

諸霊よ来り受けて、この世より核兵器を廃絶し、国家・民族・宗教の対立を無くして、真の平和の招来にお力をお貸しくださることを祈り、慰霊のお言葉といたします。

被爆六十三周年

第三十六回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成二十(2008)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表

楠 達也

「人の命は尊く重い、戦争は人の命を奪う最悪のものである」と諭されても、時代の流れは戦争に突入してしまいました。明治・大正・そして昭和、その結末は原爆投下によって広島二十万人余、長崎七万人余の犠牲者を出してしまいました。

ここ浦上の地は地獄そのものが現出しました。時に昭和二十年八月九日十一時二分、一瞬にしてすべてを焼き尽くした悲惨なあの忌まわしい日から六十三回目の日を迎える今宵、長崎県宗教者懇話会を代表して慎んで追悼の言葉を申し上げます。

「世の中安穏なれ」との人間の願いはひびなく、人間の悲しい業は今日も又世界の

いたるところで悲しい戦いは絶えることなく起こり、核兵器は造り続けられています。だからこそ一歩でも休むことなく平和への努力をうまわずたゆまず続けることが大切です。

私たちは今日ここに犠牲となられた方々に、そして永久に癒えることのない悲しみを抱いておられる方々とともに、

すべての「生きもの」にとって

「いのち」は愛おしい。

己が身に引き比べて殺してはならぬ。
殺さしめてはならぬ

と教誨されたブツダの金言を心に刻み、身に刻んで歩み続けることを誓って追悼の言葉といたします。



▲第37回原爆殉難者慰霊祭 諏訪神社巫女による「浦安の舞」
平成21(2009)年8月8日

被爆六十四周年

第三十七回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成二十二年(2009)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表
PL長崎教会

緇莊 悌嗣

長崎原爆殉難者のすべてのみ霊に対し、
謹んで追悼のまことを捧げます。

六十四年前のあの日、長崎の空に立ち上がった原子雲の下、巨大な火の玉が町中を飲み込み、一瞬のうちにすべてを焼き尽くし、七万人余の人々が犠牲になりました。

思えば人間同士が争ったり殺し合う野蛮な戦争を繰り返して、何の平和があるのでしようか。国としてのイデオロギーの違いや、民族間の習慣の違いはあっても、人間は神仏の子としては、すべてを超えて同じだと思います。私達はともすると自分の考えや思いに囚われたり、セクシヨナリズム

にとわれたりしがちですが、それでは真の平和はほど遠いと言わざるをえません。

人種を越えて、どんな人間に対しても、大きな心で包み込む愛を持ち「同じ地球という星に住む仲間だから」という心で、相手を認め合い、理解し合うことこそ、平和につながる道と信じます。

夫婦家族が仲良くする家庭は、穏やかな明るい空気に包まれます。汚染のない自然環境の中で、生きとし生けるすべてのものが、過不足のない丁度よいバランスの中でこそ生きる幸せを感じます。

他を損なうことなく、美しくハーモナイズ(調和)された社会の実現こそ、真の平和と言えるのではないのでしょうか。世界中の人と人、地域と地域、国と国が、すべてこのような境地に生きるようになれば、人類は今以上に無限の進歩を遂げ、世界の平和が具現されるものと信じます。



▲第37回原爆殉難者慰霊祭 トーラン枢機卿も参列

近年の地球環境の悪化も、さまざまに社会不安も、人心の荒廃もとどまるところを知らない現状を思うとき、人類の未来に大きな影を落とすこととなります。

ここに犠牲となられた殉難者の皆さまのためにも、一日も早く、一刻も早く、社会の平和、国の平和、そして地球の平和を到來させることこそ、霊を慰める唯一無二の道と堅く信じ、ここにその決意をお誓いして追悼のことばといたします。

被爆六十五周年

第三十八回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成二十二年(2010)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表

日本聖公会長崎聖三一教会司祭

堀尾 憲孝

今から六十五年前の一九四五年八月九日十一時二分、原爆搭載機ボックス・カーが落とした一発の原子爆弾によって、無惨にも一瞬のうちにあまたの尊い命が奪われました。

原爆投下後五年の歳月を経た一九五〇年(昭和二十五年)七月に、原爆資料保存委員会は、死者七万三千八百八十四人、重軽傷者七万四千九百九人、合計十四万八千七百九十三人という、恐るべき死者数・重軽傷者数の公式発表を致しました。

当時の長崎市の人口が推定二十四万人と

いうことですので、およそ市民の六割という想像を絶する方々の命が失われ、また重大な損傷を受けられたこととなります。重軽傷者の方々の多くが苦しみのうちに亡くなられました。生きながらえることが出来た方々も、被爆後遺症による苦痛と、筆舌に尽くし難い不安にさいなまれながら、永い年月、闘病生活を余儀なくされました。今、私たちが踏みしめるこの大地では、六十五年前の八月九日午前十一時二分前まで、戦時下ではあるものの、いつものように工場で汗水流して働き、学校の教室で勉学に励み、家族の為に昼食や弁当を用意し、幼な子にお乳を含ませたりしていた市井の人々がいました。そして遠く故国を望みながら強制徴用で過酷な労働を強いられていた人々、捕虜として獄中にありながら戦争終結を待ち望み帰国の日を夢見ていた

人々、このような尊い生命、七万三千八百八十四名もの命が一瞬にして断ち切られたのです。

いま地上で生命を受け継いでいる私たちは、このような長崎原爆殉難者の全ての御霊に対して、心からなる哀悼のまことをお献げ致します。同時に、長崎を核兵器使用最後の地にせんがため、核兵器所有の全ての国々に対して核廃絶の訴えをたゆむことなく行っていくことこそ、この地で生きていく私たちの責務であり、殉難者の無念に報いる唯一の道であると信じます。

宗教にたざさわる私たちの共通の目的は、生きとし生ける全ての人が幸福な人生を過ごせるように、願い・祈り・努力することにあります。しかし、個々人がたとえ幸せを手に入れることが出来たとしても、戦争という巨大な暴力は一瞬にして個人や家庭の幸福を奪い去ってしまいます。まことに、人が幸福に生きるために、平和は大前提であり絶対の条件です。私たち宗教者は、一人ひとりの方々の幸せと、地上の平和と核兵器の無い世界の実現のために努力することをここに誓い、慰霊のことばと致します。

被爆六十六周年

第三十九回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成二十三年(2011)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表

小田 義海

謹んで原爆殉難者、七万五千柱のみ霊に申し上げます。

本日ここ原爆落下中心の聖域に私共宗教者、信仰者、市民県民多数の方々が集い、世界平和への祈りを捧げています。

諸外国の一部には未だ憎しみと暴力の戦火は絶えることがありませんと申せ、人類の叡智はゆるやかに戦争のない世界の実現に向かって歩んでいます。

本年二十四周年を迎える「比叡山世界平和祈りの集い」を始め十一年目を迎える地元長崎高校生の核廃絶百万人署名運動と欧米学生との対話、更には世界宗教者平和会議(WCRP)提唱の青年宗教者、信仰者

が中心とするアームズダウンキャンペーン軍事予算十%削減一千万人署名運動など、総じて国連も又、世界の秩序を構築すべく活撥にその活動を展開しています。加うるに、万教帰一、万物同根を共通理念とする、我が国の精神文化は、これからの世界平和実現への大切な原動力となることを確信致します。私共は積尊の説き給う、

天下は太平で、あ
順り
天は清らかに明るく照らし
日月清明
風雨時に応じ
災厲も起らず
國は豊に國民は安らかに過ごし
兵や武器を用いる争いもなく
崇徳を崇め仁を尊び
務めて礼儀と謙讓の道を修めます

の理想の国家像を求めて、歩んでまいります。私たち宗教者と信仰者は重ねて、み霊の鎮魂と御遺族の皆様方の安寧を心から祈念し、神仏のご加護の下、世界平和への絶ゆまぬ努力をお誓いして慰霊のことばとします。

合掌

第三十九回 原爆殉難者慰霊祭

慰霊のことば

世界宗教者平和会議(WCRP)
日本委員会
非武装・和解委員長

松下 日肆

長崎原爆殉難者のすべての御霊に謹んで慰霊の誠を捧げます。

一瞬のうちにすべてを焼き尽くし、尊い命を奪い去ったあの日から、六十六年。私達の想像を絶する状況の中で、どんなに辛く、苦しかったことでしょう。私たち宗教者は、二度とこのような悲劇が起こらないよう不断の努力をしまいらなければなりません。

今年、三月十一日に発生した東日本大震災は、未曾有の被害をもたらしました。この震災の影響によって福島原子力発電所の事故が発生し、放射性物質による汚染が拡大し、人間を含めあらゆるもののいのちが危機に瀕し、自然環境も社会環境もその存立が脅かされています。

六十六年前に私たちは長崎と広島に落と

された原子爆弾によって、放射能の脅威にさらされました。この度の原発事故によって、再び、放射能の恐ろしさを実感しております。利便性や経済効率を優先したライフスタイル、将来世代に対する責任、地球社会の相互依存性への認識を欠いた生き方への問いかけが投げられました。

WCRPは世界の宗教者と共に、今一度、

「失われたいのち」への追悼、「今を生きるいのち」への連帯、「これからのいのち」への責任を深くかみしめてまいります。最後に、WCRPを代表し、原爆殉難者の皆様が尊い犠牲をもってお示し下さった平和への願いを真摯に受け止め、決意を新たにこれからの平和への精進をお誓い致します。

被爆六十七周年

第四十回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成二十四(2012)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表
立正佼正会長崎教会長

田平 樹男

なれますでしょうか。

この爆心地に参集いたしました私たちは、宗教者をはじめ各団体の代表者、そして多くの市民の皆様です。

私たちは原爆の犠牲となられた皆様に対し、謹みて哀悼の意を表すとともに、殉難者の皆様が安らかな眠りに就かれますよう、深くお祈りを申し上げます。

また、未来に生きる人類が皆様とおなじ

苦しみに出会うことのないよう、平和への取り組みに邁進させていただくことをここにお誓い申し上げます。

六十七年前の八月、日本各地では空襲警報のサイレンが鳴り響き、大勢の民間人がこの長崎の地に一発の原爆が投下されました。その閃光と爆風は人間のいのちのみならず、生きとし生ける物のいのちを一瞬にして奪い去ってしまったのです。

当時の犠牲者は七万数千人といわれています。しかし、その後も被爆された多くの方は原爆症に苦しみ悩み、やがて世界を異にし、原爆死没者名簿にその名前が記載さ

この地に原子爆弾が投下され、無残にも尊いいのちを奪われた殉難犠牲者の皆様、ここにおられる大勢の参列者の姿をご覧に

れるようになりました。昨年までは百五十七冊の名簿に十五万五千五百五十六人の名前が記載されていました。今年では三冊増え、三千二百七十四人の新たな名前が追記されました。原爆犠牲者はまだまだ跡を絶たないのであります。

私はこの慰霊祭を通して平和な家庭、平和な社会、平和な国家、そして平和な世界を築いていく取り組みこそが、原爆殉難者の皆様に対するまことの慰霊に繋がるものと信じています。

願わくは此の功德を以って 普く一切に及ぼし

われらと衆生と皆共に仏道を成ぜん

(三三回)

合掌

本年、四十回目の原爆殉難者慰霊祭を迎えることが出来ました。今後五十回、七十回、百回と平和の大切さを伝え、その輪がとこしえに続くことを念願致す次第です。

◆ 第四十回 原爆殉難者慰霊祭

慰霊のことば

世界宗教者平和会議(WCRP)
日本委員会会長

庭野 日鏡

すべての長崎原爆殉難者の御霊に謹んで慰霊の誠を捧げます。

一九四五年八月九日、本日のような暑い夏の日、一発の原子爆弾が投下されまし

た。街は焦土と化し、七万四千人もの尊い生命が奪われました。あれから六十七年、かけがえのないご家族を亡くされたご遺族の悲しみは、長い歳月を経ても癒されることはありません。また被爆した方々は、今なお後遺症に苦しんでおられます。戦争は、これほどまでに大きな傷跡を残し続けます。

誰もが平和を望みます。しかし、今この瞬間にも、世界の各地で紛争が起きています。怒りに怒りで応じ、暴力に暴力で対抗

することは、歴史が示すように、新たな暴力、絶えることのない不信と争いの連鎖を生み出すだけです。

仏教の法句経に『まことに、怨みは怨みによっては消ゆるることなし。慈悲によってのみ消ゆるものなり』とあります。

またキリスト教の聖書に『悪をもって 悪を報いず、侮辱をもって 侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい』とあります。

この慈悲と愛の精神を広げていくことが、怒りの連鎖を断ち、共に生きる世界を築くただ一つの道でありましょう。

長崎に投下された原子爆弾は、「核」の恐ろしさを世界の人々に知らしめました。そして今、東日本大震災による福島原発の事故が、核エネルギーに依存することの危うさを現代人に問いかけています。WCRP日本委員会は、今後も「共にすべてのいのちを守る」という観点から議論を深め、具体的な行動へと結びつけてまいります。

慰霊祭の第四十回という節目にあたり、真に平和な世界の実現に向け、一層精進させて頂くことを、殉難者の御霊に改めてお誓い致します。

被爆六十八周年

第四十二回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成二十五(2013)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表
カトリック中町教会主任司祭

久志 利津男

決して忘れえぬ長崎の地、そして八月九日、自ずと原爆の犠牲となられた殉難者の御霊に手を合わせるこの場所でのこの日の時を迎えました。あの原子爆弾で一瞬のうちにも多くの命が奪われた皆様に対して心からの哀悼の意を表すとともに、安らかに憩われますようにとお祈りをささげるために、私たちは集いました。

今、様々なことが思い巡らされ、香のかおりを受けながら個人を偲ぶ皆様と想いを一つにして私はこの場所に佇んでいます。母がなくなつて四十五年となりました。享年四十二歳。入退院を繰り返していた母の

枕元には赤い手帳がありました。次第にやせていく姿が癌によるもので、その病がどのようなものかも知らずに、「たくさん食べると治るよ」とさりげなく言う十歳の私に、涙を流しながら頭をなでてくれた母の手の感触がいまだに残っています。その母が原爆にあったこと、あの手帳が被爆者健康手帳であったことは後で知りました。

悲しい母の死は人の運命を左右するほどの痛ましい出来事として私の脳裏にしっかりと刻みこまれていきます。「あの戦争がなければ」「この原爆が落とされなければ」と声無き叫びを原爆の犠牲となられた方々とともに叫びかけているのは私一人ではなく、宗教を越え、国を超えて今日こうして原爆殉難者慰霊祭に参集し心からの祈りをささげている私たちであります。

あれから六十八年。平和を切望しながらも現実には多くの争いで亡くなり、心身とも

に苦しんでいる人たちがどんなに多いことでしょう。この有様に私たちは何ができるのか自問する時に、それが「祈り」だと諭してくれます。心底から真剣に平和のために祈るならば、必ず自分の中に平和を見つけて出し、自身が平和となります。そしてその祈りは自然に平和を実現するための行動に傾いて行きます。平和は与えられることより、与えていくことなのですから。

第四十一回 原爆殉難者慰霊祭にあたり、香のけむりとともに平和の祈りが殉難者に届きますように、そして今後も戦争のない平和な日本が永続されることよって世界平和構築となりますよう念じまして慰霊の言葉といたします。

主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光を彼らの上に照らし給え。彼らの安らかに憩わんことを。

アーメン。



慰霊のことば

(公財)世界宗教者平和会議(WC
RP)日本委員会理事

田中庸仁

すべての長崎原爆殉難者の御霊に謹んで慰霊の誠を捧げます。

一九四五年八月九日、この地に原子爆弾が投下されました。一瞬のうちにすべてを焼きつくし、七万四千人もの尊い生命が奪われたあの日から六十八年が経とうとしています。「助けてください」「水をください」「お母さん、お父さん」という叫び声―かけがえのないご家族を亡くされたご遺族の悲しみ、あの日の悲惨さは、長い歳月を経ても癒されることはありません。被爆した方々は、今なお後遺症に苦しんでおられます。核兵器は、人々を、自然を、そしてこの地に存在する生きとし生けるもののすべての生命を、一瞬にして奪い去り、さらには、将来世代にまで苦しみを与え続けています。そうした影響を受けてなお、被爆者の方々

は核兵器の廃絶に向け、先頭に立って取り組まれてこられました。その尊いご努力によって、二〇一〇年のNPT再検討会議では、国際政治ではじめて核兵器使用における「人道的被害に対する懸念」が全会一致で採択され、現在では、核兵器がもたらす壊滅的かつ非人道的な影響から核兵器の完全撤廃を求める動きが世界で活発化しています。

『人道イニシアチブ』と呼ばれるこの動きは、これまでの核兵器による国家安全保障の概念を覆し、いかなる場合においても核兵器の使用を禁止するものであります。

本年十一月には、オーストリアのウィーンで第九回WC RP世界大会が開催されます。九十ヶ国が加盟するWC RPネットワークを通して、日本の宗教者は改めて世界の宗教者に核兵器廃絶を訴え、行動を呼びかけてまいります。

長崎に投下された原子爆弾は、「核」の恐ろしさを世界の人々に知らしめました。そして今、東日本大震災による福島原発の事故が、核エネルギーに依存することの危うさを現代人に問いかけています。WC RP日本委員会は、宗教者として「共にすべてのいのちを守る」という観点から議論を深め、

具体的な行動へと結びつけてまいります。真に平和な世界の実現に向け、一層精進させて頂くことを、殉難者の御霊に改めてお誓い致します。

慰霊のことば

長崎県明るい社会づくり運動
推進協議会会長
長崎県知事

中村 法道

第四十一回原爆殉難者慰霊祭に当たり、原子爆弾の犠牲となられた方々の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

長崎は、八月九日、六十八回目の原爆の日を迎えます。一発の原子爆弾により、一瞬にして七万数千名ともいわれる尊い命が失われ、街は廃墟と化しました。

住み慣れた街を破壊され、大切な家族や友人を亡くされたご遺族の悲しみは、長い歳月を経ても決して癒えることはありません。また、一命をとりとめられた

被爆者の方々の中でも、今なお後遺症に苦しみ続けておられる方々が多くいらっしゃいます。

この核兵器の惨禍を、決して忘れてはならず、二度と繰り返してはなりません。そのため長崎県では、八月九日を「県民祈りの日」とし、毎年、犠牲者の方々に哀悼の

意を捧げるとともに、様々な機会を通して、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を訴えてまいりました。

今後とも、被爆地である長崎から声をあげ、原爆の悲惨さや苦しみを全世界の人々へ発信し、核兵器廃絶と世界恒久平和を粘り強く訴え続けていかなければならないと

考えております。

結びに、本慰霊祭の開催にご尽力された長崎県宗教者懇話会の皆様方に心から敬意を表しますとともに、ご参列の皆様のご健康とご多幸を祈念いたしまして慰霊のことばといたします。

◆ 第四十一回 原爆殉難者慰霊祭

慰霊のことば

長崎県明るい社会づくり運動推進
協議会会長
長崎市長

田上 富久

本年も、長崎県宗教者懇話会の皆さま方に御尽力を賜り、第四十一回原爆殉難者慰霊祭が執り行われますことを心から感謝申し上げます。

六十八年前、原子爆弾による壊滅的な被害を受けた長崎では、核兵器による惨禍を二度と繰り返してはならないと、核兵器廃絶と世界恒久平和を訴え続けてきました。

二〇〇九年四月、アメリカのオバマ大統領は、チエコのプラハで「核なき世界」を目指すと演説し、今年六月には、ドイツのベルリンで具体的な核軍縮の方針を明らかにしました。大統領が核兵器廃絶にむけて決意表明したことを歓迎するとともに、市民社会からも核兵器廃絶の流れを確実に力強いものにしていかなければならないと考えています。

長崎では、今年十一月二日から四日まで、「第五回核兵器廃絶―地球市民集会ナガサキ」を開催し、市民や国内外のNGOに参加を呼びかけています。市民の力を結集する絶好の機会であり、被爆地から核兵器廃絶へむけた国際的な機運を高めてまいりたいと思っております。

毎年八月八日の夕べに宗教・宗派が異なる皆様、信仰の垣根を超えて落下中心地に集まり、原爆殉難者を追悼して平和を願う慰霊祭の光景は、人間が互いに手を結びあい、信頼を築くことの大切さを人々に伝え、世界の人々に多くの希望をあたえるものだと思っております。皆様を多くの人々に知ってもらい、平和な世界の実現のためには互いに共存することが大切であることを今後も伝え続けてくださることを願っております。

最後に、原子爆弾の犠牲となられた方々の御冥福を心よりお祈りいたしますとともに、長崎県宗教者懇話会の皆様に深く御礼を申し上げます、私のごあいさつといたします。

被爆六十九周年

第四十二回 原爆殉難者慰霊祭

〔平成二十六年(2014)年八月八日〕

慰霊のことば

長崎県宗教者懇話会代表
興福寺住職

松尾 法道

長崎県宗教者懇話会は、第42回原子爆弾殉難者慰霊祭を開催し、原子爆弾で命を奪われた皆様に心からの哀悼の意を表すとともに、「平和を願う」ため、ここ原爆落下中心地を集っております。

1945年8月9日、この地に投下された原子爆弾は、一瞬のうちに全てを焼き尽くし、7万4千人もの尊い命を奪いました。「50年間は草木の一本も生えない」、そう言われて69年。長崎は、破壊的な状況から、緑豊かな樹木に覆われた町へと復興しました。

いまや、戦争があったことすら知らない

世代が多くなり、戦後という言葉さえ薄れようとしています。ここに参集した私どもは、片時も皆様のことを忘れることはありません。現在も争いや戦火の絶えない国ぐにがあります。私たちの日本は平和な日々が続いています。これも、尊い犠牲となられた皆様の御蔭と、折に触れて感謝しております。

戦後の長い歳月を経ても、大切な家族を失ったご遺族の悲しみは決して癒されることはありません。また被爆した方々は、今なお後遺症に苦しみ続けておられます。

戦前、浦上に事務所を構えていた私の叔父は、原爆投下のその日、所用ができて他所に廻ったおかげで助かりました。当時の惨事を幼い私に語るとき、「助かってよかったね」というと必ず黙り込んでおりました。亡くなるまで「自分だけが助かって」と自責の念に駆られる日々を送っていたよ

うに思われます。

この核兵器の惨禍を決して忘れてはなりません。戦争という過ちが、再び現実となる恐れが高まりつつある今、原爆の犠牲となられた皆様方の痛みや苦しみ、悔しさを思い、二度と過ちは繰り返さない、そしてこのことを世代から世代へとしっかり伝えていくことを誓い、慰霊の言葉と致します。

最後に平和活動家で原爆語り部の故沼田鈴子さんの言葉です。

「証言は、平和の一粒の種まきです。多くの方々と手をとりあって一粒ずつの種まきの輪をひろげましょう。美しい地球、素晴らしい未来のために、身近なところから、心の種をふやしてまいりましょう。

最高の幸せは平和であること。無知は、愚かさにつながります。平和なときこそ、真実をみつめ、狂っている世の中や社会を見据えれば、自分自身の行動がみえるのではないのでしょうか。

国と国が理解し、民族と民族が信頼し愛し合えば、心と心は通じあうのではないのでしょうか。世界すべての人達が平和で幸せに安心して暮らせるように願いながら、証言の旅をつづけています。」

慰霊のことば

世界連邦日本宗教委員会会長
田中 恆清

長崎被爆69周年を迎え、原爆の犠牲となられました殉難者の御霊に謹んで追悼の誠を捧げますと共に、長崎市民の皆様、長崎県宗教者懇話会の皆様、そして関係各位のご尽力により、かくも厳粛に慰霊祭が斎行されますことに衷心より敬意を表します。

さて、69年前から変わることなく、揺らぐことなく私たちは平和の祈りを捧げてきました。そしてそれは今日も変わりません。平和とは本来、何も特別なことではないはずです。私たち日本人は、普段の生活のなかで特別に意識することなく、感謝の気持ちや互いを尊重する心、自然と共に生きるという価値観などを育んできました。それはすなわち、神仏への感謝や畏敬の念が様々な形で根付いているということであり、時には「おくんち」のように、人々が相集い心ひとつに感謝の気持ちを表す「まつ

りごと」を行ってきました。

様々な困難を乗り越えながらも大切な心を見失わずに、自然とともに、人々が支え合いながら、日々懸命に生きることでこそが、私たちにできる最大のことであり、そして最も大切なことかもしれません。

しかし今、私たちを取り巻く環境は大きく変化し、日々めまぐるしく移り変わる価値観や過剰に溢れ出す情報に翻弄され、本当に大切なものや真実といったことを見極



▲第42回原爆殉難者慰霊祭 献花
平成26(2014)年8月8日

めることが困難な状況に陥っています。

今日この特別な日に、心ひとつに平和の祈りを捧げるにあたり、世界中に蔓延する諸問題が解決へと向かうもとは、一人ひとりの本当の平和な暮らしこそが基盤であり、それがやがて世界の平和へと結びつくものと改めて思い直し、宗教者としての務めを果たすと共に、今この一瞬を懸命に生きることをお誓い申し上げ、慰霊の言葉といたします。

慰霊のことば

世界宗教者平和会議(WCRP)
日本委員会 監事
日本ムスリム協会理事
樋口 美作

すべての長崎原爆殉難者の御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。
あの日から69年が経とうとしております。1945年8月9日、忌まわしい「B-29」から投下された一発の原子爆弾に



▲第42回原爆殉難者慰霊祭 平和の誓い

よって、長崎の街は一瞬にして焦土と化し、7万4千人を超える方々の尊い命が奪われました。犠牲になられた方々の思い、そしてかけがえのないご家族を失われたご遺族、そして今なお後遺症に苦しんでおられる方々の悲しみは、長い歳月を経ても忘れることも癒されることはありません。

このような悲劇を絶対に繰り返してはなりません。しかし現実には、今この瞬間にも世界各地で紛争が起き、一人でも多くの人々を殺傷するために、非道な核兵器をはじめとする大量破壊兵器の開発が進められ、使用される危険が高まっているのです。

このような現状に対して、私は、宗教者

として忸怩たる思いと心からの反省の念を禁じ得ません。それは1970年に、WCRPの設立のもとになった宣言文の一節に次の言葉があるからです。「われらの宗教的理想と平和への責任とにそむいてきたことを宗教者として謙虚に、そして懺悔の思いをもって告白する。平和の大義に背いてきたのは宗教ではなく、宗教者である。宗教に対するこの背反は、改めることができ、また改めなければならない。」まさに、核兵器が存在し平和が脅かされている現状に対して、宗教者として懺悔の念を表す次第です。

これまで私たちは、世界平和実現に向け、世界の各宗教指導者と対話を重ねてきました。そして昨年11月には、ウィーンで開催された第9回WCRP世界大会に参加し、世界の宗教者とともに「他者と共に生きる喜び」をテーマに、平和実現の問題を語り合いました。大会では日本の宗教者として核兵器廃絶を呼びかけ、世界の宗教者と「核のない世界」への連帯を強めました。そして「不寛容は憎悪を生み、平和を脅かす」という精神のもと、それぞれの宗教が、その真髄にしたがい、真の寛容精神を発揮す



▲第42回原爆殉難者慰霊祭 参列者献花

ることによって戦争を無くし、「共にすべ
てのいのちが尊ばれる世界」の実現に向か
って行動することを誓い合いました。

今日、世界宗教者平和会議日本委員会は、慰霊祭の第42回目にあたり、世界の宗教者とともに「核のない真に平和な世界の実現」に向け一層対話を深めるべく精進させて頂くことを、長崎原爆殉難者の御霊に改めてお誓い申し上げ、慰霊の言葉とさせて頂きます。